

は無く、一體である。天主様の配せ給うたものを、人が分つてはなりません。婚姻は天主様の御定めになつた制度で、その縁は永久に解くを許さぬ。如何なる人も、天主様に對して權威は無い。天主様の御定めになつたものを破壊らうとするのは、自然法に逆ひ、天主様の御誠命に戻る理由になるのだ。意外の御返答にフアリザイ人等は一寸、一應は面喰つたが、其まゝ悄然と引退りたくはない。

然らば離縁状を與へて、妻を出す様にと、モイゼが命じたのは、何うした譯ですか。

モイゼ程の人が、天主様の御誠命に戻り、その可とし給はぬ事を許す筈がありますか、と一本突込んで來たのです。因つてイエス様は、モイゼが其んな許を與へる理由を明かにして、彼等の難問にお答へなさいます。

諸君の心が頑な爲に、モイゼは妻を出すことを諸君に許したのです。元始から然うあつたのちやありません。で私は諸君に申します。すべて私通の故に非ずして、其妻を出し、他の女を娶る人は姦淫を犯すのです。又出された女を娶る人も、姦淫を犯すのです。モイゼが假に許して置いた所を取消して、婚姻を最初の状態に復せしめ給うた。もうメツシ

アの國(聖會)に於ては、離婚は絶対に許されない。配偶者の一方が不義を働いた時は、別居することは出来る。然し其爲に縁が切れる譯ではない。其人の生きて居る間は、やはり夫であり妻であるのであります。

【獨身に就て】、離婚が絶対に出来ないと聞いて、弟子等は少からず心を擾がした。寓宅へ御歸りになつてから、彼等は復同じ事を問ひました。イエス様も同じ答を繰返して、

誰にしても妻を出して他に娶るのは、彼女に對して姦淫を行ふのです。又妻が其夫を棄て、他に嫁いでも、同じく姦淫を行ふのです。

と仰有つた。弟子等はいよゝ氣遣つて來た。

人の妻に於ける關係が其んなでしたら、娶らぬに限りませぬ、

と申しました。我身の都合から割出して、寧ろ獨身生活が優しだ、と思つたのである。イエス様は、彼等の主我的獨身生活に對して、理想的童貞美を高調せられた。然し童貞美を高調しながらも、結婚生活を賤しめなかつたのではない。

人は皆この言を肯容れるものではない。肯容れるのは唯之を戴いた者ばかりです。即ち母の

胎内から、生れながらの闇者があります。人から爲された闇者があります。又天國の爲に自ら作せる闇者もあります。肯容れ得る人は肯容れなさい。

茲の「闇者」とは、廣く獨身者を指したものである。獨身者にも種々ある。一、生來の不具者で結婚の出来ない人がある。二、婦人に近き得ない様に、自ら身を傷けた人がある。是等は仕方なしの獨身者で、道徳上、何等の價値も無い。三、完全な身體を持ちながら、天主様の爲に性慾を絶ち、立派に獨身生活を遣り通して行く童貞者もある。「天國の爲に自ら作せる闇者」とは是を申すのだが、然し童貞の徳が如何に麗しく尊ぶべきであるにせよ、つまり特殊の理想美たるに過ぎない。殊更選を受けた人のみが、之を追求める。強ち童貞でなくとも救靈は全うし得られる。寧ろ結婚生活こそ一般の常則なんだから、イエズス様も終に附加へて、「肯容れ得る人は肯容れなさい」と仰有つたのであります。

公教聖職者の獨身主義を攻撃し、人倫に戻るの、何のと仰有る御方がある。十分お念を入れて主の御言をお讀みになりましたら、其んな妄言が吐かれたものではありますまい。

(二) ラザルの復活 (二ノ一五三)

【ラザルの病篤し】、イエズス様は幾日前からカペレアに留り、御教を宣べ、奇蹟を行ひ等して居られた。時にマルタと其姉妹マリアの里であるベタニアには、兄弟のラザルが大病に打臥して居る。マリアと云ふは、嘗て香油を主に注ぎ、自分の頭髮で以て御足を拭ひ奉つた婦人で、ラザルは其兄弟であつた。彼等はガリレアに於て主を歓迎した事がある。又主に従つて、ガリレアからエルザレムへ上つたと云ふのだから(一五ノ四〇)、其々にヨルダン河を涉り、ペレアの地へ来たものと思はねばならぬ。然しイエズス様が暫く足をペレアにお駐めになる事となつたので、彼等は一足先にベタニアへ赴き、イエズス様をお受け申す準備をして置かうと、其まま路を續けたものらしい。然るに思ひ掛けなく、ラザルが病に罹り、日にまし危篤になり行くので、姉妹は人をイエズス様の許へ遣して、

主よ、御身の愛し給へる人が病うて居ります、と告げさせた。二人の美しい信仰は此短い語の中に溢れて居る。御出で下さいの、癒して頂戴の

と、云ふには及ばぬ。甚く愛して居らつしやるんだから、其事をお知らせ申さへすれば夫で澤山よ、と信じて疑はない二人の信仰の熱烈さを思ひなさい。イエズス様は使者の云ふ所を聞いて此の病は死に至るものではない。天主様の御光榮の爲、天主の御子が、之に由つてその光榮を得んが爲のものです、

とお答へになつた。平素からイエズス様は、マルタとその妹マリア、及びラザルを愛して居られました。然しラザルが病に罹つたとお聞きになつても、直に行き給うとは致しなさらぬ。二日の間は其ま、同じ處に御滞留になつた。御父の定め置かれた時期を早めて、事を爲すのは宜しくない、と思召しなされたからです。漸く二日の後に至つて弟子等に、

再びユデアへ行きませう、

と仰せられた。弟子等はエルザレムに於ける反對熱の如何に盛なるかを知つて居る。先生の身の上を深く氣遣ひ、

ラビ(先生)、唯今ユデア人は先生に石を投げようと思しました。夫に復彼處へ御出になりますか？

と注意しました。イエズス様は答へて仰有つた。

一日に十二時間ありませんか。誰だつて、晝の中に歩けば、此世の光を見て居る。蹟く憂は無い。然し夜歩いては、身に光が無いから、蹟きます。

今は未だ日中だ、危険は無い、恐れるには及ばぬ、と云つて、先づ弟子等の胸を静め、夫から私等の親友ラザルは眠つて居る。然し私が行つて、之を眠から喚醒してやりませう、と曰うた。ラザルが終に最後の目を瞑つたことをお告げになつたのです。然し弟子等は、主の御言を普通の睡眠の意味に取違へた。大病の時に睡眠が来るのは、悪い徴候ではない。

主よ、眠つて居るのでしたら、彼は癒わますでうませう、

と申しました。因つてイエズス様は彼等に有の儘を打開けなさいます。

ラザルは死にました。私は諸子の爲、諸子に信せしめんが爲、彼處に居なかつた事を喜びます。兎に角、彼が許へ行きませう。

イエズス様が決然袂を振つて御立ちになつたのを見て、ヂバムスと呼べるトマは、相弟子一同に向ひ、

「さア我々も行つて、先生と共に死にませう、と曰ひました。ユデアへ行くのは、虎の穴に入る様なもの、万死を冒す覚悟であらねばならぬ弟子等は、いよく其の決心になつたのであります。」

【ベタニアに於て】、イエズス様はベレアの地を去り、ヨルダン河を渡り、ベタニアへ赴かれた。ベタニアはエルザレムを去ること僅に二十五六町、橄欖山の東側の中腹に位し、巴旦杏や橄欖や、無花果等の青い茂みの中に、見ね隠れして居る静な邑である。今日では餘程寂れ果て、倭い、粗末な小屋が、二三十軒ばかりも立列べる一寒村に過ぎません。

さてイエズス様がベタニアへ御到着になつたのは、ラザルが死んで墓に葬られてから四日目でした。マルタとマリアの許には多くのユデア人が集つて、兄弟の死を吊ひ、二人を慰めて居る。奇蹟を行ふには、願つても無い好機會だ。イエズス様が御出になつたと聞くと、マルタは直に立つてお迎へ申した。マリアは尙家の内に坐して居る。マルタはイエズス様に向ひ、主よ、若し貴方様が此處に在したならば、私の兄弟は死ななかつたで御座いませうに！でも私は承知して居ります。天主様に何事をお求め遊ばしても、天主様は之を貴方様に御興

へ下さいますことを。

復活さして下さいませ、と言はん許りに申し上げた。イエズス様は彼女に信仰を起させるが爲、直にオイソレと明白な御返答はなさいません。

御兄弟は復活しますでせう、と仰有れば、マルタは答へて申します。

左様で、終の日、復活の時には、彼が復活すべきことは、私も承知して居ります。

イエズス様は重ねて曰うた。

私は復活です。生命です。私を信する人は死すとも活きませう。又活きて私を信する人は、すべて永遠に死することはありません。あなたは之を信じますか。

堅い山をも動かす程の信仰を要求になつた。マルタは直に答へました。セザレア市の門前に於ける聖ペトロの宣言にも劣らぬ信仰を表白しました。

主よ、左様でいます。私は主が活ける神の御子、キリスト様に在して、此世に來り給うたのだ、と云ふことを信じます。

と斯う申し上げてから、立去つて静に妹のマリアを呼び、先生が御出になつた。お前を呼んで居らつしつてよ、

と囁いた。マリアは之を聞くや、ツと起上つて、イエズス様の許へ駆け出しました。時にイエズス様は未だ里には御這入りにならないで、マルタが御迎へ申し所ところに在あした。マリアと家に在あつて之を慰めて居たユデア人等は、彼女が急に起上つたのを見て、「墓へ泣きに行くのよ」と云ひつゝ、後に随したがひました。マリアはイエズス様の所ところに行き、之を見るや、御足の下もとに平伏して、

主よ、若し貴方様が此處こゝに在あしたならば、私の兄弟は死ななかつたでこゝらいます。

と申した。ラザルの病中に幾度も言ひくした語であつたと見ね、マリアもマルタと同じ泣言を繰返した。然しマリアはマルタよりも一層感情の強い方ほうでしたから、マルタの如く言を續け得つないで、唯潜然と泣くのみであつた。

マリアが泣き、伴ともひ來れるユデア人も泣いて居るのを見て、イエズス様までが自おのづから御胸おんむねは感かん激げきし、御心みこゝろは動うごき、

何處どこに彼かれを置おきました、

と御尋ねになりました。

主よ、御出おいででて、御覽ごらん下さいませ、

と彼等は申しました。イエズス様は聞いてハラ／＼と涙をお流しになつた。夫それを見たユデア人等は、御覽ごらん、如何いかにに彼かれを愛あいして居ゐらつしつたよ、

と申しました。中なかには、

生來うまれつきの盲者めくらの目さへ明けてやつた此人このひとが、彼かれを死しなさぬ様やうに出來できなかつたんだらうか、

と云ふ人もあつた。イエズス様は復心中またしんちゆうかんけき感激しながら、墓はかへ御出おいでになりました。

【ラザル終つひに復活よみがへる】、ユデアの墓はかは、丘をかの横腹よこはらを刳くつた洞穴ほらあなで、入口いりぐちには石いしを覆おほうてある。

石いしを取除とりのけなさい、

とイエズス様は仰おつしや有あつた。たゞ墓はかを開ひらいて、親友しんゆうの死顔しにがほをお眺ながめになるのだ、とマルタは思おもつたんでせう。

主よ、もう臭くさうムくさいます。四日よっかにもなりますので、

と申し上げました。腐爛くされかけた兄弟きやうだいの醜みにくい屍しかばねを、多おほくの人ひとに見みせたくはないと、彼女かのよが思おも

つたのも無理はない。イエズス様は彼女の信仰を喚起して、あなたに言つて置いたちや無いですか。若し信じますならば、天主様の御光榮を見るであります。

石は終に取除けられた。イエズス様は目を擧げて、御祈りなさいませ。

父よ、私に聴き給うたことを感謝いたします。何時も私に聴き給ふ事は、固より承知して居ました。然し立會へる人々の爲、主が私をお遣しになつたことを彼等に信せしめんが爲に、之を申したのであります。

斯く言ひ終つてから、大聲に、

ラザル、出ておいで、

と呼はりなさいました。すると今が今まで死んで臭くなつて居たラザルが忽ち手足は布に巻かれたまゝ出て來ました。顔も未だ汗拭に包まれて居るのです。

解いて往かせなさい、

とイエズス様は人々に仰有つた。ラザルは終に復活つた。死んで四日にもなり、既に堪らない

程の臭氣を放てるラザルが終に復活つたのです。是こそ奇蹟中の一大奇蹟ぢやありませんか？

【奇蹟の結果】、マルタとマリヤの許に來合せて、イエズス様の爲し給へるこの驚くべき奇蹟を見たユデア人は多く信仰を起した。イエズス様は確に其目的を達せられた。然し中にはフアリザイ人の許へ駈付けて、今度の奇蹟を告げた者もあつた。司祭長、フアリザイ人等は一方ならず狼狽へた。早速、衆議會を召集した。イエズス様に對して如何なる處置を執るべきかと密に評議しました。エルザレムの南、ヒンノンの谷の裏手に小高い丘がある。古い傳説によると、其の丘の上に、時の司祭長カイファの別荘があつた。評議は此の別荘で行はれたとか、今に之を『悪い評議の丘』と稱へて居る。その評議と云ふは、斯うでした。

此人は數多の奇蹟を行ふが、如何したら可いだらう？若し此儘に容して置いたら、皆彼を信仰する様になる。すると羅馬人が來つて、我々の民を亡すに至るであらう。

誤れるメツシア觀に囚はれて居た彼等である。斯う考へたのも強ち無理はない。實際イエズス様が熱狂せる民衆に身をお委せなかつたものなら、彼等は直に之を國王に擁立て、羅馬に向つて叛旗を翻し、國內は流血に塗れる不幸を見るに至るのは、智者を待すとも明白でした。時に

彼等の一人で、其年の大司祭たりしカイファが起上つた。

諸君は事を解らぬのだ。人民の爲に一人が死んで、全國民が亡びないのは、諸君に利益だと云ふことを思はぬのだ、

と云つた。つまり國家の爲に一人を犠牲にせよ、イエズス様を殺して國民を救へ、と發議したのである。彼は自分から思付いて之を言つたのではない。彼は其年の大司祭だつたので、イエズス様が國民の爲に死に給ふべきことを、たゞ國民の爲のみならず、亦散々になつた天主様の子等を一つに集めんが爲に、死に給ふべきことを豫言したのである。彼の説は一議に及ばず採用された。此日から彼等は、何とかしてイエズス様を殺さんものと、謀を連す様になつた。

【エフレムへの御隠退】、斯んな鹽梅で、エルザレム附近にお滞りになるのは危険千万でした。未だ死ぬべき時が来て居ない。態々ユデア人の中に跳込んで、彼等を激昂させる必要はない。でイエズス様は陽にユデア人の中を歩み給はず、荒野に近いエフレムと云ふ町に退き、弟子等と其所にお留りになりました。

ユデア人の過越祭もいよ／＼近いて來た。過越祭に參與するには、律法上の汚點があつてはな

らぬので、其んな汚のある人は、祭日前に、豫め身を清めて置かねばならぬ。其爲に地方からエルザレムへ上る人は多いものでした。時にイエズス様の評判は非常に高くなつて居る。万人が万人、口を開けば、イエズス様の事を噂して居る。幕屋祭の時に於けるが如く、彼等は連りにイエズス様を探して、

皆さん、何と思ひなさるか。彼の人は此祭に來ないのでせうか、

と神殿に立ちながら語り合つて居る。殊に司祭長やファリサイ人等は、今度こそイエズス様を捕へんものと、

在所を知つた者は申出でよ、

と豫てより布令を出して置いた。其爲に噂はいよ／＼高くなる許りでした。

ラザルは罪人の姿その儘ぢやありませんか？罪を重ね重ねた結果、魂は死んで腐ります。堪へ難い臭氣を放ち、人に鼻摘みされる様になります。惘然の至りです。幸ひ父母、兄弟、姉妹、朋友の中に、マルタやマリアの如き人があつて、爲に熱心な祈禱を獻げ、その改心を求めて呉れましたら、其まゝ犬死する様なことはありませんまい。イエズス様は今も相變ら

す、復活です生命です、イエズス様を信じますと、死すとも活きます。力を落し、望を失ふ譯はありません。

(三) 幼兒の掩祝、並に誠命と勸誘 (マテオ、一九ノ一三二〇—マルコ、二〇ノ一三—ルカ、一八ノ一五—三〇)

【幼兒の掩祝】、過越祭はいよいよ間近になつた。イエズス様も終にエフレムを後にして、エルザレムへ御發向になります。其時の事だつたでせうか、幼兒をイエズス様の前に差出して、按手しつゝお祈りして戴きたい、と願ひ出た幾人かの母親があつた。弟子等は之を叱り付けました。先生を煩はしては、と氣轉を利かしたのだが、夫が却つてイエズス様の御氣に障つたので、イエズス様は之を見て憤り、彼等に曰うた。

幼兒の私の方へ來るのを容しなさい。之を禁じてはなりませんよ。天國は斯様な人の爲です。私は誠に諸子に申します。すべて幼兒の如くに神の國を承ない人は、之に入りますまいぞ。斯くて彼等を抱き、按手して之を祝しなさいました。福音書の記事中でも、是ほど美しい、感心な場面が、今二つとありますでせうか。

【誠命と勸誘】、其所を立去つて、いよいよ途にお上りになると、一人の身分高い青年が馳せ來つて、御前に跪き、

善き師よ、永遠の生命を得んが爲には、如何な善い事を爲さねばなりませんか、と問ひました。彼の志は見上げたものでした。何とかして天國を贏ち得たい、その爲には、より聖にして、より完全な生活をせねばならぬが、さて如何すれば可いでせう、知りたいものだと思ひ、イエズス様にお尋ねしたのでした。イエズス様はお答になります。

何で私を善き者と云ふのです。天主様お獨の外、善き者と云ふはありませんよ。彼は、普通の敬語の積りで、善き師よ、と呼んだのでした。イエズス様は、その『善き』と云ふ形容詞を絶對的意味に取つて、天主様の外に善き者なし、と仰有つた。然しさう仰有つたからとて、御自分の天主性をば否定された譯ではない。たゞ人の子の資格で以て御話になつた迄に過ぎない。さてイエズス様は彼の敬語を拒んだ上で、

貴方は生命に入りたいたならば、掟を守りなさい、とお答へなさいました。

何の掟でムいますか、

と青年は續いて問ひ返した。詳しく聞かして戴きたい、と思つたのである。

「掟は御存知の筈です。人を殺す勿れ。姦淫する勿れ。盗む勿れ。偽證する勿れ。汝の父母を敬へ。又汝の近き者を己の如く愛せよ。

とイエズス様は仰有つた。

先生、是は皆私の幼い時から守つて來た所です。何が未だ私に缺けて居ますか、

と青年は申しました。イエズス様は優しい御目を彼に注がれた。彼の心の高潔さ、神の掟に對する其の忠實さを喜び之をお愛みなさいました。

未だ一つ貴方に缺けた所がある。完全な人となりたいたならば、貴方の有つて居る物を悉く賣つて、之を貧者に施しなさい。然らば天に於て寶を得るでありませう。然る後、來つて私に從ひなさい。

是を聞いた彼は、悲み憂ひつゝ立去つた。彼は多くの財産を有つて居た。天國を得たいとは心から望みながらも、地上の財産を抛つだけの勇氣がなかつたのです。イエズス様は四周を見廻

しながら、弟子等に向ひ、

お金を持つた人が天國に入るのは難いものだな、

と嘆息された。弟子等はその御言に驚いた。イエズス様は重ねて仰有います。

小子等よ、お金を持みとせる人が神の國に入るのは、難いものです。私は繰返して諸子に申します。富者が天國に入るよりも、駱駝が針の孔を通る方が易いんですよ。

富者は一般に天國へ這入れぬ、と云ふのではない。たゞお金を持みとせる者、お金に執着し、傷い利慾に囚はれて居る富者が天國に入るのは、餘程六ヶしい、と御注意なされた迄に外ならぬのです。然し弟子等は聞いて、大に怪み、

然らば誰が救はれ得るのでせうか、

と語り合つて居る。イエズス様は彼等に御目を注ぎながら、

夫は人に於てこそ能はぬ所だけれども、天主様に於ては然うでは無い。何だつて天主様に於て能はぬ事はありませんよ、

と仰せられた。志さへあれば、富者でも、貧者でも、天國へ這入れる。救靈も得られる。天

主様の御援助によつて、能はぬ事はない。按ずるには及ばぬ、と御力附けをして下さつたのであります。

【百倍の報酬】、其時ペトロは口を開いて、さも満足げに申しました。

私等は一切を棄て、先生に従ひました。然らば何を得ますでういませうか。

一切を抛つて御後に従つたら、天國に於て財寶を得べきことを、彼の青年には御約束になつた。今自分等は一切を抛つて、主に従つて居る。何んな御褒美が戴けようか、と彼は問うたのである。イエズス様は答へて曰うた。

私は誠に諸子に申します。私に従ひました諸子は、世が革り、人の子が其の光榮の座に据ります時、諸子も十二の座に据つて、イスラエルの十二族を審くでありませう。

然らば公審判の曉に、使徒等は陪審判事となる。生ける人と死せる人との最高判事たるキリスト様と共に、審判の席に就くのだ。イスラエルの十二族とは、全教會を指しものである。イエズス様は猶續いて仰せられた。

又すべて私の爲、福音の爲め、家なり、兄弟なり、姉妹なり、父なり、母なり、妻なり、

子等なり、田畑なりを離れて百倍を受けない人即ち唯今此世に於ては、家や、兄弟や、姉妹や、父や、子等や、田畑やを迫害と共に受け、後の世では、永遠の生命を受けない人と云ふは、誰もありません。但し多く先の人が後になり、後の人が先になるであります。

是は使徒等のみに當る約束ではない。誰にしても、彼等に倣ひ、主の爲に思切つて一切を抛棄てるならば、後世の幸福は申す迄もない、此世から、種々と有難い御恵を戴くことが出来る。尤もイエズス様は、その所謂百倍の報酬の中に、迫害をも加へられた。實に迫害や、艱難や、苦勞や、夫等はキリスト信者の此世に於ける遺産の一部である。信者の信者たる所以は全く此處に在る。弟子は、師に優らずだ。十字架の上に御死去遊ばしたイエズス様の弟子だもの、十字架を擔ぐのは、當然ちやありませんか。然し其十字架には何とも知れぬ慰安が伴ふものであります。

猶「先の人が後になり、後の人が先になる」と云ふ格言は、重大な警戒を含んだもので、たとへ彼の富める青年の如く、善い事を爲初めても、中途にして立止つては、何にもならぬ。

何にもならぬ所か、永遠の生命を失ふ危険さへ無いものでもない。却つて長らく悪に染まつた大罪人でも、心掛け一つでは、天國を贏得て聖人の列に加はることも出来ぬものではありません。

【葡萄酒の傭人】、イエズス様は右の道理を明にせんが爲續いて左の如き諭を語られました。天國は、恰當、家父が朝早く出て、其葡萄酒の爲に、働く者を傭ふ様なものです。働く者一日一デナリオ(三十錢)の約束をして、之を葡萄酒に遣しました。又九時頃に出て行きました。他の人が市場に空しく立つて居るのを見て、「君等も僕の葡萄酒に往き給へ、正當なものを與へるから」と曰ひましたら、彼等は行きましました。十二時と三時頃にも出て行つて、又同じ様に致しました。五時頃に又出て行きまして、他の人が立坊をして居るのに行き遇ひました。「何で終日、此處に空しく立つて居るのです。」と言ひますと、「傭ふ人がありません。日没に及ん」と彼等は言ひました。「君等も僕の葡萄酒に行き給へ」と言つてやりました。日没に及んで、葡萄酒の主人は會計係に向ひ、「働く者を呼んで、之に賃金を與へよ。後の者から始めて先の者に及せ」と申付けました。五時頃に來た者が参りまして、各一デナリオを受けまし

た。先の者も参りました。自分等は多く受ける事と思つて居ると、やはり各一デナリオしか受けません。で之を受けながら家父に向つて呟き、「彼の後の人等は、一時間ほど働きました。夫に御身は終日の勞苦と暑氣とを忍んだ私等と均しく之を遇ひなされる！」と申しました。家父は其一人に答へて曰ひました。「友よ、僕は君に不義を爲すのではない。僕は一デナリオで君と約束したぢやないですか。君の分を受取つて行きなさい。僕はこの後の人にも、君と齊しく與へたいと思ふ。抑も僕が思ふ所を爲すのは可けないんですか。或は僕が善いからして、君の目が悪いのですか」と申しました。

この諭は突如として茲に終つて居る。彼の傭人に「フェイスと面を背け、少も頓着しなかつた家父の面目が、ありくと躍出て居るではありませんか。

斯の如く、後の人は先になり、先の人は後になるであります。召された人は多いが、選ばれた人は少いものです。

イエズス様は斯う云つて其諭を結ばれた。實際、世の人はすべてメツシアの國に働くべく召されて居る。然しその召に應じて忠實に働き、夫れ相當の報を受ける人は少い。私等は其の少い

「選ばれた人」の中に列なる様、大に務め勵まねばなりません。この諭の意味は明白でせう。家父は天主様で、葡萄畑は聖會です。總の人は皆この聖會に召されて居る。幼い時から召される人があり、少し遅れて召される人があり、中年の頃召される人、死に臨んで召される人がある、と云ふ様に、種々様々である。然し早く召されてもヌラリクラーリと働に一向身を入れないならば、遅く召されて、懸命に働く人には若かぬ。天主様は働く時間の長さ短さよりも、働き方の如何に御注目なされるのであります。

(四) 御受難の預言と、ゼベデオの二子 (マテオ、二〇〇ノ一七―二八、マルコ、一〇〇ノ三二―四五、ルカ、一八ノ三一―三四)

【三たび御受難を預言し給ふ】、イエズス様はいよく使徒等を伴ひ、エフレムをお立ちになつた。途中は弟子等に先つて、足取り勇ましくお進みになる。歩一步カルワリオへ近くだ、とは飽まで御存じながら、さも愉快げに御進みになるので、弟子等は驚いた。怖々と後から隨いて行つて居る。途中でイエズス様は十二人を竊に呼び寄せ、御自分の上にかかるべきことを彼等に告げられた。

看なさい。私等は今度エルザレムに上ります。人の子に就て、預言者等の手に録された事は悉く成就するであります。斯くて人の子は、司祭長、律法學士、長老等に賣られ、彼等は之を死罪に處し、異邦人に付し、之を弄り、之に唾し、之を鞭ち、十字架にかけて殺しませうが、然し三日目には復活するであります。

今度の豫言は、前二回の豫言からすると、餘程詳密に亘つて居る。刑吏には異邦人があり、ユデア人があること、その刑の順序は、弄る、唾する、鞭つ、十字架に懸けること、夫等を一切お告げになつた。然しメツシアたる者が、其んな目に遭ふべき筈だとは、使徒等の夢にも思ひ得ない所で、彼等は少しも御言の意義を解らない。是ばかりは全く謎で、彼等に隠されてあつた。其の言はれる所の何たるかを、彼等は曉り得ないのであります。

【ゼベデオの二子】、使徒等が頓と御言の眞意に通じ得なかつたことは、次の出來事を以ても察せられる。其時ゼベデオの二子ヤコブとヨハネの母サロメは、二子を伴うてイエズス様に近き御前に平伏して、何事かを願はうとしました。何をお望みです。

どイエズス様は御尋ねになつた。彼女は申しませ。

何うぞ御國に於て、私のこの二人の子が一人は貴方様の右に、一人は貴方様の左に坐る様、仰有つて下さいませ。

二子の爲に、メツシアの國に名譽の地位を願つたのです。固より夫はヤコブとヨハネの願でしたが、彼等は自分で言出し得ないで、態々母を煩はしたのである。今度エルザレムへお乗込みなされるば、いよくメツシアの王位に即き給ふのだと早合點をして、其節は左右に侍つて富貴を擅にしたいと冀つたのであります。

汝等は願ふ所を知りません。

イエズス様は先づ彼等をお咎めになりました。幾度も幾度も教へ諭されながらも、未だメツシアの國に就て、謬つた考を抱いて居る。何を願つて然るべきか、夫すら分らぬのとは如何にも情ない。イエズス様は續いて、

私の飲む杯を飲み得ますか。私の洗せられる洗禮もて洗せられること出来ますか、と御尋ねなさいました。

出来ませ、

と彼等は斷然答へた。實際二人は二人とも後で主の爲に殉教した。彼等の心は未熟でこそあつたが、然し誠實でした。その愛は不完全ながらも、熱烈でした。イエズス様は仰有います。成るほど私の飲む杯を飲みませう。私の洗せられる洗禮(血)で以て洗せられませう。然し私の右、或は左に坐るのは、私が汝等に與へるのではない。私の父より備へられた人々にこそ與へられるのです。

御父の永遠の御定に服せねばならぬ。自分も人の子としては、その御定を變更するだけの權利は持たぬ、とお告げになつた。所で十人の使徒等です、自分等の狙つて居る地位を二人に奪はれようとしたのだから堪らない。此事を聞くや忽ちブン／＼憤り出した。イエズス様は彼等を呼び寄せて、懇に御諭しなさいませ。

諸子も知つての通り、異邦人を司ると見える人は、之が主となりませ。又その君たる人は、權を其上に振つて居ませ。然し諸子の中には然うあつてはならぬ。諸子の中に大ならんと欲する人は、却つて諸子の僕となりなさい。又諸子の中に第一人者となりたい人は、すべての

人の奴隷となりなさい。人の子の來たのも、仕へて貰ふが爲ではなく、却つて仕へんが爲、且つ衆人の贖として、生命を與へんが爲であります。御死去の時間が近くに随つて、御教訓はいよ／＼痛切、深酷になります。謙遜の必要を説いて、至れり、盡せりぢやありませんか。

天國に於て、主の左右に坐する幸福を冀ふのは聖なる野心です。決して答むべき譯はない。ヤコブやヨハネが咎められたのは、たゞ現世的眼で之を觀、不純な心で之を望んだからです。但しこの高い地位に達するには、深い／＼謙遜が必要である。謙遜の基礎を深くしなければ高い建物を築けるものではありません。

(五) ザ ケ オ

マテオ、二五ノ六一—二
マルコ、一四ノ三—九
ルカ、一ノ二八
ヨハネ、一ノ一—二

【ザケオとは？】、イエズス様は進んでエリコへ入られた。市中を歩いてお在になると、偶まザケオと云ふ人があつた。彼は收税吏の長で、餘程の富豪でした。豫てイエズス様の嚮を耳にして居たものでせう。何んな御方だか見たいものと、断付けて参りました。然し群衆は路の

兩側に黒山を築いて居る。自分は人並優れて丈が低い。到底お目に懸ることが出来ない。彼がイエズス様を見たいと云ふのは、たゞ一片の好奇心に驅られてはなく、如何な罪人でも、人に爪弾されて居る收税吏でも、御見捨てにならぬ其の御親切に感じ、窃に信仰を起して居たからでした。而も其の信仰も少の困難に回される様な薄弱なものではなかつた。彼は是非、一になりともイエズス様を見たいものと思ひ、前に趨行き、イエズス様の御通り遊ばす道筋の桑葉無花果樹に上りました。イエズス様は彼の信仰を喜ばれました。其處に御出になりました時、目を舉げて彼を御覽になり、

ザケオさん、急いでお下りなさいよ。今日は御宅にお邪魔になる筈ですから、と仰せられた。ザケオは急いで樹から下り、喜んで自宅へ御案内申した。人々は之を見てイエズス様が罪人の家に客とおなりなさつたことを咥いた。然しザケオはもう罪人ではない。彼はイエズス様の御前に立つて申します。
主よ、御覽下さいませ。私は財産の半を貧者に施します。若し人に損害を掛けた所がありましたら、すならば、之を四倍になして償ひます。

イエズス様が自宅にお宿り下さつた記念として、財産の半を施し、損害も十二分に償ふと云ふのです。是こそ彼の改心の偽なき證據ではありますまいか。イエズス様も皆の前で仰せられた。此家は今日救を得ました。此人もアブラハムの子ですから。實に人の子の参りましたのは亡んで居る人を尋ねて、之を救はんが爲であります。

自らザケオを促して、其家に御宿り遊ばしたのは、實にアブラハムの子を憐み給ふが故でした。亡んで居る人を救ひ上げたい思召からでした。

【金貨利用の喩】、續いてイエズス様は、人々に一の喩を語られました。もう是からエルザレムは近い。六七時間の路程に過ぎないである。味方の人々は、使徒等までが、未だに自分の使命を覺つて居ない。今度エルザレムに乗り込むのは、いよいよメツシアの國を樹立てるが爲だ、國王の位に即いて、光榮の有りだけを輝かすが爲だ、と信じ込で居る。是非、彼等の誤つた考を轉覆して、メツシアの國を樹立する迄には、長い期間の存すること、其間に弟子たる者は、眞面目に働いて終なき報酬を蒙る準備を爲ねばならぬこと、終に敵たる人も決して處罰を免るべからざることを教へて置きたいものだ。イエズス様は斯う思つて、この喩を語られたのであります。

或る貴人が遠國へ旅立ちをした。封國を受けて歸るが爲でした。さて自分の家來十人と呼んで、之に金十斤（一斤は凡そ三十五圓に當る）を渡し、「私の來るまで商賣をせよ」と命じて置きました。所で國民は彼の人を憎んで居たものですから、後から使者を遣して、「彼人が私等の王たるを欲みません」と言はせました。然し彼は封國を受けて歸りました。曾て金を與へて置いた家來が、各商賣をして、幾何だけの利殖をしたか、夫を知りたいと思ひ、命じて之を呼び寄せました。初の者が参りまして、「主よ、主の金一斤は十斤を儲けました」と申しました。「善し、良い僕だ。汝は僅のものに忠實であつたから、十の都邑を宰らせよう」と主人は彼に言ひました。次の者は参りまして、「主よ、主の金一斤は五斤を生みました」と申しました。「汝も五の都邑を宰れ」と、主人は彼に言ひました。又一人が参りまして、「主よ、之は貴方の金一斤です。私は之を襦袢に包んで置きました、と申しますのは、貴方は嚴しい御人で置かない物を取り、播かない物を穫りなされる。私は貴方を懼れました」と申しました。主人は彼に言ひました。「悪い僕だ。私は汝の口から汝を判く。汝は私が嚴しい人で、置かない物を取り、播かない物を穫ると知つて居つた。然らば何故、私の金を銀行に渡さなかつたの

だ。然すれば私は來つて之を利足と共に受取つたであらう」と。斯くて立會へる人々に向ひ、「彼より其の金一斤を取上げて、十斤を有てる者に與へよ」と言ひました。「主よ、彼は既に十斤を有つて居ります」と人々が言ひますと、貴人は答へました。「私は汝等に言ひます。すべて有つて居る人は、尙與へられて餘がありません。然し有たない人は、その有てる物までも奪はれるであります。さて自分等の上に私の王たることを欲しなかつた敵等を此處へ引張つて來なさい。そして私の眼前で殺して了ひなさい、」と。

封國を受けに行つた貴人は、間もなく天に昇り給ふべきイエズス・キリスト様である。一應天にお昇りになつてから、長い後にならぬと、御歸りにならない。その間に弟子等の忠勤振を試すが爲に、その身々の力に應じて、聖寵をお渡しになる。其の聖寵を利用して、之に善徳の實を結ばしたものは、その程々に應じて、報酬を受けるのである。イエズス様の王たることを欲しなかつた敵とは、不信なるユデア人で、彼等が怖ろしい處罰を蒙るべきことを、前以て暗示して置かれたのであります。

【二人の盲者癒さる】、イエズス様は右の御話を終り、先に立つてエルザレムへお上りになつた

弟子等と夥しい群衆とが之に従つた。をりしも路傍に二人の盲者が坐して施を請うて居る。

一人はチメオの子で、バルチメオと呼ぶのでした。群衆の過ぎ行く足音を聞き、「是は何事です」と尋ねました。「ナザレトのイエズス様が御通り遊ばすのだ」と聞くや、

主よ、ダウイドの子よ、我等を憐み給へ。

と叫びました。「ダウイドの子」とは、「メツシア」を意味する。イエズス様が盲者をお癒し下さつたことを彼等は噂に聞いて居たものと見える。忽ちその救世主たるを信じ、その全能力に深く信頼んで、斯んなに叫んだのである。先立てる人々は、彼等を叱つて黙らせようとした。然し彼等はますます叫んで、

主よ、ダウイドの子よ、我等を憐み給へ、

と申しました。是までイエズス様は、ダウイドの子よ、救世主よ、と叫立てられる毎に、早速之が口止をし給ふのでした。然るに今度ばかりは、いよいよエルザレムに乗込み、その真直中に立つて、自らその救世主たることを公に宣言し給ふ筈で、今更彼等に口止をする必要がない。因つてその場に立ち止り、二人をお呼びになりました。人々は盲者と呼ん

で、

オイ安心せい。起て。お召し下さるんだよ、

と申しました。誓者は上衣を抛棄て、躍上つて御許へ参りました。

何をして貰ひたいのです？

どイエズス様が御尋ねになると、

主よ、目が開いて見えます様に、

と彼等は申しました。イエズス様は不憫に思召され、彼等の目に觸れて、

往きなさい。其方等の信仰が其方等を救ひました、

と仰有るや、忽ち彼等の目は開いた。もう以前の盲者ではない。立派に見える様になりました。

た。彼等は喜んで途中まで、イエズス様の御伴をしました。

【マリアの香油】、夕方イエズス様の一行はベタニアに到着し、ラザル兄弟の家に客となられた

翌日、即ち逾越祭の六日前、人々は癩病者シモンの家に於て、イエズス様の爲に、晚餐を設け

ました。此のシモンは、多分イエズス様から其癩病を癒して戴き、夫から熱心な弟子となつて

居たものと思はれる。ラザル一家とも親しく交つて居たものらしく、ラザルは招待されてイエズス様と共に食卓に就き、マルタは御給仕をしました。時にマリアは、價高い、純粹な穂ナルドの香油一斤を盛つた器を持つて來た。其の器を破り、イエズス様の御頭と御足とに注ぎ、己が頭髮で以つて御足を拭ひ參らせた。香油の薫は家に満ちた。ナルドは香油の原料となる樹の名です。根からも葉からも、穂からも香油が造られる。餘程價高いものであつた。『可憐しい事をするものだな！』、弟子の一人で、イスカリオテのユダは之を見て、直に然う思ひ、心に憤りながら、『何故この香油を三百デナリオに賣つて、貧者に施さないのだ』と言ひ出した。然し彼が斯う言つたのは、貧者の事を思つてではない。彼は盗人でした。自ら財布を預り、其中に入れた物を偷んで居たものでした。他の使徒等は彼の腹黒さを知らないものだから、忽ち彼に雷同した。身顛ひしてこの女に怒りました。慈善は固より怠りてはならぬ。然し時としてはその信仰を顯はすが爲に、多少の費を惜むべきではないのに、彼等是一向夫を思はぬのでした。彼等の理不盡な小言を聴かれたイエズス様は、マリアの爲に辨解してやると共に、亦彼等の狭い料見をも御咎めになりました。

この女を差措きなさい。何で之を累すのです。私に善い業を爲して呉れました。貧者は常に諸子の中に居るから、随時に之を恵むことが出来る。然し私は常に諸子の中には居ませんよ。この女はその力の限りを盡しました。私の身に油を注いだのは、預め私を葬らんが爲にしたので。私は誠に諸子に申します。全世界、何處にでも福音の宣べ傳へられる處には、亦この女の爲した事も、其記念として語られるであります。

イエズス様はマリヤの爲に辯護してお遣りになつた。彼女は屍となるべき自分の身體に香油を注いだのだ、と仰有つた。御自分の死の近きに在る事をも、暗にお知らせなつたのであります。さて多くのユデア人は、イエズス様が此處に在すと知り、ドヤ／＼と推し掛けて來た。彼等が推し掛けたのは、たゞイエズス様の爲ばかりではない。亦死者の中から復活されたラザルをも見たいと思つたからでした。斯の如く、ユデア人の中には、ラザル故に、却つてイエズス様を信仰する者が多くなつたので、司祭長等はラザルをも併せて殺さうと考へました。彼等はもう嫉妬の火焰に焦れ、理も構はぬ。遣付けて了はうと謀つたのである。實に嫉妬ほど怖るべきものはありません。

ユダが慾心に驅られて、マリヤを非難すると、些の慾心も無い他の使徒等までが、夫に曳かされた。身顛ひして彼女に憤りました。擇むべきは友であります。良からぬ友に近いて居ると、知らず識らず、之に見倣ひ、聞倣つて、其の口吻までも眞似る様になります。餘程注意しなければなりません。

御受難期

マリヤがベタニアに於て主に香油を注いだ其翌日、イエズス様は、堂々とエルザレムに御乗込みになつた。夫から御死去まで、日數を言へば僅に五六日に過ぎないが、然し其間の出来事は決して軽々と見逃してはならぬ。其のイエズス様や、人類の上に齎した結果と云ふものは、非常に重大なものであります。イエズス様の爲には、悲惨極まる御受難、御死去となり、私等の爲には救贖の大事業が、めでたく完成したのであります。福音史家は、流石に其邊の消息を辨まへ、此間に於けるイエズス様の一舉一動をば、細大漏さず、書き留めて居ます。私等も彼等の案内により、以前に倍する信仰と愛とを以て、主の御後に従ひませ

う。其群羊の爲に生命を抛たんとし給ふ、この善き牧者の御側を離れず、その御言を承り、御行を仰視ることに致しませう。

第五章 エルザレムに於ける吾主最後の御奮闘

(一) 凱旋的入都の光景

(マテオ、二二ノ一以下
マルコ、二一ノ一以下
ルカ、一九ノ二九以下
ヨハネ、一一ノ一二以下)

【入都の準備】、メツシアの王國が近い中に建設されるのだと信じて、既にエリコ邊から、イエズ様の周圍に群々推掛けた群衆は、全然思違をして居た譯ではない。たゞ彼等は自己の偏見に囚はれ、國民的自負心に驅られた爲に、其のメツシアを歓迎するにしても、餘り人間の色彩を濃厚くした嫌のあつたのが、當を得なかつた迄の事である。實際イエズ様は、凱旋者の威勢を示して、堂々とユデアの都エルザレムに進み入り給はねばならぬのでした。なるほど聖ベトロがそのメツシアにて在すことを宣言した時は、堅く秘密を守る様にと、吳々も命じて置かれました。群衆が熱狂して、國王に擁立てようとしても、決して彼等の願に乗せられ給はぬのでし

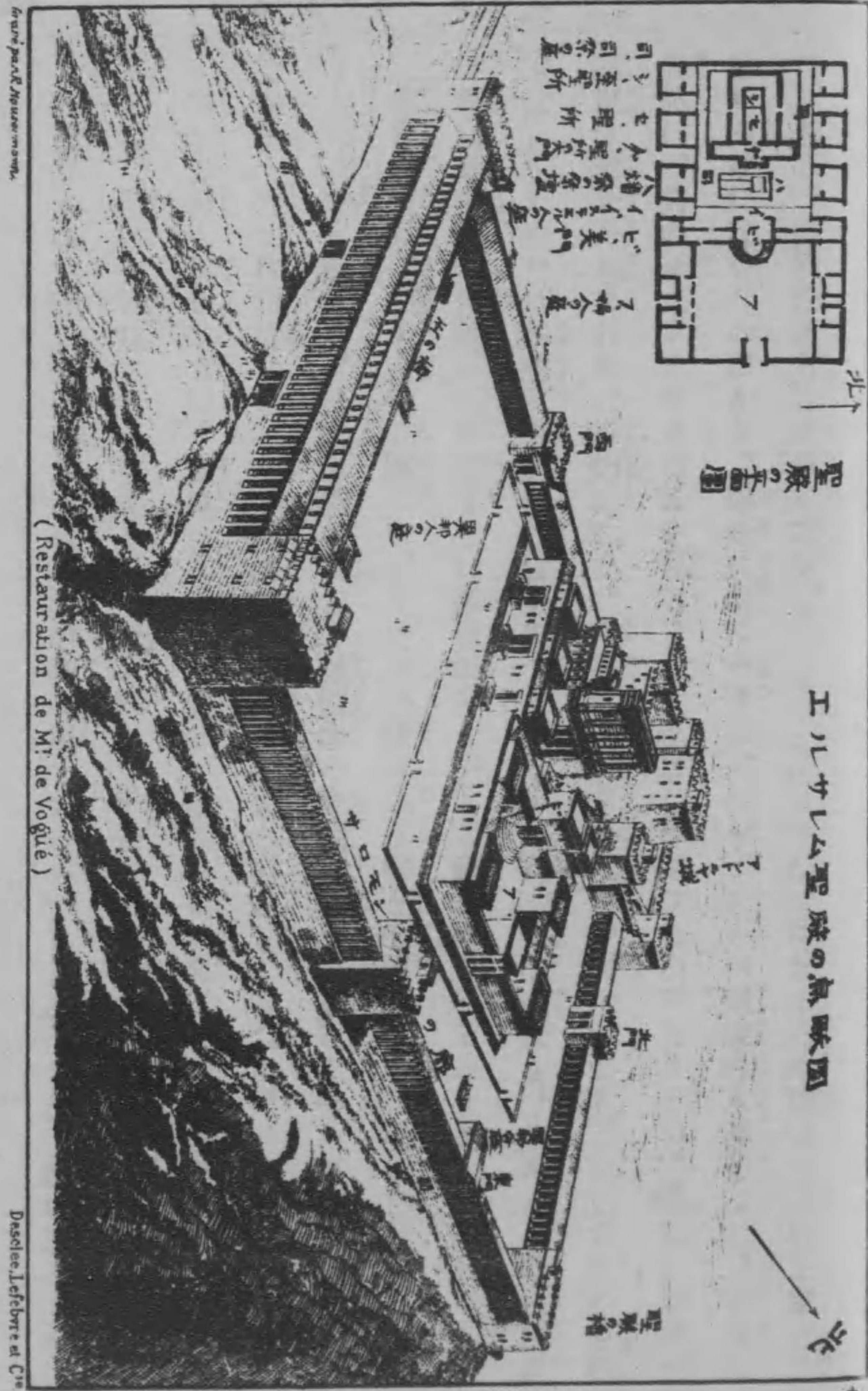


Figure 10. Temple of Jerusalem.

(Restauration de M^r de Voûlé)

Desclée, Lefebvre et C^{ie}

た。然し、古の豫言者等は夙に之を『メツシア王』と呼び、御父も亦永遠より之に王號(詩二ノ六)をお授けになつたのだから、御死去前に一度は、エルザレムへ凱旋的入都をなし、明白に、又公然に、其のメツシアたることを表白さうと思召しなされたのであります。然しイエズス様の凱旋は随分盛大であり、赫灼として、人目を聳かす底であつたにしても、決して世の常の空騒ではなかつた。純粹な宗教的性質を失つて居なかつた。賑な中にも、イエズス様の質素な御生涯に釣合ひ、謙遜にして慎ましい態度があり、と讀まれるのであります。

宴會の翌日、即ち今日の日曜日に、イエズス様は弟子等を引連れて、ベタニアをお立ちになりました。少し進むと、ベタニアと同じく橄欖山の東腹、而も頂に近くベトファゲの村がある。この村へ近かれた時、イエズス様は二人の弟子を先へお遣しになつた。向ひの村へ行きなさい。彼處へ入ると、繫いだ牝驢馬と、未だ人が乗つたことの無い子驢馬が共に居るのを見るであります。夫を解いて引張つてお出で。若し誰か『何を爲るのだ何故解くのだ』と問ひましたら、『主が御入用ですから』と言ひなさい。直に許して呉れませう。

と仰せられた。『シオンの女に曰ひなさい、看よ、汝の王様は柔和にして、牝馬と其子の小
 驢馬とに乗りて、汝の方へ御越しになりますぞ』(ザカリヤ九ノ九)と預言者によつて言はれた事は、茲
 に至つて成就した譯である。弟子等は行つて見た。果して門前の辻に驢馬を繋いである。夫を
 解いて居ると、其所に立つて居た人々の中から、驢馬の主人が聲を掛けて、『驢馬を解いて何を
 するのだ』と言ひました。弟子等はイエズス様の御命令通りに、『御主様が御入用ですから』と
 申しましたら、人々は直に許しました。

【途中の光景】、斯くて牝馬と子驢馬とを引張つて來た。弟子等は之に自分等の外套を載せて鞍
 となし、イエズス様を子驢馬の上に御乗せ申した。是からいよいよ凱旋行列が練出するのです。
 十二使徒はイエズス様の前後左右に附添つて居る。パレスチナの諸邑、殊にガリレア地方から
 過越祭の爲に乘込んだ巡拜者は、イエズス様がエルザレムへ御這入り遊ばすと聞くや、齊しく
 其後に従つた。群衆は刻一刻増加して來る。衣服を脱いで道に横へるやら、橄欖、棕梠等の枝
 を折つて、之を道に敷くやら、手に持つやらして、盛に、而も誠意から歓迎しました。
 然し其の大層な歓迎も、今度ばかりは全く宗教的で、政治上の意義は少しも加味つて居ない。

たダメツシア王に尊敬の意を盡し、その偽なき誠意を表すのみに過ぎなかつた。やがて群衆の
 胸を突いて、熱狂の叫が迸り出た。是まで見た諸の奇蹟に就て、彼等は天主様を讚美しまし
 た。喜んで、聲高かに天主様を譽め上げました。

主の名によりて來り給へるイスラエルの王様は祝せられませ。天には平和、最高き所には光
 榮あれかし。我等の父ダウイドの國は來ました。祝せられませ。ダウイドの子にホザンナ、
 最高き所にホザンナ、(ホザンナは歓迎の聲で、助け給への意味だ)

と聲を揃へて、腹の底から叫び立てた。幾千万の群衆が喜に得堪へず、一時に叫び出す其の強
 い、大きな、喜ばしい聲は山に響き、谷に應へて、爲に天地も鳴りどよめく許りぢやなかつた
 でせうか。群衆が一時に叫び出したのは、橄欖山の頂を越え、下阪にさし掛つた時でした。今ま
 で山の背に隠れて居た聖都が、突然脚下に顯はれた。堅固な城壁に圍まれ、麗な春の日を
 眞面に受けて、煌々と輝ける、雄大無双の神殿、ユデア國民が唯一の誇とせる其神殿のパノラ
 マが、忽然目の前に浮み出た。群衆が覺えず熱狂の叫を擧げたのも、實は無理も無かつたので
 あります。

殊にベタニア、ベトファゲの群衆に、エルザレム側の大勢が加はつた時、喜悅は一層大きく、ホザンナの聲は、一層強く盛になつた。エルザレムから加はつた新參者はエルザレム人ではない。過越祭の爲に、四方から群り來れる巡拜者であつた。彼等は、イエズス様が、ラザルを墓の外に呼出し、死者の中から、復活しなされた時、其場に居合せるか、或は其事を傳聞かして、是こそ約束のメツシヤに相違ないと信じ、自ら進んで出迎へたのでありました。

【ファリサイ人の嫉妬と、吾主の御涙】、この光景を見たファリサイ人等は、狼狽へすには居られない。

見給へ、何の甲斐もありやしない。既に世は擧つて、彼に従ふに至つたんだ、と無念の齒を喰しはつて居る。實際イエズス様の威望は終りに近くに隨つて、衝天の勢を示して來ました。ファリサイ人等の勢力は、木葉微塵に打碎かれた。威嚇も、煽動も、空元氣も全く用を爲さない。今や全く何の甲斐もなくなつたのだ。然し徒に指を銜へて、傍觀ばかりもして居られなかつたと見え、大膽にもイエズス様に近いて、

先生、お弟子方を戒めなさい、

と言つたものがあつた。胸に燃え狂ふ憤慨を、恭しい言辭の裡に包んで、餘計な差出口をしたのである。

私は諸子に申します。この人々が黙りましたら、石が叫びませうよ、

と、イエズス様は唯一言お答へになつた。實に今度の歡迎ばかりは、天主様の思召に出たのだ。何うしたつて沈黙されたものではない。若し人が沈黙したら、情なき石が聲を擧げて、主の御光榮を歌ふ筈になつて居たのである。然しイエズス様は斯る光榮を受け、讚辭を浴せられながらも、その救世主たることは夢にもお忘れになりなさらぬ。橄欖山の上から、エルザレムを瞰俯しなされた。堅固な城壁、壯嚴な神殿、人や、驢馬や、駱駝の織るが如く往き來せる光榮、其等を御覽になると共に、國民の不信、忘恩の沙汰を思はれた。其の久しからずして、怖しい天罰を蒙るべきを思ひ浮べられた。喜ばしい凱旋の最中に、ハラ／＼と涙を流して、之が爲に泣き遊ばされました。

汝が若し此日に於ても、汝に平和を來すべきものゝ何たるかを知つたらば！…然し今や汝の目より隠されてある。蓋し日が將に來るであります。汝の敵は壘を汝の周圍に築き、取り

圍んで四方から迫り、汝と汝の内うちに在る子等を地に打倒し、汝には、一の石をも石の上に遺のこしますまいぞ。そは汝が訪問された日を知らなかつたからです。

エルザレムの滅亡を明に預言され給うたのでした。四十年の後、果してローマの大軍はエルザレムを十重廿重に包圍んだ。四方に壘を築いて、市民を袋の中の鼠となした。終に神殿を焼拂ひ、民家を打壊し、人を屠ること十一萬、エルザレムは全く焦土、碎石の累々せる荒野原となり了つた。

さて行列は進んで山を下り、セドロンの谷を涉り、いよいよエルザレムに乗込んだ。全市は擧つて動搖いた。

是は抑も何方でせう？

遠國から參拜に来た人々は、イエズス様の誰なるかを知らない。驚いて斯う尋ねると、

ガリレアのナザレトから出られた預言者のイエズス様です。

と、行列に加はつた人々は答へた。イエズス様は群衆に衛られ、進んで神殿へ赴かれた。メツシアの宮殿に最も適はしいのは實に神殿ではあるまいか。神殿に到るや、偏く之を見廻し

なさつた。時は既に夕暮である。エルザレムに止るのは安全でない。教師等が如何な陰謀を運めぐらして居るか分らぬ。イエズス様は弟子等を従へ、市を出てベタニアへお歸りになつた。然しラザルの家に御宿りになつたものか、是から二三日の間は、青天井の下に夜を明されたのだ、と云ふ傳説さへ残つて居るので、何とも確な事は申されません。

今度イエズス様がエルザレムへ凱旋なさつたのは、世の終に當り、天國へ凱旋し給ふ時の幽かすかな影をお見せになつた迄に過ぎない。其時こそ總の敵を打滅し、大なる御威光を輝かし、數限りなき天使聖人等を前後左右に従へ、ホザンナの聲の洋々と流れる中に凱旋し給ふのである。私等わたくしは是非ともその凱旋に加はり、聲を限りにホザンナを歌はねばならぬが、然し其の爲ためには、今自分の訪問された日を知り、自分に平安を齎し給ふイエズス様を知り、之を愛し、喜んで其命に従ひ奉るが肝要の上にも肝要であります。

(二) 月曜日げつやうびの出来事で (マテオ、二二ノ二八)

【無花果樹を唱ひ給ふ】、翌月曜日、イエズス様は弟子等とベタニアを出て、再びエルザレムに

お乗込みになつた。途中餓を覚えられた。遙か向ひの路傍に、青々と緑の葉を繁らした無花果樹が立つて居る。何か見付かるまいかと、樹の下へ行つて見られました。然し葉の外には、何にも無い。成るほど時は未だ春も半の頃で、無花果の熟する時節では無い。然し無花果と云ふものは、葉の出ない前から、技端には既に果を着けて居るものである。葉が盛に繁つて居れば、果の一つなりとも見付からぬ筈は無いのだ。因つてイエズス様は此樹を呪ひ、今より後、何時迄も、汝の果を食べる人はあるまいぞ、と仰せられた。イエズス様が無花果樹をお呪ひになつたのは、何うも理由が分らぬ、期も来ない中に、果を結ばないからつて、何の咎むべき點があるだらうか、と思はれぬでは無い。然しイエズス様の御呪ひになつたのは、其實、無花果樹ではなく、この無花果樹に事寄せて、ユデア國民の呪はるべきことを暗示しになつたのである。豊かな聖寵を浴せられながら、たゞ外部に善業の葉を飾るばかりで、内實は全く空虚だ、何等の信仰、何等の徳行の實も結んで居ない、呪はれて、斫り倒されるより外は無いのだ、と云ふことを御諭しなされたのであります。

【神殿内を清め給ふ】、イエズス様が無花果樹を御呪ひになるのを弟子等は聞きました。でも其の御言に何んな深い意味が籠つてあるやら、格別注意もしないで、其まゝイエズス様に従ひ、神殿へと上つて行きました。公生活の第一過越祭に、イエズス様は神殿へ行つて、殿内の商人を容赦なく逐出なさつたことがある。然し悪弊は相變らず改らない。異邦人の庭は宛然市場も同然な觀を呈して居る。イエズス様は昨日神殿へ御上りになつた際、偏く殿内を見廻して置かれましたので、今日行きなり、殿内に賣買せる人々を驅逐し、兩替屋の案と鴿を賣る人々の腰掛を打倒しなされた。廻路をしない爲に、種々の器を携へながら、神殿内を通る悪い慣例もあつたが、夫も誰にだつて御許しなさらぬ。斯くて人々に教へて曰うた。

我家は、萬民に祈の家と稱へられるであらう、と録してありませんか。夫に諸君は之を強盜の巢窟となしたのです。

【司祭長等の憤懣】、荒療治を一通り終りなされると、忽ち瞽者、跛者等が、神殿内のイエズス様に近いた。イエズス様は例によつて是等を醫し給うた。時に小兒等がイエズス様を見て、「ダウイドの裔にホザンナ」と、可愛らしい聲を張り擧げて連りに叫んで居る。司祭長等は、イエズス

ス様の行ひ給へる奇蹟を見、小兒等のホザンナを聞き、腹立たしくて堪らない。イエズス様に近き、

貴方は彼等の云ふ所をお聞きですか、

と言ひました。小兒等は貴方をメツシアと呼んで居る。是は容易ならぬ冒瀆です、貴方は黙つて置きなさんですか、と詰つたのである。イエズス様は彼等に答へて、

然うです『孩子と乳兒との口に讚美を全うし給うた』(詩ノ三)とあるのを、諸君はお讀みにならなかつたですか、

と仰有つた。そして毎日神殿内に在つて、群衆に教へて居なさん。司祭長や律法學士、人民の重立つた人々は、何とかしてイエズス様を亡きものにせんと談合して見たが、然し別段善い手段も思ひ付かない。群衆は擧つて其教を感嘆し、熱心に、憧れて之に耳を傾けて居る。迂闊に手を下すと、頓だ失敗を見ぬにも限らぬ。無念の情に心は煮返りながら、徒に手を拱いて傍觀するより外はないのであります。

【異邦人の請願】、異邦人の中にも、ユデア教に歸依した人が少からずあつた。是等も過越祭に

參與らんものと、エルザレムへ上つて居ました。この日の事でしたか、或は昨日、明日かの事でしたか諸説まち／＼で、確な所は分りませんが、兎に角、彼等はガリレアのベツサイダ生れのフィリツポに近い、

君、私等はイエズス様に御目に懸りたいんです、

と願ひました。自分等はユデア人で無いものだから、些と遠慮して、フィリツポの仲介を乞うたのでした。フィリツポは何とも決し兼ねて、アンドレアに告げ、二人してイエズス様に右の次第を申し上げた。イエズス様は、直接、彼等の相手になつて、お話しなさりませぬ。然し周圍に立つて居る人々に向ひ、自分の弟子となるには、如何なる條件を果さねばならぬか、と云ふことを明にされました。冒頭は殊更に壯重を極めてたもので、『人の子が光榮を受くべき時は參りました』と切り出して居なさん。『時』とは御苦難、御死去の時である。この時こそ痛苦、凌辱のドン底に沈み入り給ふのですが、然し夫は麥の種子が死んで腐つた様になつてから青い若芽と萌え、伸びて、昌えて、黄金色の穂波を打せる様なものである。是によつてイエズス様は世を救ひ、御父を尊び、我身にも大なる光榮を贏ち得給ふのであります。

人の子が光榮を受くべき時は参りました。私は誠に／＼諸子に申します。麥の粒が地に落ちて死ななければ、唯一つに止る。若し死んだら、多くの實を結ぶものです。己が生命を愛する人は、之を失ひ、此世で生命を憎む人は、之を保つて永遠の生命に至るであります。もし私に事へますならば、私に従ひなさい。そして私の居る處には、私に事へる人も亦居ますでせう。人もし私に事へますならば、私の父は之に榮譽を賜ふであります。

イエズス様の爲にも、弟子たらん者の爲にも、道德界の大法は決して變りが無い。新しい生命、盡きせぬ光榮に入る道は死と屈辱とである。イエズス様は斯う仰有つてから、俄に心騒ぎを覺えさせ給うた。近い中に遭はせねばならぬ怖ろしい、激烈な闘を思つて、胸も破れんばかりの心地がせられました。

今や私の心は騒ぎ出した。私は何を申しませう。父よ、私を救つて、此時より遁し給へ。然しながら、私は之が爲にこそ、此の時に至つたのであります。父よ、御名に光榮あらしめ給へ。

イエズス様の胸騒ぎは長くは続きません。直に心を取直し、氣を引立て、御父の御光榮の爲に

一身をお献げになつた。すると忽ち胸の騒ぎも静まつた。其時、天から聲がありました。

我は既に光榮あらしめた。更に光榮あらしめるであらうぞ。

願ひの旨を聽容れた、と云ふ御答なのである。洗禮の時や、御變容の場に於けるが如く、御父は最愛の御子の爲に保證して下さつたのです。其場に立つて居た群衆は、其お聲を聞きました。『雷が鳴つたよ』と云ふ人があり、『天使がお話しになつたんだ』と云ふ人もありました。イエズス様は答へて曰うた。

此の聲の來たのは、私の爲ではない。諸君の爲です。今こそ世が審かれるのです。今こそこの世の長は逐出されようとするのです。私も地から上げられました時には、萬民を私に引寄せらるであります。

『この世の長』とはサタンで、サタンは異邦人の歸教によつて、大部分この世から逐出される。今迄の如く、我物顔に世の中をのさばり歩くことも出来なくなる筈だ。實際、イエズス様が十字架に磔けられ、地より上げられ給うたのを見て、すべての人は一齊に眼を其方に注ぎ、我知らず、之に引寄せられるに至りました。さて群衆は、『地から上げられる』と云ふ御言の意

味を解りました。

基督たる者は永遠に存する、と私等は律法によつて聞いて居る。夫に貴君は何うして、「人の子は上げられるであらう」なんて仰有るんです。人の子とは抑も誰ですか。

如何にも不仕附な質問である。イエズス様は彼等の間に答へずして、倒に厳しい忠告をお與へになります。

光は尙暫く諸君の中に在ります。諸君は光を有する間に歩いて、暗に追付かれなさるな。暗に歩く人は行先を知らません。諸君は光を有する間に、光を信じて、光の子とお成りなさい。

光の子となり、救霊を得ようと思はゞ、イエズス様の世に在す間に、早く信仰を起さねばならぬのだ。さてイエズス様は異邦人に面謁を御許しになつたのでせうか。此事を傳へたヨハネ福音書には、何とも明記してない。イエズス様の平生から以て察すると、御許しにならない筈はなさうに思はれる。萬一、御許しにならなかつたにせよ、少くも彼等は群衆に交つて、右の御話を承はつたに相違ない。イエズス様は言ひ終つて彼等を離れ、街を出て、彼等より身をお匿

しになつた。多分ベタニアへお立退きなさつたのぢや無いでせうか。

「ユデア人の不信」、ヨハネ福音史家は、右の顛末を記した上で、ユデア人の不信を痛嘆して居る。斯んなに澤山の奇蹟を彼等の前に行ひ給うたけれども、彼等は猶信じなかつたのです。

「主よ、誰が我等に聽いて信じましたか。主の御腕は誰に顯れたので御座いますか」(イザヤ)と、言つた預言者イザヤの言は確に成就しました。猶イザヤは彼等の不信の哀むべき状態を描いて、斯う言つて居ります。「天主様は彼等の目を瞶まし、彼等の心を頑固になし給うた。彼等が目に見えず、心に曉らず、翻つて私に醫されぬ爲であります」(イザヤ一〇)と。尤も天主様が態々彼等の目を瞶まし、心を頑固になして、信じ得なくなつたのではない。彼等が頑として信じない所から、天罰を蒙り、然うなつたのである。固より重立つ人々の中にも、イエズス様を信仰せる者は多くありました。たゞファリサイ人を憚り、會堂から逐出されてはならぬと恐れ、自分の信仰を公に聲明し得なかつたのである。彼等は天主様の御光榮よりも、人の光榮を重じたのです。でイエズス様は彼等に最後の勸告を與へ、呼はつて曰うた。

私を信する人は、私を信するのではない。私をお遣しになつた御者を信するのです。又私を見る人は、私をお遣しになつた御者を見るのです。私は光として世に参りました。總て私を信する人が暗に止らない爲です。人が若し私の言を聞いても、之を守らないならば之を審くのは私ではない。私の参りましたのは世を審くが爲ではない。世を救はんが爲です。私を輕んじて、私の言を受けない人の爲には、之を審く者があります。私の語りました言その物が、終の日に之を審くであります。蓋し私は自分から話したのではない。私をお遣しになつた御父自らが、私の言ふべく、語るべき事を私に命じ給うたのであります。私は其の御命令が永遠の生命である事を知つて居ます。だから私の語るのは、御父の私に曰うたまを語るのではありません。

異邦人が信仰に入り、ユデア人は却つて排斥を喰ふに至るべきことは、此に十分その兆を見せ居ませんか。

私等はイエズス様にお事へ申して居る。何時でも、その在す所に居なければならぬ。イエズス様の在す所は十字架です。屈辱です。生命を憎む事です。然し今イエズス様に従つて、

生命を憎むならば、屈辱を推堪へるならば、十字架に止るならば、亦必ず永遠の生命に至るのです。御父に榮譽を賜はるのです。人までも天主様の方へ引寄せることが出来るのであります。

(三) 火曜日の出来事

(マテオ、二二ノ二〇
ルカ、二〇ノ一一)

【無花果樹枯る】、月曜日の夕暮に、イエズス様はエルザレムを出て、ベタニアへお退きになつた。翌朝、再エルザレムへ赴き給ふ途すがら、昨日お呪ひになつた無花果樹の下をお通りになつた。見れば樹は根から枯れ果てて居る。弟子等は驚いた。『何うして直に枯れたんでせう』と言つて居る。ペトロは昨朝の事を思出して、

御覽なさい、先生、お呪ひになつた無花果樹が枯れて居りますよ、と申しました。イエズス様は此序を以て、信仰の力の驚くべき次第を、十分吹き込んで置きたいものと思ひ、彼等に答へて曰うた。

天主様を信じなさい。私は誠に諸子に申します。諸子が若し信仰を有つて居て、躊躇しない

ならば、雷に之を無花果樹に爲すばかりではない。此の山に向ひ、「汝、抜けて海に投せよ」と言ひ、そして心に疑はず、自分の言ふ所は何に由らず成るのだ、と信じたならば、其事は必ず成るでありませう。だから私は諸子に申します。諸子は何事を祈り求めても、必ず得べしと信じなさい。又祈禱をなさうと思つて立上つた時、人に對して怨があるならば之を赦しなさい。是は天に在す諸子の父も、諸子の罪をお赦し下さるが爲です。諸子が若し赦さないならば、天に在す諸子の父も、亦諸子の罪を赦し給ふことはありません。

【民衆に教を説くの權】、イエズス様は再びエルザレムへ乗込み、神殿の内を歩いて、民衆を教へ、福音を宣へ給うた。すると司祭長、律法學士、長老等が近いて。

貴方は何の權を以て斯様な事をなさるんです。又貴方にこの權を授けた者は誰です。我々に言つて貰ひませう、

と、イエズス様の言尻を捉へて、強か油を絞つてやらうと、手攫引いて詰め掛けました。

イエズス様は驚きなさらぬ。平然として彼等に答へて曰うた。

私も一言、諸君に御尋ねませう。お答へ下さいましたら、私の方でも、何の權を以て斯

様な事をするか、諸君に申し上げますでせう。ヨハネの洗禮は何處からでしたか。天からでしたか。人からでしたか。何うぞ私にお答へ下さい。

全く彼等の意表外に出られた。完全な兩頭論法である。彼等は敏くその論法を見て取つた。相共に考慮へて居る。

若し天からでした、と言つたら、何故信じなかつたのです？と言はれさうだ。若し人からでした、と言つたら、何うも民衆が怖い。彼等は擧つてヨハネの預言者たる事を確信して居るから、我々に石を擲つであらう。

彼等は全く進退谷まつた。

何處からですか、一向存じません、

と答へた。知つて知り切つて居ただけれども、其場遁れに『知らない』と答へたのである。

では私も何の權に由つて斯様な事を爲るか、諸君に申し上げせま、

とイエズス様はお答へになりました。彼等の謀は甘々と破れた。民衆の前に赤恥を搔いたのみでありました。

【二人の息子の諭】、防禦戦を終つてイエズス様は、三の諭を以て進撃戦にお轉りになります。この三の諭は、前の金貨利用の諭や、後に出る、十人の處女、タレントの諭等と共に、第三分類に属するのです。第一分類的の諭と同じく、天國に關するのですが、然し彼は主として天の發端、擴張を説き、此は特に其終末を述べたものであります。第一の諭は斯うでした。諸君は之を何と思ひますか。或人が二人の子を有つて居ました。長男に近いて、「子よ、お前は、今日、私の葡萄酒畑に行つて働きなさい」と曰ひました。「否です」と彼は答へて曰つたが、後で後悔して行きました。又次男に近いて、同じ様に申しました。「主よ、往きます」と彼は答へて曰つたが、然し往きませんでした。此二人の中に、誰が父の旨を行つたものでせう。斯う問はれて、夫は長男です、と彼等は答へた。イエズス様は此答を得るや、直に諭を彼等の上へ應用なさいます。

私は誠に諸君に申します。收税吏と遊女等とは、諸君よりも先に、神の國に入るでありません。それはヨハネは義の道(律法を正)を以て諸君の方へ參りました。諸君は彼を信じなかつたのに、收税吏や、遊女等は却つて彼を信じました。諸君は之を見ても猶後悔せず、到頭彼を信

じなかつたのであります。

收税吏や、遊女等は、天主様の御哀憐を蒙るべき長男で、次男は偽善家の司祭長や、律法學士等に外ならぬ。痛い皮肉を浴せられたものではありませんか。

【不正な農夫】、豪さうに傲慢の鼻を蠢かしつゝ、イエズス様に詰問を試みた司祭長等も、今や極り悪さうに畏つて居る。イエズス様は續いて不正な農夫の諭を語り聞かせ、彼等の惡意、邪念を眼前に突付けて、御見せになります。

又一の諭をお聞きなさい。某の家父がありました。葡萄酒を作りて之に醴を繞らし、中に酢穴(葡萄酒を搾る所)を掘り、物見臺(番人用)を建て、之を小作人等に貸し渡した。そして我身は旅立ちをして、久しく遠方に在りました。その中に收穫期が近いた。小作人から葡萄酒の果を受取らせようと、一人の僕を彼等の方へ遣しました。小作人等は之を捕へて打叩き、空手で逐歸しました。再び他の僕を遣しました。彼等は又之をも毆ち、その頭を傷け、大に辱めて、空しく歸しました。猶他の僕を遣しましたら、彼等は石を投付けて之を殺しました。更に他の僕等を前よりも多く遣しましたが、彼等は是をも同じ様に待遇ひ、毆打くや

ら、殺すやりました。尙最愛の子が一人あります。何うしようか。愛子を遣すことにしよう。彼等も之を見ては或は敬ふかも知れぬ。斯う思つて最後に之を遣しました。小作人等は此子を見て、『是は相續人だよ。さア殺して、其の家督を占領しようぢやないか』と互に語り合ひました。斯くて其子捕へ、葡萄畑から逐出して之を殺しました。左すれば葡萄畑の主が参りました時、其小作人を如何に處分しますでせうか。

司祭長等は正直に答へた。

悪人を容赦なく亡し、季節に果を納める他の小作人に、其葡萄畑を貸すであります。

彼等は我と我身の上に罰を宣告したのです。家父は天主様で、葡萄畑はユデア國民、小作人はユデアの教師等です。天主様は次から次へと數多の預言者を遣して、國民の惡を戒め、善に立歸らすべく務め給うた。最後には最愛の御獨子までもお遣しになつた。然し教師等は如何に之を待遇つて居るのです。今にも都の外に引出して、殺さうとして居るぢやありませんか。爲に恐ろしい天罰を蒙り、葡萄畑は異邦人の手に移らんとしつゝあるのであります。

【捨てられた石】、司祭長等は臙げながらも其邊の意味合を覺つたんでせう。『其んな事があつて

貫つては堪りません』と答へた。イエズス様は彼等を熱視めて仰せられます。

諸君は曾て聖書に讀まなかつたんですか。『建築者の棄てた石が隅石となつた。是は主の爲し給へる事で、我々の目には不思議である』(一七ノ二)と録してあるのを。されば私は諸君に申します。神の國は諸君より奪はれ、其果を結ぶ人民に與へられるであります。凡そ此石の上に墜ちる人は碎かれ、又この石が誰の上に墜ちましても、之を微塵になすであります。

石や煉瓦造の家では、隅の所の礎石は、殊更大きい、丈夫な石を用ゐる。隅石とは夫で、茲ではメツシアを斥したものである。このメツシアに背き、この隅石を覆さうなんて、大それた考を起し、之が上に墜ち込んで、却つて自ら碎けるばかり。然しこの隅石が怖い勢で以てその上に轉げ掛つて來た日には、夫こそ全く木葉微塵だ。ユデア人の運命が正しく夫である。是に於て司祭長、ファリサイ人等は、イエズス様が自分等を斥して仰有つたのだと、はつきり曉りました。非常に憤慨、激昂して、早速イエズス様を捕へようと相談しました。然し民衆が擧つて預言者と崇め尊んで居るので、之を懼れ、敢て手を下し得ないのであります。

【王の婚筵】、イエズス様は更に第三の諭を語つて、不正な小作人の諭に於て、未だ十分言ひ盡さない所を補足はれました。前の諭に在つて、天主様は葡萄酒の所有者として、小作人に果實を要求してお在たが、此諭に於ては、寛厚、應揚な王様として、人々を其宴席に招き、之に立派な引出物を取らして居なさる。近い將來に於けるユデア國の滅亡を説いてある所は、双方とも同一である。たゞ後者にあつては、ユデア人に限らず、誰にしても新約の御恵を濫用するならば、恐るべき天罰に逢着すべきことを言ひ足してある點が違つて居るのです。天國は恰も其子の爲に婚筵を開ける王様の如きものです。彼は僕等を遣して、婚筵に招待して置いた人々を呼ばせました。彼等は肯て参りません。再び他の僕等を遣して、申します。「招待して置いた人々に告げなさい。御覽、私は早や我饗宴の準備を爲しました。私の牛と肥えた獸とは屠られました。もう何も箇も具備はつてあります。婚筵に御出で下さい。然し彼等は之を顧みません。一人は自分の作家へ、一人は自分の商賣へ往きました。其他は僕等を捕へ、甚く辱めて殺しました。王様は之を聞いて御立腹なさいました。軍を遣して、彼の殺した者等を亡し、其街を焼拂ひなさいました。」

是までは諭の前段で、直接にユデアの教師等に當る。彼等は王子の婚筵、即ちメツシア國の建設事業に參與るべく召されて居る。然るに其の御召しに應じないのみか、散々に使者を虐待しました。爲に國民全体、殊に都のエルザレムは恐ろしい天罰を蒙る事になるのであります。後段はユデア人の代りに、異邦人が召されて、筵席に列るべきことを仰有つたので、趣旨は一〇五頁に出てある諭と同一であります。

時に王様は其僕等に仰有る様、「婚筵は己に備はつた。然し招待された人々は客となるに堪へなかつた。であるから衢に出て、遇ふ人々をすべて婚筵に招きなさい」と。僕等は途々に出て、遇ふ人を善きも悪きも悉く集めました。客は婚筵の場に一杯となりました。王様は客を見ようと這入つて御出になつた。婚禮の服を着けない者が一人あるのを見て、是に「友よ、何で婚禮の服を着けないで、此處へ入つて來たのです」と仰有つた。彼は默然つて居ります。王様は給仕等に、「彼の手足を縛つて、之を外の暗黒に投出せ。其處には痛哭と切齒とがあるであらうぞ」と曰うた。夫れ召された人は多いが、選まれる人は少いものです。ユデア地方では、國王、大臣等が盛宴を張ると云ふ時になると、客に夫々禮服を送る習慣があ

つたものである。夫を受けて居ながら、平氣で、不斷着のまゝ遣つて來ると云ふは、餘りに人を馬鹿にした仕打である。彼が王様に咎められても、口が開かなかつたのは之が爲でありませう。今之を各人の靈魂に當てて考へて見なさい。婚禮服とは、天主様の愛、その愛の結果たる聖徳、靈魂の美しい裝飾ともなる聖徳を意味するのです。基督信者であらうと、誰であらうと苟くもこの愛を有たない人は、排斥を喰ふ。容赦なく宴席から摘み出される。地獄の眞黒に投出され、泣いて、哭いて切齒する許りであります。

(四) 大

論

戰

(マテオ、二二ノ一五―四六
ルカ、二〇ノ二〇―四四)

【セザルの物】、司祭長等は、イエズス様に遣り込められて、開いた口が塞がらなくなつた。イエズス様を其まゝにして、スゴ〜と立去りました。ファリサイ人等が入代つて、其頃八ヶましかつた政治問題を持出して、イエズス様の言尻を捉へようと、相談をした。然し自分等が直接に行つては、忽ち夫と感附かれる憂があるので、先づ弟子等を遣して、質問を試みさせた。夫でも未だ安心が出来なかつたと思ひ、羅馬政府とヘロデの一家を後生大事にして居る。ヘロデ

黨の人々を、弟子等と共に遣した。イエズス様が羅馬政府に不利益な御答でもなさつたものなら證人となつて、之を訴へさせようを云ふ魂膽から、其んなに用意周到な、全く水も漏さぬ手配をしたものである。兎に角彼等は様子を窺ひつゝ、義者の風を装へる弟子等を間者に遣した。弟子等は恭しくイエズス様に近きました。

先生、私等は先生が眞實に在して、正しい事を語り、且つ教へて下さる、眞理によつて、天主様の道を傳へ、人に依估最負をせず、誰をも憚りなさらぬことを知つて居ります。でムいますから、セザルに貢を納めるのは可いか、否か、思ふ所を私等に言つて下さいませ、と遣り出した。羅馬の統治は、ユデア人の爲に堪へ難い軌であつた。殊に貢を納めるのは、羅馬政府に服従を表する所以で、國民の最も屈辱とせる所でした。彼等が收税吏を蛇蝎視せるのも、強ち苛酷な誅求をする爲ばかりではなかつた。彼等は考へた、斯んな質問を持出したら、何とか御答へにならぬ譯には行かぬ。『貢を納めるには及ばぬ』と御答へになれば、反逆者として之を總督ピラトに引渡す迄だ。『貢を納めねばならぬ』と仰有れば、羅馬人の味方だ、非愛國者だ、と言ひ立て、民衆の信用を失はして遣らう。流石のイエズスも、今度ばかりは進退これ

谷るのだ。斯う思つて御返事如何と固垂を呑んで待つて居る。イエズス様は彼等の腹黒さを看破りなされた。

偽善者よ、何で私を試みるのです、

と叱り付けて、先づ彼等の荒膽を取り、夫から、

貢の貨幣を私に見せなさい、

と仰有つた。彼等はデナリオ(三十錢許りの銀貨)を差出した。羅馬政府に貢を納めるには、羅馬帝國の銀貨を用ゐたもので、其銀貨の裏面には、時の皇帝チベリウスの像を刻み、其周圍に「オウグスツス・チベリウス・セザル」と銘してありました。イエズス様は其銀貨を御手に持ちながら、

この像と銘とは誰のですか、

とお尋ねになりました。

セザルのでムいます、

と彼等は答へた。

ではセザルの物はセザルに歸し、天主様の物は天主様にお歸しなさい、

とイエズス様は仰有つた。思ひも寄らぬ答を得て、彼等も敵ながら流石に感嘆した。イエズス様の御言を民衆の前に咎め立て得ないで、其まゝ沈黙した。イエズス様を離れて立去りました。成るほど此銀貨は羅馬から來て、羅馬政府に屬せるもの、當然、羅馬政府に歸さねばならぬのだ。其銀貨がエルザレムに通用されるのは、エルザレムが羅馬政府に服屬して居る證據で、ユデア人たるものは、是非とも羅馬政府に貢を納めねばならぬ譯だ。イエズス様は斯んな様に敵の質問に對して、明な而も甘い御返答を與へ、被治者の治者に對する義務をお諭しになつた。然し其序に、信者の天主様に對する責任をも説いて、「天主様の物は天主様にお歸しなさい」と仰せられた。人權の外に神權がある。信者たる者は、其神權に對して、尊敬、服従、愛慕を獻げる義務がある。此の人權と神權と、兩者は決して氷炭相容れざるものではない。お互ひに相寄り、相扶けて、人類の幸福を増進せしめ得るものだ。イエズス様はその道理をも明にして置かれたのであります。

【肉身の復活】、ボスエが申しました如く、此日は大質問の日でした。衆議會員、ファリサイ人

ヘロデ黨、サドカイ人と云ふ様に、當時ユデア國內に幅を利かして居たすべての黨派は、交々來つて質問を試み、イエズス様の揚足を取らうと務めました。フアリザイ派とヘロデ黨が目的を達せずして退くや、代つてサドカイ派の甲乙が近いた。彼等は天使の存在や靈魂の不滅を信せず、肉身の復活を認めず、唯もう面白う、可笑しう現世を渡つて行かうと云ふ、享樂主義の人でした。彼等は斯う尋ねました。

先生、モイゼが私等に書残した所によりますと、「若し或人の兄弟が死にまして、妻を後に遺し、子を遺さなかつた時は、其兄弟は彼の妻を娶つて、兄弟の爲に子を擧げねばならぬ。」

(申命書)とあります。所で私等の中、七人の兄弟がありました。兄が妻を娶りて死にました。子が無かつたものですから、其妻を弟に遺しました。次の弟が之を娶りましたが、亦子を遺さずして死にました。第三の弟も亦その通りで、七人とも同じ様に之を娶りました。が、皆子を遺さずして死に、最後に婦人も亦死にました。で復活の時に、彼等が皆復活しましたら、彼婦は誰の妻となる筈でせうか。七人とも之を娶つたのでムいいますか？

イエズス様は靜に御答へになります。

諸君は聖書も天主様の御力も御存知ないから、思誤つてお在なんです。この世の子等は娶りもし、嫁ぎもします。然し來世、及び復活の恵を受けるに堪ふべき人々は、娶らず、嫁がす、最早死することすら出来ない。復活の子ですから、天に於ける天使に等しく、天主様の子等でありませぬ。

サドカイ人等は、復活の曉に於ける、各人の生活状態をば、現世に於けるのと全く同じものと考へた。天主様が之を變更する力を有し給ふことには、思ひ到らぬのでした。是が彼等の誤りに陥れる第一原因で、次に彼等は聖書を善く讀んで居なかつたのです。

死者の中から復活する事に就ては、モイゼの書中、荊棘の篇に、天主様が彼に曰うた事を讀まなかつたのですか。『私はアブラハムの神、イザアクの神、ヤコブの神』と曰うたぢやありませんか。天主様は死者の神ではない。生者の神です。人は皆之に生きて居ます。だから諸君は大に誤つてお在なのです。

イエズス様の御答は如何にも明白で、的確したものでした。民衆は聞いて、何れも御教に感じ入りました。律法學士の中にすら、

先生、よく仰有いました、
と曰つて、感嘆した者があつた位でした。

【律法學士の質問】、然しながら皆が皆、其んなに感嘆した譯ではなかつた。イエズス様がサド
カイ人を閉口させ給うたと聞いて、ファリサイ人等は一つに集つて種々と談合をした。其中か
ら一人の律法學士がイエズス様に近いて、

先生、すべての掟の中で第一は何でムいますか、

と質問を試みた。彼等の間には、平生喧しい議論がありました。モイゼの律法に出て居る掟
は、六百十三の多きに上つて居る。夫が一樣に重大であるべき筈はない。然らばその中の重
い、大きな第一の掟は何だらう、と盛に議論を闘はしたものでした。イエズス様は答へて曰う
た。

すべての掟の中で第一なのは是です。「イスラヘルよ、聽け、汝の神たる主は唯一の神にて在す
汝、心を盡し、魂を盡し、意を盡し、能力を盡して、汝の神たる主を愛せよ」と。是は最も大
きな第一の掟です。第二も是に同じく、「汝の近き者を己の如く愛すべし」と云ふのです。是

よりも大きな掟は他にありません。すべての律法と豫言者とは、この二の掟に據るのであり
ます。

實に天主様の愛と人の愛とは、お互に密接な關係がある。天主様を愛すれば、亦天主様の愛し
給ふ人をも愛せねばならぬ。たゞ天主様は萬事に越えて愛し、人は己の如く愛する、と云ふ
だけの差別がある許りだ。律法學士もイエズス様の御答の巧のには、感嘆せずに居られなかつ
た。

善哉、先生、實際仰せの通り天主様は唯一で、他に神なんかありません。又心を盡し、
智慧を盡し、魂を盡し、力を盡して之を愛せねばならぬのです。猶近き者を己が如く愛する
のは、總の燔祭、及び犠牲にも優つて居るのであります。

イエズス様は彼が如何にも賢く答へたのを見て、
足下は神の國に遠くはありませぬよ、

と御褒めになつた。實に彼の心行は見上げたものでした。今一步踏み出して、イエズス様を信
じさへすれば、光明を得られる。神の國の人となれるのであります。

【キリストはダウイドの子】、敵は散々に敗北した。今やイエズス様の矢面に立ち得る者は無い。イエズス様は彼等に最後の止を刺して置かんものと群れるフェリザイ人等に向ひ、此方から質問の矢を放たれました。

諸君はキリスト(メツシア)に就て何と思ひなさるか。誰の子ですか。

斯う問はれて、彼等は言下に、

ダウイドの子です、

と答へた。イエズス様は疊みかけて仰有つた。

然らば、何うしてダウイドは聖靈によつて、彼を主と稱して居るのですか。自ら詩篇の中に

「主は我主に曰うた。我れ汝の敵等を汝の足臺となすまで、汝、我が右に坐せよ」(詩 篇 九一)と曰

つて居る、ではダウイドが彼を主と稱して居るのに、何うして其子なんでせうか。

誰もこの質問に答へ得る者は無かつた。然し聖書を深く研究した人には、解答は其んなに六ヶ

しい筈が無い。キリスト様の天主性を説いた所は、聖書の到る所にある。人性の上からは、ダ

ウイドの子であつても、天主としては、亦ダウイドの主である。この分り易い道理をも悟り

得ない程、彼等の眼は眩んで居たのです。彼等こそ全く「聖書讀みの聖書知らず」でした。然

し返答が出来なければ、自分の敗北を認めるより外はない。斯の如く衆議會の代表者、サドカ

イ人、フェリザイ人、律法學士、皆悉く遣り込められた。何れも這々の體で引退つた。此

後、敢へて質問を試みる者は無かつた。今や最後の手段を取り、暴力に訴へるより外に、施す

べき所を知らぬのであります。

教師等の全敗を見て喜んだのは民衆です。彼等はイエズス様の鮮な、キビくした論戰振を

欣んで聞いて居ました。イエズス様に對して、反感を抱かせようと云ふ教師等の運動は、全く

不成功に畢つたのであります。

イエズス様は何んな難問に打突つても、決して凹されなさらなかつた。私等、基督信者は、

其イエズス様が御説きになつた御教を奉じて居るのです。之をよく研究して、その眞意に通

じてさへ居れば、何んな難問を浴せられたからつて、凹される氣遣は無い筈であります。

(五) 水曜日、律法學士、ファリザイ人等の譴責 (マテオ、二三ノ一、二ノ三、二ノ四、二ノ五)

【其言は聴いても其行に倣つてはならぬ】、昨日の論戰で、敵は悉く沈黙し終つた。是に於てイエズス様は水曜日の朝から進んで攻撃に轉り、律法學士、ファリザイ人等の偽善を公に摘發き、彼等が化の皮を引剥ぎなすつた。彼等に欺かれて、その悪い影響を受けない様、民衆、及び弟子等に御注意なさいました。

律法學士とファリザイ人とは、モイゼの講座に坐して居る。されば彼等が諸子に言ふ所は悉く守つて行ひなさい。然し彼等の行に倣つてはなりません。彼等は言ひこそするが、行ひはしないものです。

是が御話の冒頭である。イエズス様の御目的は、彼等の良からぬ行動を、飽まで厳しく譴責するに在りました。然し其前に、公私の別を明にし、彼等の正當な權利と、その不都合な遺口とを嚴に區別されました。彼等はモイゼの職を承繼いで居る。聖書を講義する公の務を帯びたものである。其の説く所には、固より従はねばならぬ。然し其の爲す所は全く語言道斷である。決してこれに見倣つてはならぬ。先づ是だけの注意をした上で、彼等の罪惡を一々數へ上げなさいます。

彼等は重い、擔ひも得ない程の荷を括つて人の肩に載せる。然れども自分は指先で之を動かすことすら承知しない。其の總の行爲は人に見られんが爲に之を爲すのです。その經牌を闊くし、その總を大きくして居る。宴席では上席を、會堂では上座を、衢では人に敬禮され、又ラビ(先生)と呼ばれることを好むのです。

經牌とは聖書の小句を書き、之を小さな皮の箱に入れ、祈禱や、祭祀の際に、額とか、左の腕とかに付け、何時も之を忘れない様にしたものでした(出埃及記、一三ノ一六)、猶ユデアでは、天主様の御誠を始終思ひ出すが爲に、上衣の四隅に總を附けることになつて居ました(民數記、一五ノ三八)。經牌でも、總でも、其の大きさはチャンと一定してあつただけれども、彼等は自家の敬虔を廣告するが爲に、態々之を大きくして居たのです。其んな厭うべき傲慢に對して、イエズス様は基督教的謙遜をお説きになります。

諸子はラビ(先生)と呼ばれてはなりませんよ。諸子の先生はたゞ獨人で、諸子は皆兄弟です。又地上の人を父と稱へても可けません。諸子の父は天に在るのが唯お獨です。又指導師とも稱へられなざるな。諸子の指導師は唯一個で、即ちキリストだからです。諸子の中に、

最大なる者は諸子の僕となるのです。自ら驕る者は下げられ、自ら謙る者は上げられるで
ありませう。

【禍なる哉】、以上イエズス様は、律法學士、ファリサイ人に就て、民衆に御注意なさいまし
た。是から直接に律法學士、ファリサイ人を相手取り、彼等に八の『禍なる哉』を浴せられ
ます。キビ／＼した語氣新味な形容、見事な譬喩が巧に相連り、身親く其場にあつて、その辛
辣、骨を刺す様な論告を聴くのが致します。

禍なる哉、偽善なる律法學士、ファリサイ人、諸君よ、諸君は人の前に天國を閉ちて、自
分も入らず、入らんとする人々をも入れないのです。

禍なる哉、偽善なる律法學士、ファリサイ人、諸君よ、諸君は長い祈を唱へて、寡婦等の
家を喰ひ潰して居る。諸君は是が爲に、最も厳しい審判を受けるでありますぞ。

禍なる哉、偽善なる律法學士、ファリサイ人、諸君よ、諸君は、一人の信者（異教からの
歸依者）を作らんとて、海陸を歴巡つて居るが、既に之を作れば、己に倍せる地獄の子（惡）と
爲して居るのです。

禍なる哉、盲者なる手引の諸君よ、諸君は曰つて居る、『すべて神殿を指して誓ふのは何で
もない。然し神殿の黄金を指して誓はゞ、果さねばならぬ』と。愚で盲な人間よ。何方が大き
いんです？、黄金ですか、將た黄金を聖ならしめる神殿ですか。又曰つて居る、『すべて祭壇を
指して誓ふのは何でも無い。然し其上なる供物を指して誓はゞ、之を果さねばならぬ』と。盲
な人間よ。何方が大きいんです。供物ですか、將た其供物を大ならしめる祭壇です。又すべ
て神殿を指して誓ふ者は、神殿と其中に住み給ふ御者を指して誓ふのです。又天を指して誓
ふ者は、天主様の玉座と、その上に坐し給ふ御者を指して誓ふのです。

第四の『禍なる哉』には、ユデア教師等の誓に關する謬見を烈しく攻撃せられたのです。既に山
の上の説教に於ても、一寸この問題に觸れさせなかつたが、今度は更に新しい實例を取出して、
ファリサイ人等の腐敗、その馬鹿氣きつた言草を公にされました。猶一步をお進めになる。彼等
が些細な事には非常に嚴格でありながら、却つて重大な責任、緊要飲くべからざる義務には馬
鹿に寛で、その仕打が全く矛盾して居るのを非難し、酷烈な皮肉を浴せられます。

禍なる哉、偽善なる律法學士、ファリサイ人、諸君よ、諸君は薄荷、茴香、馬芹の十分一

を納めながら、律法に於て、より重大なる正義と、慈悲と、忠實とを遺して居る。此等は固より爲さねばならぬ。彼等をも亦怠りてはならなかつたのです。諸君こそ子々を濾出して、駱駝を呑んで居る盲者な手引なんだ。

如何にも酷烈な様だが、然し亦た適評である。彼等は律法に禁じてある不淨の昆蟲を飲み込んで、はならぬと云ふもので、態々水を濾して飲むと云ふ位に、お念の入つたことを遣て居る。夫で居て、重大な律法上の掟は、平氣で破るのでした。子々を濾出しながら、駱駝を呑むの類では無かつたでせうか。

禍なる哉、偽善なる律法學士、ファリザイ人、諸君よ、諸君は杯と盤の外を淨めて居るが内は貪と汚とに充滿つて居る。盲者なるファリザイ人よ、先づ杯と盤の内を淨めなさい。然らば外も淨くなるであります。

禍なる哉、偽善なる律法學士、ファリザイ人、諸君よ、諸君は白く塗つた墓にさも似たりだ外は如何にも麗はしく人に見えるが、さて内は死者の骨と諸の汚とに充滿つて居る。斯の如く諸君も外は義人の如く人目に見ゆる。然し内は、偽善と不義とに充滿つて居るのです。

禍なる哉、偽善なる律法學士、ファリザイ人、諸君よ、諸君は預言者等の墓を建て、義人等の記念碑を飾り、「我々が若し祖先の時代にあつたらば、預言者の血を流すのに與みしなかつたでせうに」と言つて居る。斯くて諸君は、預言者を殺した者の子孫たることを自證するのです。然らば諸君も亦祖先の量を充しなさい。

第八の禍を結んだ一小句は、特に深長な意義を含んで居る。その惡辣な迫害を執行して、天様の怒の杯を溢出らせよと、謂はゞファリザイ人を煽動なすつたのであります。

【天罰】、以下、天様の御怒と、その怖い天罰とに就て、話をお進めになります。

蛇よ、蝮の裔よ、諸君はいかで地獄の宣告を免れ得ませうぞ。看なさい、私は諸君に預言者、智者、律法學士等、使徒、及び其他の弟子等を遣すであります。然し諸君はその或者を十字架に釘け、或者を諸君の會堂に鞭ち、街から街へと窘逐めるであります。斯くて義人アベルの血より、諸君が神殿と祭壇との間(司祭の庭)にて殺した、バラキヤ(大司祭ヨイアダ)の子ザカリアの血に至るまで、すべて地上に流された義人の血は、諸君の上に歸されるであります。私は誠に諸君に申します。此等の事は、すべて現代の上に来るであります。

う。

イエズス様は峻厳假借す所なき検事の如く、ユデア人の罪を手痛く論告されました。やがてエルザレムの上に来るべき慘禍を思ひ、痛嘆の至りに堪へず、その愛する都を呼びかけて、左の如く宣うた。

エルザレムよ、エルザレムよ。預言者等を殺し、且つ汝に遣はされし人々に石を擲つ者よ。

私は牝鶏が其雛を翼の下に集めるか如く、汝の子弟を集めんとした事も幾度でした？。然し汝は之を否んだのです。

「汝は之を否んだのです」この語を發し給ふ時、イエズス様の御胸は破れんばかりの心地を覺えさせ給はぬでしたらうか。然しもう已を得ぬ。自分は擁護の翼を疊んで了ふ。如何な恐ろしい敵が襲ひ蒐つても、自分は其責を負はないのだ、と言添へて置かれました。

看よ、汝等の家は荒廢れて、汝等に遣されるであります。私は誠に汝等に云ひます。汝等は今から、「主の名によりて來れる者は祝せられ給へ」と言ふ迄は、私を見る事がありますまい。

ユデア人が其んなに言ふ時は、世の終末の事で、其時には、彼等も改心して、イエズス様を信するに至るのである。戰慄る程の天罰を告げ給うた末に、希望の光を一條、遙の彼方にお見せ下さつた譯であります。

【貧しき寡婦の賽錢】、語り終つて、イエズス様は喇叭形の賽錢箱が、ズラリと十三個も並んであるその眞向に坐して、暫く御休息になりました。過越祭に集つた参拜者は、その箱に各々賽錢を入れて居る。富者が、是れ見よがしに澤山投込んで居る中に、一人の貧しい寡婦が遣つて來て、二ミヌタ、即ち三厘ばかりを入れました。イエズス様は之を見て、弟子等を呼集め、さて仰有る様、

私は誠に諸子に申します。この貧しい寡婦は、賽錢箱に投入した總の人よりも多く入れました、と云ふのは、總の人は、その有り餘つた中から賽錢を入れたのに、此婦は其の乏しい中から、自分の有つて居た總を、その生活の料を悉く入れたのであります。

天主様は、獻げる品や、その量よりも、寧ろ獻げる人の心を御覧になる。彼の寡婦の獻げたのは僅か三厘に過ぎなかつた。然し其の總を獻げたので、億萬長者が、幾萬圓を投じたのに優りは

しても、劣りはせぬのでありました。
イエズス様の御誨を讀んで、我身の上に反省して下さい。自分にも其んな怖ろしい誨を浴せられる所が有りはしませんでせうか。

(六) エルザレムの滅亡と世の終末の預言 (マテオ、二四ノ一) (マルコ、一三ノ一) (ルカ、二一ノ五)

【神殿の破滅】、水曜日の夕方、イエズス様は弟子等と神殿を御出行きになつた。多分ベタニアへ歸つて、一夜を過す御考であつたのでせう。途中、弟子等はイエズス様に近いた。壯大にして華美を極めし神殿を指しつゝ、一人の弟子は口を切つて、

先生、御覽下さい、この石は如何です。この構造は？

と申しました。他の弟子等も亦た相槌を打つて、その石の見事さ、有名な人々の奉納せし獻物の華麗さ等を譽め囁きました。實に神殿の構造と云つたら、夫はく人目を眩まさんばかり、その之に使つてある石材は長さ二十五肘、高さ八肘、厚みが十二肘からあつたと、史家ヨゼフスは書き留めて居る。唯今でも「哀傷(かなしみ)の石垣」と云つて、昔の神殿の境内を圍みし

石垣の一部が残つて居る。ユデア人は金曜日毎に集つて、その石垣に接吻しては泣き、泣いては接吻しつゝ、長い哀傷を繰返すのですが、其石垣の基礎には往々、長さ四メートル、(十三尺)若くは五メートル(以上)の石を使つてある。弟子等が誇とせるのも無理はない。然しイエズス様は答へて曰うた。

諸子はこの一切の大建築を見て居ますか。私は誠に諸子に申します。此處には一の石すら崩れないで、其まゝ石の上に遺る様なことがありますまいぞ。

四十年を出ずして、此の預言は文字通に成就しました。其の宏壯な建物は、影も形も止めなくなつた。一行は橄欖山を経て、ベタニアへ向ひました。山の絶頂近く、神殿を眞向に見下す邊に到り、青芝の上に腰を下して、暫く休息しました。神殿の眺望も、此邊からは別して佳い。眞白い大理石や、黄金の裝飾が夕日の光を眞面に浴びて、眩しい許りに輝き渡つた時などは、壯嚴絶美、言はん方なしでありましたでせう。さて弟子等は、イエズス様の預言が氣に掛つてならぬ。特にペトロとヤコボ、ヨハネとアンドレアの四人は竊にイエズス様に近いて、

何時この事があるのですか。この事が果され初める時は、何んな兆がありますか。主の再臨と世の終末の兆とは何で違いますか？

と、お尋ねしました。彼等はエルザレムの滅亡と世の終末と、基督様の再臨とは同時に起り、メツシアの國が茲に慶たく樹立られるものと考へて居たので、三つを一つにして問うたのでした。イエズス様も問はれたまゝ御答へになりました。先づエルザレムの滅亡と世の終末の前兆を告げ(二三ノ五一―四)、次にユデア國の瓦解と其前兆とを預言し(一五ノ二三)、終に世の終末と之に伴ふ様々の不幸、災難、其の近きを認める爲の方法(二三ノ三五)等をもお知らせになりました。

【エルザレムの滅亡と世の終末の前兆】弟子等は、エルザレムの滅亡と世の終末とを同時に起るものゝ如く思ひ、兩者を混同にして、お尋ねしたが、イエズス様の御答は斯うでありました。

諸子は人に惑はされない様、注意なさい。多くの人が私の名を冒して、「我こそキリストである。時は近い」と言つて来る。そして多くの人を惑はすであります。諸子は彼等に從つてはならぬ。又戦争があり、叛亂がありと聞き、戦争の噂を耳にしても、懼れてはならぬ。此等の事は先づ有るべき筈だが、然し終は未だ直に來るのではありません。そは民は民

に、國は國に逆ひ起り、到る處に大きな地震、疫病、饑饉があります。天には凶變があり、大なる兆が見はれであります。是は皆苦痛の初です。諸子は自ら省みなさい。さて此等一切の事に先ちて、人々は私の名の爲に、諸子に手を下して、諸子を迫害し會堂に、監獄に、衆議會に付すであります。諸子は諸會堂に於て鞭たれ、私の名の爲に總督と王侯の前に引かれる事があります。是等の事が諸子に起るのは證據となるが爲です、されば人々諸子を引立てる時、諸子は覺悟して居なさい。如何に答へようかなんて、預め慮るには及びません。たゞ其時、諸子に賜はる事を言ひなさい。私が諸子に口と智慧とを與へます。諸子のすべての敵は、夫を言防ぎ、論破り能はぬであります。言ふのは諸子ではなく、聖靈だからであります。

さて兄弟は兄弟を、父は子を死に付し、子等は両親に立逆ひ、且つ之を殺すであります。又諸子は親、兄弟、親族、朋友から賣られ、彼等に殺される者もあります。又私の名の爲に、總の人に憎まれるであります。然し諸子の頭髮の一筋でも失せは致しません。忍耐を以て諸子の魂を保ちなさい。

其時、多くの人は躓いて、互に裏切り、互に憎み合ふであります。其時、幾多の偽預言者も起つて、多くの人を惑すであります。不義が溢れて居るので、多くの人の愛は冷た渡りませう。然し終まで耐忍ぶ人は救はれるであります。そして天國のこの福音は、萬民に證據として、全世界に宣傳へられ、然る後、終末が来るであります。

以上はエルザレムの滅亡、並に世の終末の前兆を、併せてお告げになつたものである。偽キリストの出現、政治社會の瓦解、自然界の混亂、基督教徒の迫害等、何れも恐しい前兆のみであります。

【エルザレムの滅亡の前兆】、次にイエズス様は、特にエルザレムの滅亡の前兆をお告げになります。

諸子はエルザレムが軍隊に取圍まれるのを見たらば、其時こそ、その滅亡の近いことを知りなさい。されば預言者ダニエルに託りて告げられた「最と憎むべき荒廢」が在るべからざる聖所に嚴然と立つて居るのを見た時は、讀む人は悟らねばなりません。

酸鼻見るに忍ばない程の災難を形容して、「最憎むべき荒廢」と仰つたのである。エルザレムが包圍まれた時、熱信派の人々は、全く狂氣になつて暴れ廻り、亂暴狼籍に至らざる所なく、神

殿内にまで夥しい血の雨を降らしたものでした。實際、預言の通りになつたのであります。

其時ユアデに在る人は山へ逃げなさい。市中に居る人は立退きなさい。地方に居る人も市中に入つてはならぬ。屋の上に居る人は、家から何物かを取らんとて、内に入つてはならぬ。畑に居る人は、其上衣を取らんとて歸つてもならぬ。是こそ刑罰の日であつて、録された事は總て成就するのです。此日に當つて、懐胎せる人や、乳を哺せる人は禍なる哉、諸子の逃げるのが、冬か、安息日か、當らない様、祈りなさい。そは天主様が万物を創造になつた開闢の始から今に至るまで、曾て有らず、後にも復有るまい程の惱が、其日には有るであります。兎に角、大難が地上にあつて、怒は此民に臨み、斯くて人々は劍の刃に斃れ、捕虜となつて諸國に引かれ、諸國民の期が満つるまで、エルザレムは異邦人に蹂躪されるであります。主が若し其日をお縮め下さいませなんだら、救はれる人すらありますまい。然し特に選み給ひし選みの人々の爲に、彼日は縮められる様になるのであります。ユデア及びエルザレムの基督教徒は、此の御教訓に従ひ、羅馬軍が近いたと見るや、ヨルダン河の東、ペルラと云ふ山間の町へ難を避け、一命を全うしたのであります。

【世の終末と基督の再臨】、イエズス様はエルザレムの滅亡から一躍して、世の終末に轉じ、その前兆をお告げになります。

其時もし人があつて、『ホラ、基督様が此處に居らつしやるよ。彼處に居らつしやるよ』と言つても、信じてはなりません。それは偽キリスト、偽預言者が起つて、大なる徴と奇蹟を行ひ出來得べくんば、選ばれた人々までも惑はさんとするであります。されば諸子は自ら省みなさい。私は預め一切を諸子に告げました。だから、たとへ人が『ホラ、キリスト様が荒野に在すよ』と言つても、出て行つてはならぬ。『ホラ室内に在すよ』と言つても、信じてはならぬ。と申しますのは、電光の東から出て西にまで見えるが如く、人の子の來るのも、亦其通りであります。總て屍のある所には、鷲も亦集りませうぞ。

電光が天下到る處に、バツと一時に見ゆるが如く、基督様の再臨し給ふ時も、一度に總の人に見給ふのです。態々荒野へ行き、家の奥に這入つて探すには及ばぬ。殊に屍の如き罪人の居る所には神の怒を報ゆる使が暴鷲の如く、遣つて來るものであります。

其時、斯る患難の後、直に日は晦み、月は其光を與へず、空の星は天から隕ちますでせう。

地上には海と波とが鳴轟き、諸々の國民は之が爲に狼狽へ、人々は全世界の上にとり上る事を豫期して、怖さに憔悴れ、天上の能力は震動くであります。其時、人の子の徴（十字架）が空に顯はれ、又其時、地の民族は悉く哭き、人の子が大なる能力と威光とを以て空の雲に乗りて來るを見るであります。彼は聲高き喇叭を持てる己が天使等を遣し、天の此の涯より彼の涯まで、四方から其の選まれた人々を集めさせるであります。此等の事が起りますならば、仰いで首を擧げなさい。そは諸子の救贖は近いのでありますぞ。

舊約の預言者等が好んで用いた形容を備ひ來つて、先づ世の終末に於ける非常に怖るべき出來事を描かれた。次に人の子が大なる威光を輝かし、無数の天使を從へて降臨し給ふべきこと、義者も惡人も残らず御前に呼び集めて、審判を開き給ふべきことをお告げになつた。終に一個の短い喩を借りて、その預言の必ず全うせらるべきことを申添へて置かれます。

無花果樹より喩を學びなさい。其枝が柔かた、葉を生ずるならば、夏の近きに在ることを知ります。夫と同じく、此等の事が成るのを見たらば、諸子も亦天國が近く、門にあることを知りなさい。私は誠に諸子に申します。此等の事が皆成るまでは、現代は過ぎますまい。

天と地とは過ぎませう。然し私の言は過ぎる事がありますまいよ。右はエルザレムの滅亡と、世の終末とに關する預言の結末である。随つて『現代』と云ふ語はエルザレムの滅亡に就て言へば、其頃のユデア人に當り、世の終末に關して言ふ時は、その當時の一般人類を指したものであると思はなければなりません。

【最後の御勸告】、預言は此處に終りました。以下、實行に移り、その怖るべき場合に處する準備として、警戒(ようじん)の必要を力説なさいませう。

其日、其時に至つては、誰だつて、天に於ける天使等でも、子(人の子として)でも之を知るものは無い。唯御父が之を知り給ふばかりです。さて人の子の参りますのは、ノエの日に於けるが如くでありませう。即ち洪水の前の頃、ノエが方舟に入る其日まで、人々は飲んだり食つたり、娶つたり、嫁いだりして居ました。洪水が来て、彼等を悉く引渡すまでも知らなかつたのです。人の子の参りますのも亦其通りでありませう。だから諸子は自ら慎みなさい。諸子の心が放蕩、酩酊、或は今生の心勞の爲に鈍り、そして彼の日が思はず諸子の上来る様なことが無い様に用心なさい。彼の日は、地の全面に住める總の人の上に、突然

畏の如く来るでありませう。其時、二人畑に在りまして、一人は取られ、一人は遺されませう。二人の女が磨を挽いて居まして、一人は取られ、一人は遺されませう。だから諸子は來るべき此等すべての事を逃れ、人の子の前に立つに堪へる者となれる様、警戒をし、何時も何時もお祈りなさい。

斯うお諭しになつた上で、イエズス様は更に一寸した喩を以て、警戒の苟且にすべからざる所以をお説きになります。

諸子は期の何時なるかを知らないから、注意し、警戒し、祈禱しなさい。人が其家を去り、遠方に旅立つに當り、僕等に命じて、各々その務を分けて充てがひ、門番には警戒すること命じたが如きものです。だから諸子は警戒しなさい。家の主の参りますのは何時でせうか夕暮?夜中?鶏の鳴く頃?朝?諸子は夫を知らないのです。彼が遽に來つて、諸子の寢込みを見當る様ではなりませんよ。

諸子は之を知らねばならぬ。家父が若し盜賊の來るべき時を知つて居たらば、必ず警戒をして、其家を穿たせる様なことはありません。然らば諸子も用意して居なさい。諸子の知ら

ない時に、人の子は来るでありません。私は諸子に言ふ所を、總の人にも申しませう。警戒しなさい。

猶この警戒の必要なることを、弟子等の頭腦に深く浸み込ませるが爲に、ガリレア宣教の終頃に仰有つた所を、今一度、この序に繰返しなさいました。

時に應じて、糧を其僕等に與へさせんとて、主人が彼等の上に立てた忠誠、伶俐な僕を誰ぞ思ひますか。其主人が参りました時、其んなにして居るのを見出された僕は幸福でありますぞ。私は誠に諸子に申します。主人は其のすべての所有を彼に宰らしめるであります。若しや彼の悪い僕が、「主人の来るのは遅い」と心の中に謂ひ、其同僚に毆つて掛り、酒徒と喰つて飲んで居るならば、其僕の主人が、彼の思はぬ日、知らぬ時に來て、之を處罰し、其報を偽善者と同うせしめますでせう。其處には、痛哭と切齒とがあるであります。

何が、何時、何うあつても、平素から十分警戒をし、準備をしてすら居れば、氣遣ひする所は少しも無い。イエズス様が、繰返し繰返し警戒の必要をお説きになつたのは、之が爲であります。聖ペトロはこの預言を説明して、左の如く申された。『主の日は盜人の如く來るであります。

う。その時、天は大なる轟を以て去り、物質は焼け毀れ、地とその上なる被造物とは焼亡びるであります。斯の如く萬物の毀るべきことを覺つて、汝等は如何にも聖なる行狀、及敬虔の業に於て、主の日の來るを待ち、且つ之を早むべきである』(三ノ一〇以下)と。主の預言もペトロの教も、主旨は全く同一です。萬物は毀れ去る、頼むに足りない。主の日は盜人の如く來る。油断をしてはならぬ。警戒せよ、警戒せよ、と注意されたものに外ならぬのであります。

(七) 警戒の必要 (マテオ、二五ノ一―四六)

【十人の處女】、警戒は必要である。幾ら繰返しても、猶足りない心地がせられるので、イエズス様は更に十人の處女と、タレントの喩を添へられた。十人の處女の喩は、ユデアに行はれる婚禮式を題材にして、重大な教訓を含めたものであります。

その時、天國は、十人の處女が各々その燈を執つて、新郎と新婦とを迎へに出た様なものであります。其十人の中、五人は愚で、五人は賢くありました。愚な五人は燈を執りながら

油を携へて居ません。賢い方は燈と共に油を器に携へて居ました。ユデア地方に行はれる婚禮式をかい摘んで云へば、先づ新郎が介添や、親戚に伴はれて新婦の宅へ行きます。新婦は十人の處女と身装をして待つて居る。やがて新郎が参りますと之に伴はれて其家に到り、宴會を開くのであります。固より儀式は初夜に始まるのですから、新郎を迎へるには、燈を用意せねばならぬ。然しユデアの燈は極く小さい、少の油しか入らぬ。長く點すには必ず別に油を携へねばならぬ。愚な五人はその油の用意を怠りたのです。その結果は如何になりましたか？

さて新郎の來るのが遅はつたので、皆假寢をして眠込んで了ひました。夜中に至つて、『ホラ、新郎の御出じや。出て迎へるぞ』と云ふ聲が起りました。彼の處女等は皆起きて、その燈を整へました。愚なのは賢い方に向ひ、『貴方等の油をお分け下さい。私等の燈が消えますので』と申しました。『然うしましたら、恐らく私等にも貴方等にも足りなくなりますが。寧ろ商人の方へ往つて、御自分にお求めなさいよ』と賢い方が答へて申しました。彼等が買ひに行く間に、新郎が参りました。用意してあつた處女等は共に婚禮の場に入りました。

すると門は閉された。やがて他の處女等も参りまして、『主よ、主よ、私等にお開け下さいませ』と言ひます。然し彼(新郎)は答へて、『私は誠に貴女等に申します。私は貴女等を知らないのです』と言ひました。だから諸子は警戒しなさい。諸子は、其日も、其時も知らないのですから。

新郎はイエズス・キリスト様です。世の終に當つて、聖會と婚を結び、之を新婦として、天國へ御案内して下さいます。十人の處女は基督信者です。何れも新婦の友として、天國への案内状を戴いて居る。然し共に入つて、其の神秘的な婚禮に參與るを許されるのは、平素からよく警戒し、善業の油を用意して居る靈魂のみであります。

【タレントの喩】、イエズス様は、續いてタレントの喩を語り、世に生きて居る間に、天主様の聖寵を利用する必要をお説きになります。

天國は或人が遠く旅立をしようとして、其僕等を召び寄せ、之に其所有を渡せるが如しです。一人には五タレント、一人には二タレント、一人には一タレントと云ふ様に、各々の力量に應じて渡し、自分は直に出立しました。五タレントを受けた者は、行つて之を以て

取引をなし、他に五タレントを儲けた。二タレントを受けた者も、同じ様にして、他に二タレントを儲けた。一タレントを受けた者は、行つて地を堀り、主人の金を藏して置きました。久しきを経て彼の僕等の主人が来て彼等と計算をしました。五タレントを受けた者が近い、別に五タレントを差出して申しました。『主よ、私に五タレントをお渡しになりました。御覽、別に又五タレントを儲けました』と。『よろしい。善にして忠實な僕じや。其方は些な物に忠實であつたから、私は多くの物を其方に主宰せよう。其方の主の喜に入るのだ。』と主人は言ひました。二タレントを受けた者も亦近いて申しました。『主よ、私に二タレントを御渡しになりました。御覽、別に又二タレントを儲けました』と。『よろしい、善にして忠實な僕じや、其方は些少な物に忠實であつたから、私は多くの物を其方に宰せよう。其方の主の喜に入るのだ』と、主人は言ひました。一タレントを受けた者も亦近きました。『主よ、私は貴方が厳しい御方で、播かない處に穫り、散らない處から聚めになることを知つて居ります。で私は懼れました。行つて貴方のタレントを地に藏して置きました。御覽、是は貴方の物です』と申しました。主人は答へました。『悪くて懶惰な僕じや、其方は、私が播かな

い處に穫り、散さない處から聚めるのを知つて居た程ならば、私の金を兩替屋に預けて置くべきではなかつたか。然すれば私に来て、私の物を利息と共に受取つたであらう。で皆は此者から其タレントを取上げ、そして十タレントを有てる者に與へなさい。總て有つて居る者は與へられて富有になりませう。然し有たない者は、其の有つて居ると見えるものまで奪はれるでありませう。そして無益な僕は外の暗黒に投出しなさい。其處には痛哭と切齒とがあるでありませう。』と

此諭も、やはり警戒を勧め、天主様への奉仕に、熱心忠實なるべきを説いたものである。私等は各自の力量に應じて、夫々に、才智、學識、財産、地位、聖寵等のタレントを戴いて居る。その大小、高低、多寡は問ふ所でない。たゞ必要なのは、その戴いた分に應じて之を利用し、以て功德を積むことである。五タレントを受けて居ながら、別に二タレントしか儲けないでは、御咎を蒙らねばならぬ。然らばとて、二タレントを受けた者が、五タレントを儲けなかつたらつて、不足を言はれる所はありますまい。『多く與へられた者は多く請求せられる』、この道理を何時もく忘れない様にさへして居れば間違はありますまい。

【最終審判の模様】、終に臨み、イエズス様は、最終審判の模様を簡單にお話し下さいました。最高判事、選を受けし義人、排斥を喰ひし悪人、双方に宣告さるべき賞罰等を、手に取る如く鮮に描いて、お見せになりました。

人の子が其權威を輝かし、諸々の天使を従へて参ります時は、其威光の座に据るでありませう。斯くて萬民を其前に集め、牧者が羊と牡山羊とを選び別けるが如く、彼等を互に引別

け、羊を右に、牡山羊を左に置くであります。

其時、王様は其右に居る人々に仰有るでせう。『來れ、我父に祝せられたる者よ、世界開闢より、汝等の爲に備へられたる國を得よ。そは私が飢ゑた時、汝等は食べさせて呉れた。私が渴いた時、汝等は飲まして呉れた。私が旅人であつた時、汝等は宿らして呉れた。裸であつた時、着せて呉れ、病に罹つた時、見舞つて呉れ、監獄に在つた時、訪れて呉れたのだから』と。其時、義人等は王様に答へて申すであります。『主よ、私等は何時、主の飢ゑ給ふのを見て、食べさせて上げました？ 渴き給ふのを見て飲まして上げました？ 何時旅人とおなりなかつたのを見て宿らせ申し、裸で居らつしやるのを見てお着せ申しました？ 何時、病に罹り、

監獄に在すのを見て、主の方へ上りましたで御座いませうか』と。王様は答へて彼等に仰有るでせう。『私は誠に汝等に曰ひます。汝等が私の此の最小き兄弟の一人に致したのは、事毎に私に致したのです』と。

その時、又左に居る人々にも曰うでせう。『誚はれたる者よ、私を離れて、悪魔と其使等の爲に備へられた永遠の火に入りに行け。そは私が飢ゑた時、汝等は食べさせて呉れなかつた。私が渴いた時、汝等は飲まして呉れなかつた。私が旅人であつた時、汝等は宿らして呉れなかつた。裸であつた時、汝等は着せて呉れなかつた。病に罹つた時、監獄に居る時も、汝等は私を訪ねて呉れなかつたのです。』と其時、彼等は王様に答へて申ませう。『主よ、私等は何時主の飢ゑたり、渴いたり、旅人であり、裸であり、病に罹り、或は監獄に在すのを見ながら、主に御事へ申さなかつたので、いいますか』と。其時、王様は彼等に答へて仰有るでせう。『私は誠に汝等に曰ひます。汝等が此の最小き者の一人に爲なかつたのは、事毎に私に爲なかつたのです』と。斯くて是等の人々は永遠の罰に入り、義人は永遠の生命に入るであります。是で幕は落ちた。審判は終つた。上告の餘地は全く無い。義人は永遠に其の盡きせぬ生命を樂

み、悪人は窮りなく其の不幸を嘆くのみであります。

全人類の爲には、世界の終末に當つて、公審判が開かれ、右様の判決が下される。然し各個人の爲にも、死んで永遠の世界に足を踏み込む其の瀬戸際に、同じく審判がある譯だから、誰しも警戒を怠りてはならぬ。「我父に祝せられたる者よ」と言はれるのは、如何にも楽しいものだが、「詛はれたる者よ」と云ふ怖い語を浴せられた日には、全く浮む瀬は無いのであります。

第六章 最終晚餐

(一) 衆議會の密議とユダの裏切

【衆議會の密議】、是までイエズス様は、晝は神殿に教を説き、夜は退いて橄欖山にお宿りになります。民衆は朝早くから神殿へ押掛け、御側に集つて御話を承るのでした。いよく酔無しパンの祭日たる過越の祝が近いた。この過越祭と云ふのは、ニサン月の十四日の夕方に始まり、

一週間續いて行はれ、二十一日を以て終ることになつて居たのです。さてイエズス様が以上の御話をなさつたのは、水曜日の夕方でした。御話終つて弟子等に仰せられた。

諸子の知つての通り、二日の後に過越の祝が行はれる。人の子は十字架に釘けられる爲に、渡されるであります。

恰當この時、司祭長、民間の長老等は、カイファ司祭長の邸に集つて、評議を凝して居ました。彼等は何ヶ月も前からイエズス様を亡き者にせんと企んで居たのです。數日前には、いよく最後の手段を執ることに一決しました。然し何時、是に手を下すかと云ふことだけは、未だ決定して居なかつたので、其の談合の爲に集つて來たのであります。

詭つて引捕へ、そして片付けて了はう。然し民衆は馬鹿に彼を慕ひ懐いて居る。祝日中に手を下したら、何んな騒動が持ち上らんにも限らぬ。

斯う相談して居る所に、十二使徒の一人、イスカリオテのユダが突然這入つて來た。

皆様は私に何をお與へ下さいますか。私が皆様に彼をお付し致しますが、

と突然に申し出た。彼等の喜ッたらありません。詭つて引捕へようとは相談したものゝ、さて

實行となれば容易なものではない。果して成功するか否か、夫すら不安で堪らずに居る所へ、親しい弟子の一人が裏切つて出た。密に捕へる方法を告げて呉れた。親しい弟子までが裏切つて出る位ならば、民衆の懐いて居る加減も大低察しられる。是では祝日の終るのを待つまでも無い。機會さへあれば、直にでも手を下さう。

司祭長等は斯う思つて、彼に銀三十枚を與へると約束した。銀三十枚は、其頃、賣買して居た奴隷の定價です。夫でもユダは承諾した。彼は全く悪魔に魅せられて了つたのです。此時から群衆の居ない時に、イエズス様を付さんものと、注意深く機を狙つて居た。

三年の間、言に餘る御恵を戴き、兄弟の如く、愛子の如く、親切に可愛られて居たユダが、何うして僅か銀三十枚位で主を賣るに至つたのでせう。『悪魔がユダに魅つた』(ルカ福音書)史家は曰つて居る。無論、主を賣ると云ふは悪魔業である。然し彼が其んなに悪魔の魅る所となつたのに付ては、何か其所に夫れ相當の仔細があらねばならぬ。第四福音書には「彼を盗人」と呼んである。彼は貪慾な男であつた。『私に何をお與へ下さいませるか』と、第一に金の相談から持出して居る。僅か銀三十枚位に満足して、其んな憎むべき商をやつたのを以ても、彼の品性が

如何に下劣であつたか、彼の眼中たゞ金錢あるのみで、全く他を知らなかつたことが、察せられよう。彼はマリアがイエズス様に香油を注いだのに不平を鳴し、そしてイエズス様に譴めつけられた。其時から主を賣る決心をしたものらしく思はれる。怖るべきは利慾の念ちやありませんか。

ユデアでは、舊くから「破門の罰」と云ふのがありました。イエズス様から少し後代に出来た記録によつて見ると、夫はニドウイ、ケレム、シヤンマタの三種で、ニドウイ(引離す)は判事の職を帯びた司祭ならば、誰でも之を課することが出来る。その期間は三十日で、本人が改めなければ、二回でも、三回でも、之が延期をして可いのでした。この罰に處せられた者は、神殿に這入ることは許されても、その場所が一定して居て、勝手に歩き廻ることは出来ない。用事があつて之に近く人も、六尺ばかり懸離れて居なければならぬ。ケレム(打棄てる)は、少くも十名の役員を以て成れる裁判所から宣告されねばならぬ。この處分を蒙つた者は、申命記(二八)に出て居る公の詛を浴せられ、神殿に入ることを許されない。公然と人を教へることも、會堂の説教に參列することも、生活に必要以外の物を買つたり、賣つたり

することも出来ない。然し密に人を招いて教へたり、教を受けたりすることは、許されぬではない。シヤンマタ(死)は罪人を全く法律の保護の外に置くので、衆議會が之を宣告する。一たび宣告が下つてからは、誰でも之を逮捕へることが出来る。外國へ高飛しない限り、死を免れ能はぬのである。

イエズス様時代にも、斯んな懲罰が行はれて居たが、ユデアの教師等が斯んな順序で以て、イエズス様に處分を加へたか、何とも斷言の限りではない。然し注意して福音書を讀んで見ると、何うも夫に當りさうな個所が少からず見受けられる。生れながらの盲者を癒し給うた頃から、イエズス様をキリストと認めた者は、「會堂外に放逐する」と、教師等は話合つて居ました(ヨハネ)。況してイエズス様に對しては、偽の預言者として、破門を宣告して居なかつたでせうか。随つて彼等は、イエズス様を引捕へよう、石殺にしよう、と幾度も試みました。奉殿記念祭の折(ヨハネ)に、イエズス様が異邦人の庭の外なるサロモンの廊を歩いて居られたのも、ニドウイの罰を宣告せられ給ふたからちや無いでせうか。終にラザルを復活させ給うた時、衆議會は最後の宣告を下しました。唯その宣告を公に發表して之が執行を

命ずるのは、聖木曜日まで延期したのでした。イエズス様が日曜日から水曜日まで、晝は神殿に在つて民衆に教へながら、夕方になると、ペタニアへ御退きになつたのも、聖木曜日には、やつと夕暮になつてから、エルザレムの高間へお出になつたのも、斯う云ふ事情があつたからだ、と言ふ人があります。

(一) 最終晚餐の準備 (マテオ、二六ノ一七―一九) (マルコ、一四ノ二一―二六) (ルカ、二二ノ七―一三)

【晚餐の準備】、いよゝ木曜日の朝となつた。過越の羔を屠るべき酔なしパンの日が來たのだ。弟子等はイエズス様に近いて、過越の食事を何處に備ふべきか、と問うた。イエズス様はペトロとヨハネを指名して、之をエルザレムに遣し、往つて私等の爲に、過越の備を致しなさい、と命じなされた。一同の會計係はユダでした。常ならば、ユダをお遣しになる筈だが、然し今度に限つて、彼を差措きなされた。彼の腹黒い企を、疾に看破りなされたからである。さて二人はイエズス様に向ひ、

何處へ往つて、先生の爲に過越の食事を備へるのが御希望ですか？
と問ひました。イエズス様は答へて曰うた。

市中に這入る時、水瓶を肩にせる人が、其方等に行遇ふでせう。其人の後に隨いて、その這入る家へ行きなさい。そして家の主人に向ひ、『先生が仰有います。私の時は近きました。私は弟子と共に御宅で過越を行ひたい。私の弟子と過越の食事をすべき席は何處にありますか』と言ひなさい。然すれば彼人は、既に整へた、大きな高間を其方等に示しますでせう。其處に備へなさい。

何故イエズス様は、こんなに謎見た様な命令を彼等にお與へになつたのでせう。何町の何番地の某宅と、名指して仰有つた方が、手取早く分つたでせうに、と思はれるが、夫は集會の場所を最後までユダに感付かれぬ爲でした。敵の手に身を付す前に、是非過越の食事を爲し、その美しい愛の記念たる聖體を制定めねばならぬ。ユダの密告によつて、捕手から宴會の場へ踏み込まれる様なことがあつては、何も彼も滅茶々々になる。會計係たるユダを差措いて、特に頼みとせるベトロとヨハネに今度の事を命じなかつたのも、やはり其爲でした。家の主人

は豫てよりイエズス様のお弟子で、其の親しい友であつたものらしい。二人はエルザレムへ行きました。果してイエズス様の仰有つた通りでしたから、早速、食事の準備に取懸りました。

【過越祭の概略】、過越祭は、ニサン月(今の三月)の十四日の夕方に始まつて、二十一日の夕方に終るのでした。十二歳以上の男子と云ふ男子は、巳を得ざる事故の無い限り、皆エルザレムに參詣して、そのお祭に參與らねばならぬ。で一ヶ月前から、道路や、橋梁の修繕をなし、墓は白く塗つて目立ち易くなし、祝日前の二安息日には、各會堂に於て、このお祭の儀式、殊に過越の羔を食する時の儀式を、詳しく説明して聽かするのでありました。

いよゝ祭日も間近になると、夥しい參拜團が、長い行列を組み、京詣の詩篇(第百二十篇から第百三十篇まで)を歌ひながら、静々とエルザレムに乘込みます。其數、無慮三百萬に近く、エルザレムの人々は皆門戸を開放して、懇に之を宿泊さして呉れる。宿泊料としては、たゞ羔の皮と、過越祭の食事に用ゐた器具とを貰ひ受けるに過ぎません。エルザレムに宿所を見付からぬ參拜者は、市外に天幕を張つて、雨露を凌ぎます。ガリレアの人々は、好んで橄欖山に群集つたもので、ベツファゲ、ベタニアは勿論、より遠方まで宿を取る者が少くは無

い。そして過越の食事をしたり、お祭に參與つたりするには、其都度エルザレムへ出掛けるの
 でした。吾主の凱旋的入京にお伴をして、盛にホザンナを歌つたのは、主として是等のガリレ
 ア人だつたのであります。

過越祭と云ふは、天主様の大きな奇蹟によつて、エジプト人の奴隷を脱れ得た御恵を記念する
 が爲に行つたものである。七日間は、絶対に酔の入つたパンを食することが出来ない。で十三日
 の夕方（ユデア人に云はせると、もう十四日だ）、六時から七時までの中に、戸主たる者は、家
 の内を隈なく調べ、酔の入つたパンが少しも残つて居ないことを確かめねばならぬ。十四日の午
 後になると、生れて八ヶ月乃至一年になる羔か、小山羊かを携へて三組に分れ、一組づつ、神殿
 は司祭の庭に集る。司祭が合圖の喇叭を三たび吹き鳴すと、各自に其羔や、小山羊を屠り、司
 祭は各人の間を廻つて、其血を金の器に受け、之を祭壇の下に灌ぐ。祭壇の下は下水道になつ
 て、セドロン谷へ流れる様になつて居たのです。夫が終ると、各々羔なり、小山羊なりを
 携へて、ユデア人の庭は四周の建物の方へ退き、其壁に取附けてある鉤に吊り下げて、皮を剥ぐ
 司祭は廻つて来て、その脂肪を受取り、之を祭壇に焼いて、天主様に獻げる。煙は濛々と立昇

る、空は爲に眞黒うなると云ふ位、夫から各自宿へ歸つて、肉を其まゝ丸焼きにする。少しで
 も骨を折つてはならぬので、通常、柘榴の枝を二本切取り、之を縦横に當がひ、十字架なりに
 括りつけて焼くのでした。別に苦い野菜、種々の果實を搗き混ぜて作つた、カロセトと稱する
 濃厚いソース、葡萄酒に水を混ぜて、宴會中、少くも四度廻して飲む爲の大きなコップ等を、
 用意して置かねばなりません。

最初、天主様からの御定めによると、過越の食事をするには、帯をきちんと締め、靴を穿き
 杖を携へ、旅立の身仕度をし、急いで食べねばならぬのでした。然し後では段々其習慣が廢れ
 て来た。其んな風に食事をするのは、奴隷の身分たるを語るのだ。自由民たるものは、休息、
 安泰、自由を表すが爲に、横に臥て食べねばならぬと云ふことになり、イエズス様時代には、
 案の上に横はり、左腕を座蒲團に持たせ、右手を以て食事をしたものであります。

イエズス様が最終晩餐を行ひなされたのは、木曜日、即ち御死去の前晩であつたことは明白
 である。さて其日はニサン月の十四日たつたでせうか。聖ヨハネの福音書によつて見ると、
 ユデアの教師等は、金曜日の朝、イエズス様を引立て、ピラトの官廳へ行つた。然し異教徒

たるピラトの官廳へ入つては、其身が汚れる、過越の犠牲を食することが出来なくなる、と云ふもので、官廳には入らなかつた、とある。然すれば此日がニサン月の十四日であつたと思はねばならぬ。其上、十五日は一切の勞働を禁じてあつたのだから、幾らユデア人でも、其日に裁判をしたり、死刑を執行したりする筈がない。シレネのシモンが田舎から出て來るとか、御死骸を包む爲に、布や、香料を買入れるとかすることも、同じく出来ない筈である。して見ると、イエズス様は何うしても十三日の夕方に最終晚餐を行ひなされた。隨つて正式の過越祭ではなく、過越の羔は用意されなかつた。たゞ杯を祝して、四度之を各人に廻し、苦い草をソースに浸して食べ、酔なしパンを劈くだけに止められた。夫から影に形を、象に實物を代へ、己を眞の過越の羔として、先づ使徒等に與へ、次に之を十字架の上に獻げて、人類の罪を贖ひなされたのだ、と謂はなければなりません。尤もマテオやマルコは、酔なしパンの第一の日、晚餐を行ひなされた様に書いて居るので、確な所は斷言されません（聖職者の友）。猶アジベル師の考證によると、吾主は紀元二十九年に御死去なされたとせねばならぬ。此年はアダル月（二月）とニサン月（三月）との間に、ウエーアダル月と云ふ閏月があつた。そしてニサン月の満月（過越祭はニサン月の満月に行ふ）は十六日に當つて居たのだから、御死去の金曜日（十五日）であつたとか。

(三) 晚 餐 の 間

【晚餐の開始】、木曜日の夕暮、イエズス様は用意の高間へ行つて、使徒等と食卓に就かれた。家はエルザレムの南端、シオン山の頂に在り、大司祭カイファの館から、僅に三十米突ばかりしか隔つて居なかつた。猶其遺跡は嚴存つて居る。固より唯今の家は、十六世紀頃に出來たものであるが、然も故の家の跡に建つて居ることだけは、二世紀以來の口碑によつても確である。土耳其人が之を奪つて、勝手に回教の禮拜堂に引直して居たのですが、千九百十四年の世界戦の結果、漸くフランシスコ會の手に戻つた、と云ふことであります。

さて一同は設けの席に就きました。他に客は無かつたらしい。過越の食事は、順序がチャンと一定して居る。葡萄酒二に水一と云ふ割合に混和せた杯を、食事中四たび廻して飲む。その杯と杯との間に、色々の儀式を挿むことになつて居たのです。先づ祝祭の開始を告げる

のは座長の役目でした。でイエズス様は一同に向つて曰うた。
 私は苦を受ける前に、この過越の食事を諸子と共に致したい、と切に望んで居ました。
 私は諸子に申します。そが神の御國に於て成就するまでは、もう今から私は之を食するこ
 ころがありません。

次に第一の杯を取り、之を祝します。その祝福の辭は斯うでした。

葡萄の實を創造り給ひし我等の神にて在す主は、祝せられさせ給へ。總の民の中より我等を
 選み、其の御誠命を以て我等を聖ならしめ給ひし我等の神、萬物の王にて在す主は祝せられ
 させ給へ。

イエズス様も必ず是等の辭を杯の上に誦へ、一寸之に唇を浸して、一同にお廻しなされた
 に相違ない。

取つて諸子の間に分けなさい。私は諸子に申します。神の國の來るまでは、もう私は葡萄の
 液を飲むことがありません。

とは此時の御言でした。是は第一の杯で未だ聖體では無かつた。『神の國の來るまで云々』は御

死去の遠からざることをお告げ給うた丈に過ぎないのであります。

【使徒等の争】、其時、使徒等の間に争が起りました。多分席順の争であつたらしう思は
 れる。自分等の中に、大なる者と見えるのは誰だらう、等と、今に始まつた事でもないが、場
 所柄をも顧みず、大人氣ない争を遣り出しました。イエズス様は例によつて、直に基督教的
 謙遜の大法則を持出して、彼等の争をお取鎮めになりました。

異邦人の帝王は人を司り、又人の上に權を執る者は、恩人と稱せられる。でも諸子は然うあ
 るべき筈ではない。却つて諸子の中に大なる者は小い者の如くなり、首領たる者は給仕の
 如く成らねばなりません。食卓に就いてる者と、給仕する者とは孰れが大きいんです？
 食卓に就いてる者ぢやないですか。然し私が諸子の間に在るのは、給仕する者の如くですよ。
 諸子は私の患難の中に於て、絶えず私に伴つた者です。だから私の父が私にお備へ下さつた
 如く、私も諸子の爲に國を備へるでありませう。斯くて私の國に於て、諸子を私の食卓に飲
 食させ、又高座に坐して、イスラエルの十二族を審判せしめるでありませうぞ。

【弟子等の足を洗ひ給ふ】、第一回の杯を廻して、直に手を洗ふことになつて居ました。イエ

ズス様はこの儀式を少しく變更して、弟子等の足をお洗ひになりました。既に謙遜の必要を説かれた。自分は給仕の如くなつて居る、とまで仰有つた。今やその仰有つた所を實地に行ひ、彼等の足を洗ひ、美しい實地教示をなさつたのであります。この挿話は第四福音書に出て居るのですが、その書出しは極めて莊重に出来て居る。イエズス様の無限の尊さ、その使徒等に表し給へる愛を遺憾なく物語つて居ります。

過越祭の前日、イエズス様は御自分の時、即ち此世から御父の許へ移るべき時が来たのを御存知になり、豫てより世に在る己が弟子等を愛し給ふのでしたが、終極まで之をお愛しになりました。

時に晩餐が既に始つて、悪魔はシモンの子、イスカリオテのユダの心に、イエズス様を付す企をさして居る。斯る惡むべき忘恩の沙汰を見ながらも、猶イエズス様はその聖心の愛情に高鳴りするのを禁め得なさらぬのであります。

イエズス様は御父から一切を己が手に賜はつたこと、自分は天主様から出て天主様に到るべきことを御存知あそばして、晩餐から起上り、上衣を脱ぎ棄て、布片を取つて腰に帯びさせ

なさいました。臙で水を銅盤に盛り、弟子等の足を洗ひ、その帯びさせ給ふ布片で以て、之をお拭ひになります。

斯くてシモン・ペトロの所へ御出になつた。忽ちペトロと先生との間に美しい押問答が始つた。ペトロの生々たる信仰、その美しい謙遜、その熱烈な魂の姿が、まぎくと浮出て居る。

『主よ、私の足をお洗ひになりますか。』

主『私の爲す所は、其方も今は知りますまい。後で分る様になりませう。』

實際、直ぐ後で其理由を御説明になる御考でした。然しペトロは餘りに勿體ないと思ひ、なかなか承知しません。

『何時になつても、私の足をお洗ひ下さつてはなりません。』

主『私が、若し其方を洗はないならば、其方は私と一致する所がありますまいよ。』

先生に離れる、斯んなにお愛し申して居る先生に離れる、何んな事があつても、夫だけは承知されない。ペトロも終に我を折つた。然し熱血性の彼は、極端から極端へ行きました。

『主よ、私の足ばかりでなく、何うぞ、手も頭もお洗ひ下さいませ。』

主「もう身を洗つた人は、全身が潔くなつて居る。足の外に洗ふことは要りません。」
 エデア地方は暖國なので、屢浴をする習慣があつた。殊に履物はスリツバですから、少し歩いてても直に足が汚れる。勿論、使徒等は既に浴して居ましたでせう。然し此處まで歩いて來る中には、可なり埃が附いたに相違ない。間もなく聖體を拜領せねばならぬ身だ。

それには極めて心を潔くせねばならぬ。少の汚點でもあるべき筈では無い。其邊の理由を論して置くが爲に、イエズス様は態々彼等の足をお洗ひになつたのでした。夫から御言を續けて

諸子は潔い。然し皆ではないよ、

と仰せられた。大罪の汚は無い。小な罪を潔めれば夫で足りる。然し「皆ではない」。裏切り者が一人、中に混つて居る。自分を敵の手に付さうと考へて居る。其心は恐しい罪に眞黒げとなつて居るのだ。自分は明に知つて居るよとお告になつたのである。優しい先生が、自分の罪を明に見て居らつしやる。夫となく御忠告して下さる。夫ばかりか、唯今も足下に身を屈めて、親しく自分の汚れた足をお洗ひ下さつた。夫を見、夫を思つたエデアの胸には、如何なる感情が湧起つたでせうか。然しもう彼の心は全く悪に頑ばつて居る。何んなに優しい親切でも、痛い忠告

でも、早や耳には入りません。

【足を洗ひ終つて】、弟子等の足を洗ひ終つて、イエズス様は上衣を取り、再び故の席は就き、さて彼等に仰せられます。

私が諸子に爲した事の何たるかを知つて居ますか。諸子は私を呼んで、先生だの、主だの、と曰つて居る。その曰ふ所は固より善い。實際、私は夫ですから。然るに先生たり、主たる者が、諸子の足を洗つたのだから、諸子も亦お互に足を洗ひ合はねばならぬ。私が諸子に例を示したのは、私の諸子に爲した如く、亦諸子にも爲さしめんが爲です。私は誠に誠に諸子に申します。僕は其主よりも偉くない。使徒は之を遣した者よりも大くはない。諸子が若し是等の事を分つて、之を行ひましたら、福でありますぞ。』

使徒等を始め、一般信者に、博愛、謙遜の美しい模範を示すが爲に、イエズス様は彼等の足をお洗ひになつた。然し使徒等が、十分その意義を悟り得ない様でしたから、今簡單に、之が説明を爲さつたのであります。

第一の杯を廻し、手を清め終ると、今度は苦い野菜、酵なしパン、カロセト、過越の羊等が出

て來ます。苦い野菜と云ふのは、高柱とか、田芥子とか、すべて苦味を持つた野菜で、ユデア人がエジプトに於て嘗めさせられた辛苦を偲ばせるのでした。カロセトは林檎、葡萄、無花果、レモン等を突砕いて、酢と鹽水とに煮詰め、更に肉桂等を入れて、赤色をつけ、エジプトで焼かせられた煉瓦の象徴としたものであります。

さて用意の品が備はると、座長は先づ苦い野菜を取つて、之をカロセトに浸し、地の殻菜をお創造り下さつたに付けて、天主様に感謝し、一同に之を食べさせる。すると列席の年少者が二人立つて、今夜の儀式の理由を尋ねる。二回ほど繰返して尋ねる。其間に座長は、第二の杯に葡萄酒を注ぎ、之に水を混ぜる。夫から過越祭の理由、苦い野菜の意味を説明する。次に酔なしパンを両手に捧げて、エジプトを出づる時に、酔を入れて脹らす暇のなかつた所から、其記念として、このパンを食するのだと教へ、一同感謝の爲に、詩篇、第百十三と第百十四を誦へる。夫が終ると、第二の杯を廻して飲み、手を潔めます。そして座長は酔なしパンを取つて之を劈き、其の劈いたパンの片の間に、苦い野菜を挟み、カロセトに浸して、之を一同に與へる。ヨハネ福音書第十三章二十六節に、この習慣に當るらう思はれる個所が出て居ます。

【裏切り者の公表】、イエズス様の御氣色を損じ、御心を苦めるのは、ユダの裏切でした。イエズス様は幾度も繰返して、彼の罪をお告げになつた。使徒等の足をお洗ひになる時も、謎の様な言を申された。再び席にお就きになるや、復た話を彼の上に持つて行かれた。

私は諸子皆を指して言ふのではありません。私は自分の選んだ者を知つて居ます。然しながら『私と共にパンを食する人(親しい友)が私に向つて踵を擧げた』(詩篇一一〇)と聖書にある事の成就せんが爲に、斯うなるのです。今事の成るに先ちて、私は諸子に告げて置きます。其の成りました時に、私(キリスト)だと云ふことを諸子に信せしめんが爲です。私は誠に諸子に申します。私の遣す者を承ける人は、私を承けるのです。私を承ける人は、私の遣し給うた御者を承けるのです。イエズス様は斯く言ひ終つて、俄に御心の騒ぎを覺えられた。

私は誠に諸子に申します。諸子の中の一人、私と共に食して居る者が、私を付すでありませう、

と明白に曰うた。何うにかしてユダに迷の夢を醒させ、心を改めさせたいと思召されたので

ある。使徒等は身に何の覺もないのだけれども、斯う明に言ひ渡されては、狼狽へすには居られない。誰を指して仰しやるんでせうかと訝つて、互に顔を見合せ、大層悲しんで、一人づつ主よ、夫は私で御座いますか、

と言ひ出した。イエズス様は、その哀しい預言を一層明にして、

十二人の一人で、私と共に、手に鉢を付けて居る者が私を付すのです、

と仰有つた。ユデア邊では、食物は大な鉢に盛つて出します。客は各々その鉢に手を入れ、パンの片を添へて、肉や、野菜や、ソースやを自分の皿に取出し、之を食するのです。イエズス様の御言は、その習慣に當てたもので、明にユダを指して仰有つた譯ではない。同じ鉢に手を付けて、食する程の親友を賣るので、その裏切の罪の如何にも憎むべきものだ、と云ふことを指摘されたまでに過ぎない。イエズス様は續いて、彼の罪の恐るべき所以をお説明になります。

抑も人の子は、己に就て録されてある通りに逝きます。然し禍なのは人の子を付す彼です。

彼人は生れなかつたらば、寧ろ其身の爲に善かつたでせうに！

流石のユダも冷りとせすに居られなかつた。殊に自分ばかり黙つて居ては、皆に夫と感付かれる恐がある。

ラビ、夫は私で御座いますか、

と問ひました。イエズス様は答へて、

其方の言つた通りです、

と曰うた。然し小聲で仰有つたものと見え、誰も覺る者は無かつた。一つの宴席には三人づつ就かれる。でイエズス様の席には、ヨハネが前に、ペトロが後に就いて居たものらしい。随つてイエズス様の愛し給へるヨハネは、御胸の邊により懸つて居た譯になる。熱血性で、氣の張つたペトロは、裏切者の誰なるかを早く知りたくてならぬ。ヨハネに顎で合圖をして、「イエズス様の仰有るのは誰の事だよ」と問ひました。ヨハネは御胸により懸つて居たものだから、

主よ、夫は誰でいますか、

と私に御尋ねしました。

私がパンを浸して與へる者が夫です、

どイエズス様はお答へになつて、パンの小片を取り、之をカロセトに浸して、シモンの子、イエスカリオテのユダにお與へになつた。この一片を受取るや、サタンが彼に入り、彼を全く占領して了つたのです。イエズス様は彼に向ひ、

爲る事は早く爲なさい、

と仰つた。お前の腹黒い企圖は皆知つて居る。決行する勇氣があるならば、速に決行せよと言つて、彼に暇をお出しになつたのである。然し御言の眞意を悟り得た者は誰も無かつた。ユダは預て財布を持つて居たから、「祭日の爲に、私等の要する物を求めよ」とか、或は「貧者に何かを施せ」とか、仰つたものと思つた者すらありました。ユダは彼の一片を受けるや直に出て行つた。時は既に夜でした。夜は悪事を決行ふのに都合が好い。然しユダ其者の心が先づ眞暗夜になつて居たのであります。

ユダが出て行つたのは、聖體御制定の前である。マテオとマルコの記事を見ても察せられる。成るほどルカ福音書に由ると、イエズス様が聖體御制定の後、ユダの罪を公にされたかの如く見えぬではない。然しルカは時の先後よりも、寧ろ話の順序を重んじて、先づ聖體の御制定

を記し、次にユダの裏切に及び、然る後、弟子等の事を記したものの、様に思はれる。イエズス様の方でも、其の至聖聖體をば、最初から大罪人に瀆させなさらうとは、些と受取り難い話ではありませんか。尤も、聖ヨハネ金口、聖アウグスチヌス、聖トマ、コルネリウスア・ラビデ、ボスエ、アジベル、フウワル等は、ユダの聖體拜領を肯定して居る。然し近代の註釋家は大低、之を否認します。フィリオン然り、ウイグルスの聖書大辭典然り、聖職衆の友亦然り（一九一二年度）。古代にあつても、タチアヌス、聖エフレム、聖ヒラリウス、アレクサンドリアの聖シリルス、教皇インノセント三世、マルドナツス等は、やはり後の説を採つて居ます。

(四) 聖體の御制定

【聖體の御制定】、ユダが出て行つたので、イエズス様も幾らか胸が平穩に、氣も清々しくなられた。其所で、新約の過越祭、聖體の晩餐式に御移りになります。即ち食卓の上にあつた酵なしパンを取り、祝して之を劈き、弟子等に與へて曰うた。

取つて食しなさい。是諸子の爲に付さるゝ私の體です。諸子は私の記念として之を行ひなさい。

醉なしパンの次は、過越の羔で、之を食すれば、過越の食事は慶たく終を告げる。然る後、第三の杯を廻すのであります。聖ルカや、聖パウロが、パンの聖別を晚餐の中の出来事とし、却つて葡萄酒の聖別をば、晚餐の終つた上での事にして居るのは、之が爲である。其夜、過越の羔を備へてあつたとしても、無かつたとしても、兎に角、イエズス様は第三の杯を取り、前の様に之を祝し、感謝して彼等に與へ、

諸子は皆是から飲みなさい。是は罪を赦されんとて、衆人の爲に流さるべき新約の我血です

よ、
と曰うた。第三の杯は特に「祝聖の杯」と稱するのでした。聖パウロがコリントの信者に書簡を送つて、「我等が祝する祝聖の杯は、キリストの御血を相共に授かる義に非ずや」(コリント前)と申したのは、正しく夫であります。

【司祭職の制定】、イエズス様は聖體を制定めると共に、その聖體を作るべき司祭職をも立て、

「諸子は私の記念として之を行ひなさい」と曰うた。記念すべきは、たゞ使徒等ばかりに止まらぬ。亦萬國、萬代の信者も、絶えず之が記念を繰返さねばならぬ。随つて司祭職も亦世の終まで存續してあるべき筈であります。

祭祀なくして宗教なし。司祭なくしては、其の所謂、祭祀と云ふものも有られはせぬ。イエズス様も、明日はいよいよ身を以て、私等の爲に犠牲となつて下さる。自ら新約の大司祭として、其身を犠牲として、御父の尊前にお獻げ下さるのである。然したゞ夫だけでは、その私等に對し給へる燃狂ふ愛を満足させるに足りない。御受難、御復活、御昇天後にも、猶私等の中に滞留り、絶えず祭壇の上に、無血の犠牲となつて、御父に獻げられたいと思召しなされた。其爲に司祭をお立てになつた。パンと葡萄酒の形色の下に、始終カルワリオの祭を繰返すべき聖職をば、之にお授けになつた。イスラエル人の過越祭は、エジプトの奴隷より救出された記念として、設けられたものである。聖體も新約の過越祭だ。救出を記念する人類が悪魔の奴隷を遁して戴いた、より嬉しい、より一般的の救出を記念するのであります。杯を廻す間に、イエズス様は續いて曰うた。

私は諸子に申します。我父の御國に於て、諸子と共に新しいのを飲む日までは、今からこの葡萄酒の液を飲むことがありますまい。

死の眼前に迫つて居ること、使徒等が皆共に天國に集つて、その盡せぬ福樂の酒に酔ふべき時は、猶末遠いことだ、と云ふことを、爪に匂はせなさつたのぢや無いのでせうか。

最後に第四の杯を廻し、夫から感謝の爲の詩篇を誦へて、席を立つのでした。「讚美歌を誦へ畢つて、皆橄欖山へ出行いた」(二六ノ三〇)とあるのは、恰當夫に當ります。

聖體は、イエズス様が私等に御遺しになつた愛の記念です。イエズス様は私等をお愛し下さいました。極までお愛し下さいました。いよく私等に最後の訣別を告げねばならぬと云ふ段になると、何うしても其儘では訣れたくない。訣れても、猶永く一緒に留りたい、何時迄も一緒に留つて、私等を慰めたい、強めたい、愛したい、恵みしたいもの、と思召し遊ばして、この聖體を御制定になつたのであります。私等もこの御恵ばかりは、何時までも忘れないで、屢々聖體を思ひ、聖體を訪問ひ、聖體を拜領して、聊かなりとも、主の愛に酬い奉る所があらねばなりません。

(五) 聖體御制定の後

【弟子等の躑】、イエズス様は既に聖體の秘蹟を定め、弟子等にその言ひ知れぬ愛の記念をお遺しになり給ふた。第四の杯を廻し、感謝の詩篇を誦へ畢られた。既ユダは出て行つて居る。今は何一つ心を曇らせるものが無い。御胸を開いて、親密な、打解け話をなさいませう。先づ弟子等に三の事を預言して置かれた。第一の預言は、彼等が自分を見棄て、逃亡すべきことでした。今夜、諸子は皆私に就て躑く様になる。「我、牧者を撃つであらう。斯くて羊の群は散亡せよう」(ザカリヤ)と録してある。然し私は復活した後、諸子に先つて、ガリレアへ行くであります。

ユダの如く裏切りこそしないが、卑怯にも自分を見棄てて逃亡せるのだ。然し自分は彼等の罪を快く赦して遣る。善き牧者と小な群とが、共に親しい、楽しい月日を送つたガリレアへ行き彼處に於て其の散亡させた群羊を集め、自分の勝利を喜ばせる、と御約束なされたのであります。【ペトロの信仰の絶えざる事】、第二の預言は、ペトロに當るのでした。イエズス様はペトロを

顧みて、

シモン、シモン、看なさい、麥の如く篩つてやらんものと、サタンが諸子を求めました。然し私は其方の爲に、其方の信仰が絶えない様に祈りました。其方は何時か立歸つて、其方の兄弟を堅めなさい。

セザレア市の門前に於て、ペトロがその信仰を宣言した時、御約束なさつたのと、殆ど同じ様な約束を繰返しなさいました。サタンは首尾能くユダを亡し終つた。他の使徒等をも残らず背かせようと謀つて居る。其爲に有らん限りの力を絞るのだ。「篩」の形容語を見ても、其邊の意味合は明白である。然しイエズス様は、彼が死物狂の運動に對するに、その全能力を有せる祈禱を以てせられた。ペトロの信仰が絶えない様に祈つて置かれた。御祈禱は必ず聽かれる。疑を容るべき餘地は無い。ペトロは他の兄弟を強める大任を托された。彼が使徒團の首領たることは、いよく以て明白になつた。首領であるだけ、他の使徒等よりも一層恐しい惡魔の突撃を蒙らねばならぬ。然し一時は負けて倒れても、直に起上る。起上つて他の使徒等を強め、その沈みかけた心を引起し、其の消え入つた信仰を燃やし立てるのである。所がペトロ

です。自分の忠誠を疑はれたな、と思ひ、何うしても其まゝ黙つて居られませぬ。

主よ、私は主と共に、監獄にも、死にも行く覺悟です。たとへ人は皆主に就て躓くとも、

私は一度でも躓きはしません、

と斷然言ひ放つた。勿論、其時の彼は其んな決心であつた。何んなことがあつても主を振棄てる氣は無かつたのでした。然し彼は餘り自分の力を恃み過ぎ、爲に悲惨な敗北を見るに至つた。イエズス様は彼に答へて、

ペトロ、私は其方に申します。今夜、鶏が二度鳴く前に、其方は必ず三度、私を知らぬ、と

否むでありませう、

と仰有つた。是が第三の預言でした。ペトロは猶言張つて、

たとへ主と共に死んでも、私は決して主を否みません、と申しました。他の弟子等も同じ様に言ひ張りました。

【今の時】、夫からイエズス様は話を他に移された。初めて弟子等を宣教にお遣しになつた當時の事を語り出された。

私が、財布なく、囊なく、履物もなしに諸子を遣した時、何か諸子に不足した物がありましたか？

とお尋ねになつた。彼等は異口同音に『否、何にも』と答へました。實に其頃、イエズス様の人氣と云つたら、夫はく素晴らしいものでした。イエズス様の御弟子だ、と云ふばかりで、使徒等までが餘程手厚く待遇されたものでした。然し今は其時ではない。形勢は全く一變した。イエズス様は其事をお告げになります。

でも唯今は、財布があらば之を携へなさい。囊も然うしなさい。無い者は自分の上衣を賣つても、劍を買ひなさい。蓋し私は諸子に申します。『彼は罪人の中に加へられた』(五三ノ一二)と録してある事が、猶私の身に成就せねばなりません。そは總て私に關する所は、將に終らんとするのです。

福音の宣傳に従事する者は、何處へ行つても、喜んで宿を貸して貰へる、と思つては大間違ひで、寧ろ敵地に乘込む覺悟であらねばならぬ。金錢、其他の日用品も携へ歩かねばならぬ。時によつては、護身用の劍までも備へねばならぬことがある。師たる自分は、既に法律の保護の外に

置かれて居る。況して弟子たる者は、同一の運命に打突かるものと覺悟するが當然だ、とお諭しになつたのである。無論「劍を買へ」と仰有つたのは、危険の甚しいのを形容されたのみである。弟子等は夫を文字通りに解釋して、

主よ、茲に二口の劍があります、

と曰ひました。ユデアでは、護身用として、劍を携へる習慣があつた。エルザレムに於て危険に遭遇すべきことを、イエズス様が幾度となくお告げになつたので、弟子等も、萬一の用意に劍を携へて居たものと見える。

夫で足りる、

と、イエズス様は、輕くお答へになつた。二口の劍があれば、敵を防ぐに十分だ、と云ふ意味ではない。『よし〜。もう澤山』と云つて、其話を打切りなかつた迄に過ぎません。

聖會の船は、絶えず嵐に打突かり、種々の大浪、小浪に揉まれる筈だ。然しペトロが其船の舵を握つて居る。其信仰の絶えない様、祈つて戴いたペトロが、其舵を操縦つて居る。何んなことがあつても狼狽へる譯はない。何時迄も彼の腕を信じ、其の導くが儘に、安心して

行けば可いのであります。

(六) 高間に於ける御物語

【御物語の次第】、以上三の預言は、マテオ、マルコ、ルカの傳へた所である。後でヨハネは、食後、イエズス様の御話になり給うた、長い、親しい御物語を書き足して呉れた。若しその御物語の間に於けるイエズス様の御舉止、御語の調子、御目付等をも詳しく書き遺して呉れたら、二千年後の私等にでも、イエズス様の眞面目があり／＼と眼前に浮み出て、身親しく其場に在つて、之を承るかの如き感を覺えたちやありませんまいか。然し夫ばかりは、望むべくして得べからざる所である上に、ヨハネには一定の目的がありました。彼はキリスト様の天啓性を明にするが爲に、其の福音書を綴つたのですから、其目的に嵌りさうな御話だけを抜き書きして、其他は多く省略して居る。猶ヨハネが筆を執つたのは、第一世紀の終頃、即ち七八十年も後の事ですから、記憶に残つて居たのは、たゞ大體の筋だけで、細かな、左して重大でもない様な點は、多く忘れて居たものと思はねばならぬ。御話に整然とした聯絡がなく、

同じ様な語を幾度も繰返したり、一の御話から急に他の御話へ轉つたり、した様な個所が往々見受けられるのは、その爲であります。

然し聯絡が無いとは云つても、大きな筋だけは、容易に認められる。先生の死後、自分が始終黙想しては感奮し、感奮しては黙想して居たのを書き遺したので、其の大筋だけでも、夫は／＼涙み干し難い深みがある上に、亦現世のものとも思はれぬ程の高い、清らかな匂を持つて居る。此場合に於けるイエズス様の床しい御心持をば極めて鮮に描き出して見せてある。勿論、御話の主旨は、眼前に迫れるお訣別で、其他の思想は、皆之に附随したものである。時弟子等が先生のお話を遮つて、質問をすることもある。双方とも、その昂れる感情を程よく差控へてる氣味が偲ばれる。別けてもイエズス様の御胸に波立てる美しい感情は、一句一句の間にも、美妙な響を立て、居る。前半は高間に於て、後半はゲッセマニへの途すがら御話になつたものである。先づ簡単な冒頭が置いてある。離別の近きにあることを打開け、その喜しい結果をも併せて告げられます。

【冒頭】、ユダが出て行つた後、イエズス様は弟子等に曰うた。

今や人の子は光榮を得、天主様も彼に於て光榮を得給うた。若し天主様が彼に於て光榮を得給うたとすれば、天主様も亦御自分に於て彼に光榮を得させ、亦直に得させ給ふであります。小子等よ、私は猶暫く諸子と共に居ります。諸子は將に私を尋ねようと思はれます。曾つてユデア人に向ひ「私の往く所へ、諸君は來能はぬのだ」と言つた如く、今は諸子にも亦然う申します。私は新しい掟を諸子に與へます。諸子は相愛しなさい。私が諸子を愛しました如く、諸子も相愛しなさい。諸子が相愛しましたら、夫によつて人は皆、諸子が私の弟子たることを知るであります。

先生は天國に於て限りなき光榮を受け給ふのだ、と思ふと、幾分離別の悲みを和げ得る譯である。殊に愛の掟を守り、互に愛し恤んで行くなれば、悲しい中にも大なる慰安が得られる。又然うしてこそ、實際にイエズス様の御弟子だ、と人々にも言はれ得る譯であります。

使徒等は、イエズス様が御死に遊ばすと云ふことは、何うしても信じ切らぬ。幾度聞いても、夫が事實になつて現はれようとは思ひ得ない。随つて「私の往く所へ諸子は來能はぬのだ」とは、何の意味だか判然しません。例によつてシモン・ペトロは、

主よ、何處へ御出になりますか？

と、問ひました。

私の往く所へは、唯今、其方は従ひ得ません。後では従ひますでせう、と、イエズス様は御答へになりました。

何故、唯今、先生に従ひ得ないのですか。先生の爲には生命でも棄てます、

と、熱血性のペトロ、思切つた事を申しました。此時イエズス様が彼の憶病を告げ、自分を三度まで否むべきことを預言なさいました事は、前に記した通りです。

【父とキリストは一つ】、弟子等の擾れた胸に、深い／＼信頼の念を起させようと思はれたイエズス様は、他日天國に於ての再會をお約束になります。自分は天に昇つて、彼等の爲に座を備へる、否自分は天に登る爲の道だ、と斷言なさいます。思想も調子も、歩一歩高まつて行くよ、と思はれませんか。

諸子の心は騒いでは可けません。諸子は天主様を信じて居る。私をも信じなさい。私の父の家には住所が多い。然も無くば、私は諸子に告げましたでせう。諸子の爲に處を備へに往く

のですから、私は往つて、諸子の爲に處を備へた上で、再び來つて諸子を携へ、私の居る處に諸子をも居らせるであります。諸子は私の往く所を知り、又その道をも知つて居ます。使徒等は、相變らず其の誤れるメツシア觀に囚れて居る。基督様が御死に遊ばすとは夢にも思ひ得ません。トマは皆に代つて申しました。

主よ、私等は主の往き給ふ所を存知しません。何うして其道を知ることが出来ますか。イエズス様はお答へになります。

私は道です。眞理です。生命です。私に由らないで父に到る者と云ふはありません。諸子が若し私を知りましたら、必ず私の父をも知りましてせう。今から諸子は之を知る様になりませう。而も既に之を見たのですよ。

父と子は一つだ、子を見るものは亦父をも見る譯だ。其時フィリップが口を入れました。主よ、私等に父を御見せ下さい。然すれば私等には澤山です。

「諸子はもう父を見たのですよ」と仰有つたイエズス様の御言を、彼は肉眼で見るとの意味に解りました。然し自分は未だ其父を見た覺が無い。舊約時代の人々が、天主を見奉つた幸福を自

分等にも與へられたら、と思つたから、彼んな事を申したのであります。イエズス様は仰せられます。

私は斯んなに長く諸子と共に居る。夫に諸子は未だ私を知らないのですか。フィリップよ、私を見る人は父をも見るのです。何で『私等に父をお見せ下さい』ツて言ふのです？私

が父に在り、父も亦私に在すことを諸子は信じないんですか。私が諸子に語る言は、私から語るのではありません。父が私の内に在して、自ら業を爲し給ふのです。諸子は私が父に

居り、父も私に在すと信じないのですか。然らば業その物の爲に信じなさい。イエズス様の内に父が見られる。父とイエズス様は同一性、同一體の天主様、イエズス様の御

言は父の御言、イエズス様の御業は父の御業なんです。

【キリストは何時迄も使徒等を離れ給はぬ】、右は使徒等に取つて、大なる慰安であらねばならぬ。然しイエズス様は、他の慰安をお加へになりました。たとへ彼等と離れても、お互ひに一致の綱が切れるのではない。自分の行つた驚くべき奇蹟を行ふ力をも彼等に與へる。彼等の祈禱を聽容れてやる。聖靈を彼等の上に遣す。神秘的ではあるが、彼等と何時までも留るべ

きことを御約束になります。

私は誠に實に諸子に申します。私を信する人は私の爲す業をば自分も爲し、否、より大なる業を爲すでありませう。私は父の許に行くのですから。諸子が私の名に由つて父に求める所は、何事も私は之を致すでありませう。是父が子に於て光榮を得させ給はんが爲です。諸子が私の名によつて、何かを私に求めますならば、私は之を爲て上げませう。諸子が若し私を愛しますならば、私の命を守りなさい。そして私が父にお願いしましたら父は他の辨護者（聖靈）を諸子に賜ひ、永遠に諸子と共に止らして下さいますでせう。是こそ眞理の靈である。世は之を見ず、又知らないで、之を承けることが出来ません。然し彼は諸子と共に止りて、諸子の中に在し給ふのですから、諸子は之を知るでありませう。私は諸子を孤兒として遺すのではありません。將に諸子の許へ参りますでせう。今暫くする、世は最早、私を見ますまい。でも諸子は私を見て居る。そは私は生きて居り、諸子も亦活きるでありませうからです。

實際、使徒等はやがて聖靈を賜はり、神秘的生命に活き、イエズス様を見るのであります。

諸子は彼日（聖靈を賜はる日）に、私が我父に居り、諸子は私に居り、私も諸子に居る、と云ふことを曉るでありませう。私の命令を有して、之を守る人は、是私を愛する人です。私を愛する人は、私の父に愛せらるべく、私も亦之を愛し、之に私を顯すでありませう。今度はユダが質問をしました。イスカリオテのユダではない。レベども、タデオとも言ふ彼のユダです。イエズス様が、御身を世に顯さぬ、と仰しやつたのが、何うも呑み込めない。メツシアとして全世界に御身を顯し、赫々たる光榮を輝し給はねばならぬ筈ではないか、と思つた彼は、

主よ、何で御身を私等に顯して、世にはお顯しにならないのですか？

と、問ひました。イエズス様は彼の間に對して、直接の答はお興へになりません。たゞ御身を顯すが爲に要する條件として、愛と従順とを説き、世が斯る御恵を辱うし得ない理由を明にされます。

人が若し私を愛するならば、私の言を守るでありませう。斯くて私の父は彼を愛し給ひ私等は彼に到りて、其内に住むでありませう。私を愛しない人は、私の言を守りません。

さて諸子の聞いた言は、私ではなく、私をお遣しになつた父の御言であります。
 何と云ふ高遠な御教でせう。如何に懐しい優味が、御語の間々に流れて居るのでせう。イエズ
 ス様の有難い御約束を辱うし得るには、熱い、偽りなき愛が必要である。忠實に御言を守つ
 て其愛の眞實なる證據を御見せ申さねばならぬのであります。

【聖靈の御働き】、イエズス様は猶一步進まれます。是等の長いく御話の要點を摘み、聖靈に
 よつて與へられる平和、弟子等と離別れる利益を説き、併せて、自分が御父の思召に全く一身
 を投げかけて居る次第を繰返しなさいませう。

私は猶諸子と共に居つて、是等の事を諸子に語りました。父が私の名によつて、お遣しに
 なる筈の辨護者たる聖靈は、私が諸子に申しました總の事を教へ、且つ思出さして下さいませ
 せう。私は平安を諸子に遣し、私の平安を諸子に與へます。私の之を與へますのは、世の與
 へるが如くではありません。

諸子の心は騒いでは可けません。又怖れてもなりません。「私は往つて、又諸子に参ります」
 と、曾つて申したのを諸子は聞きました。諸子が若し私を愛しますならば、私が父の許へ歸

るのを、屹度喜びますでせう。父は私よりも更に大なる御者に在すからです。唯今事の成
 る前に、私は諸子に申しました。其が成りました後、諸子に信せしめんが爲です。もう私
 は多く諸子に語りますまい。此世の長(悪魔)が遣つて來ます。彼は私に對して何等の權力を
 も有ちません。然し私は父を愛して居る。父の私に命じ給ふが如く行ふのだ、と云ふことを
 世の知らんが爲に、立ちなさい。いざ此處から行きませう。

感謝の詩を誦へ、席を立つて、高間を出られます。いよく屈辱、痛苦、殘酷な死に向つて突
 進されます。是から後は、シオンの丘の東側に浴ひ、セドロンの谷に下り、ゲツセマニの園へ
 進み行く途中、御話しになつたのであります。

愛の御教訓、美しい愛の御遺言、相愛し、相恤み、共に闘ひ、共に勝ち、共に天國に樂むに
 至る。その言ひ知れぬ優しい、美しい愛の御説教を謹んでお聴きなさい。

(七) 途中での御話

【葡萄樹と其枝】、イエズス様と使徒等と世間との關係は、一致、共有、分離、この三つに

約る。高間を出られてからは、特にこの三つに就てお話しになりました。先づ葡萄樹から比喻を借りて、御自分と一致を保つの必要を力説されます。

私は眞の葡萄樹で、私の父は栽培者（うるもの）です。私に在る枝で、果を結ばないのは父が悉く之を伐去り、果を結ぶのは、尙多く果を結ばしめんが爲に、すべて之を切透し給ふであります。私が諸子に語りました言によつて、諸子は既に潔くなりました。私に止りなさい。私も亦諸子に止るであります。枝は葡萄樹に止らないでは、自ら果を結び能はぬものです。諸子も私に止らないならば、同じく然うであります。私は葡萄樹です。諸子は技です。私に止り、私も亦之に止る人は、是多くの果を結ぶ人です。蓋し私を離れて、諸子は何事をも爲し能はぬのです。人が若し私に止らないならば、枝の如く棄てられて枯れ、人は之を拾つて火に投じ、そして焼けるであります。諸子が若し私に止り、私の言が諸子に止るならば、欲する所を願つて、叶へられませう。諸子が夥しい果を結び、私の弟子となりましたら、夫によつて我父は光榮を得給ふのであります。父の私をお愛し下さる如く、私も亦諸子をお愛しました。諸子は私の愛に止りなさい。私が我父の命を守りて、

其愛に止るが如く、諸子も私の命を守りますらば、又私の愛に止るであります。此等の事を諸子に語るのは、私の喜が諸子の内に在り、そして諸子の喜が全うせられんが爲であります。

主旨は明瞭です。イエズス様は其明瞭な主旨を更に説明して、實行上の應用までも、お加へになつたであります。

【相愛せよ】、次に弟子等お互の關係に説き及ぼしなさい。

私が諸子をお愛しました如く、諸子もお互に愛しなさい。是は私の命令です。誰も其友の爲に生命を棄るより大なる愛を有する者はありません。諸子が若し私の命する所を行ひますならば、私の友であります。私は最早や諸子を僕とは申しますまい。僕は其主人の爲す所を知らないからです。却つて私は諸子を友と呼びました。すべて父から聴きました事は悉く諸子に知らせたからです。諸子が私を選んだのではない。私こそ諸子を選みました。諸子を立てました。諸子が往つて果を結び、其果が長く存せんが爲め、そして私の名を以て父に何事を願ふとも、諸子に之を賜はんが爲です。諸子がお互に相愛する様にど

私は斯く諸子に命ずるのであります。

イエズス様は使徒等を「友」と呼ばれた。何と云ふ優しい御慈愛でせう。して其の御慈愛に就て御自分の盡された所を、お明しになつたのです。實にその御慈愛は、イエズス様の方から自發的に出たものでした。御自ら彼等を友とお選みになつたのでした。夫も彼等の爲、彼等に多くの實を結ばしめん爲でありました。

【分離】、然しこの明るい場面も、忽ち暗淡くなつて來た。使徒等は世と没交渉（むくわんけい）であることが出來ない。世は不信仰である。先生を憎み、之を迫害した上は、亦弟子等をも憎み、之を迫害するのは言ふ迄もない所だ。でも天主様に愛せられ、其の御援助に強められると、世の憎悪なんか恐れるに足りないであります。

世が若し諸子を憎みますならば、諸子よりも先に私を憎んだのだ、と知つて下さい。

諸子が世の人でしたら、世は自分のものとして愛しましたでせう。然し諸子は世のものではない。私が世から選み出したのでした。随つて世は諸子を憎むのです。『僕は其主人より

大ならず」と、私が曾つて諸子に語りましたのを記憶しなさい。人が若し私を迫害したならば、亦諸子をも迫害しませう。私の言を守つたならば、亦諸子の言を守りませう。然し彼等は私の名の爲に、是等すべての事を諸子に致すでありませう。彼等は私をお遣しになつた御者を知らないからです。若し私が來て、彼等に告げませなんだら、彼等も罪が無かつたでせう。然し今は其罪を託ける所がありません。私を憎む人は、私の父をも憎むのです。若し私が彼等の中に在りて、何人も曾て爲さなかつた程の業を行ひませんでしたら、彼等も罪がなかつたでせう。然し今や現に之を眼前に見ました。そして私と私の父とを憎んだのです。然し是は彼等の律法に録して、「謂れなくして私を憎んだ」(詩二四ノ一九)とある言の、成就せんが爲であります。

右は御自分の宣教、奇蹟の徒勞になつた事を、極めて莊重に、極めて力強くお説きになつたのである。彼ほどまで明な證據を眼前に突付けられながら、之を信じない世の罪は、實に重い。然し幾ら世が信じなくとも、眞理は臆て晴天白日に輝くに至るのであります。

私が父の許より遣さんとする辨護者、即ち父より出る眞理の靈がお出になつたら、私に就て

證明を爲し給ふであります。諸子も亦始から私の伴として居るのでありますから、同じく證明を爲すであります。

其の芽出度い結果を見る迄に、使徒等は随分、世の迫害に惱まされねばならぬ。イエズス様は豫め其事をお告げになつた。其んな艱難に打突つた時、力を落さない様に、前以て注意して置かれました。

私が斯く諸子に語りましたのは、諸子の躓かない爲です。人々は諸子を會堂から逐出すでせう。而も諸子を殺す人は、すべて自ら天主様の爲に盡すのだ、と思ふ時が参りませう。彼等が其様な事を諸子に致しますのは、父をも私をも知らないからです。但し私が斯く諸子に語りましたのは、時が参りました時、私が諸子に御話して置いた、と思出させるが爲です。

私は諸子と共に居りましたので、初から之を告げなかつたのであります。

【重ねて聖靈を約束し給ふ】、續いてイエズス様は御胸襟を披歴いて、聖靈に關する御約束を繰返しなさる。先づ聖靈が世の罪を公にし、之を處罰し給ふべきことをお告げになります。

唯今私は、私をお遣しになつた御者の方へ参ります。だが「何處へ御出になるんですか」と問ふ者は、諸子の中に一人もありません。然し斯く申しました爲に、悲哀が諸子の心に満ちました。でも私は實を以て諸子に申します。私が立去るのは諸子の爲に利益です。私が若し立去らないならば、辨護者が諸子に來給ふことはありますまい。却つて立去りましたら、私は之を諸子に遣すであります。彼が御出でになりましたら、世を責めて、罪と、義と、審判とに就て、其過を認めしめ給ふであります。罪に就ては、人々が私を信じなかつたからです。義に就ては、私が父の許へ立去つて、諸子は最早や私を見ないからです。審判に就ては、この世の長（悪魔）は既に審判せられたからであります。

世の罪はその不信にあるので、聖靈は先づ之を責め給ふのである。「義」とはイエズス様の高い、清い徳を指したもので、それだけの徳があればこそ、自分は天國に凱旋し、御父の許へ歸り、弟子等の目に見えなくなるのだ。夫を世は認めずして、却つて大の悪人見た様に之を責殺すのだが、然し聖靈は必ずその無罪、その高い、清い徳の動かすべからざる證據をお見せになるのである。審判とは、聖靈が世の上に下し給ふ處分を言つたものである。世の長たる

サタンは、既に審判せられた。イエズス様の御死去、福音の宣布によつて、サタンの國は確に蹴倒される。況して其の部下たる世が同様の處分を免がれ得よう筈がない。約めて言へば、先づ世に就て、其罪を指摘し、次に靈界の二大首領たるイエズス・キリストとサタンとを取出し、イエズス・キリストと義と、サタンと審判とを掲げてあるのです。右は世に對する聖靈の處分だが、然し使徒等に對してならば、聖靈の態度は言ひ知れぬ優味を漲らしたものである。イエズス・キリスト様のお授けになつた御教訓を全うし、其の着手せられた御薫陶を完成し給ふのであります。

諸子に言ふべき事は猶多い。然し諸子は唯今之に耐へ得ません。彼の眞理の靈が來給うたら、一切の眞理を諸子に教へ給ふであらう。そは己より語り給ふのではなくて、其の聞きになる所を語り、又起るべき事を諸子に告げ給ふであります。彼は私のものを受取つて、諸子に示し給ふであらう、と私の言つたのは、之が爲であります。

父は聖三位の源、第二位、第三位は、絶えず父の分配を受け給ふのですから、斯う仰有つたのであります。猶續いて、

暫くすると、諸子はもう私を見ますまい。又暫くすると私を見るでありませう。私は我父の許へ行くのですから、

と曰うた。自分の死は近きに在る。暫くすれば、自分を見ることが出来まい。然し又間もなく自分は天に昇る。御父の許へ歸る。すると信仰の眼を以て自分を見る様になる、と仰有つたのである。然し弟子等は御言の意味が解りません。

暫くすると、諸子は私を見ますまい。又暫くすると私を見るでありませう。又、私は父の許へ行くのですから、とは何の意味でせう。暫くするとは、何ですか。私等は其の語り給ふ所を知りません、

と相顧みて互に語合つて居る。イエズス様は、彼等の胸の中をお曉りになつた。自分に尋ねたく思つて居る彼等の心を汲取つて下さいました。

暫くすると、私を見ないでせう、又暫くすると私を見るでありませう。と言つたことに就て、諸子はお互に僉議して居るんですか。私は誠に實に諸子に申します。諸子は悲んで泣き、世は却つて喜ぶであります。諸子は悲みますでせう、然し其悲は變つて喜となりま

暫くすると、諸子はもう私を見ますまい。又暫くすると私を見るでありませう。私は我父の許へ行くのですから、

と曰うた。自分の死は近きに在る。暫くすれば、自分を見ることが出来まい。然し又間もなく自分は天に昇る。御父の許へ歸る。すると信仰の眼を以て自分を見る様になる、と仰有つたのである。然し弟子等は御言の意味が解りません。

暫くすると、諸子は私を見ますまい。又暫くすると私を見るでありませう。又、私は父の許へ行くのですから、とは何の意味でせう。暫くするとは、何ですか。私等は其の語り給ふ所を知りません、

と相顧みて互に語合つて居る。イエズス様は、彼等の胸の中をお曉りになつた。自分に尋ねたく思つて居る彼等の心を汲取つて下さいました。

暫くすると、私を見ないでせう、又暫くすると私を見るでありませう。と言つたことに就て、諸子はお互に僉議して居るんですか。私は誠に實に諸子に申します。諸子は悲んで泣き、世は却つて喜ぶであります。諸子は悲みますでせう、然し其悲は變つて喜となりま

せう。婦がお産をしよう云ふ段になると、其時期が来たことゝて、憂ふるものであります。然し子を産み了れば、世に人が一人生れたのですから、其喜の爲に最早や苦痛を覚えることとがありません。諸子も唯今は憂を懐いて居る。然し私が再び諸子を見ましたら、諸子の心は喜ぶであります。而も其喜を諸子の心から奪ふ者は有りますまい。

彼の日になると、諸子は何事をも私に問ふ事がありますまい。私は誠に實に諸子に申します。諸子が若し私の名によつて父に求める所がありますならば、父は之を諸子に賜ふであります。諸子は今まで私の名を以て何を求めないのでした。求めなさい。然らば受け得て、諸子の喜は全うせられるであります。

然らば近き將來に於て、弟子等はたゞ慰藉を辱うし得ないばかりではない。主を見ることすら出来なくなる。様々の憂苦、悲哀に襲はれねばならぬ。然し其憂苦、悲哀は、他日大なる喜悅に變化する、彼等の祈る所は、何一つ聞かれざるなし、と云ふまでに至るのであります。

【結尾】、今はこの長い御談話を結ぶべき時となりました。イエズス様は御自分の天主性、父と

の一致を繰返して、簡単に結尾を付けられます。

私は斯んなに喩を以て諸子に語りました。然し最早や喩を以て諸子に語らず、明白に父に就て諸子に告ぐべき時が参ります。其日になると、諸子は私の名によつて求めるであります。而も私が諸子の爲に父に祈りませうとは申しません。諸子は私を愛して、私が天主様から出たことを信じて居るので、父も諸子を愛して居らつしやるからです。私は父から出て、世に参りました。復た世を離れて父の許へ行きます。

斯う仰有ると、弟子等は御言を遮りました。

唯今こそ明白に御話になります。毫も喩を語り給はぬ。今にして私等は、主が萬事を御存知で、人の問ふのを待ち給はないことを知ります。是によつて、主が天主様からお出になりましたことを信じます。

と申しました。彼等は兒童の様で、もう何も彼も曉り了つた積でした。『彼等はホンに曉が無かつた。自分の曉つて居ない事すら曉らぬのでした。兒童だつたのですから』と聖アウイヌチヌスは批評して居られる。イエズス様は答へて彼等に仰有います。

諸子は唯今信じますか。看なさい。時が参ります。もう参りました。諸子は何れも思ひ／＼に散亂れて、私獨を遺棄にするに至るでありませう。然し私は獨ではない。父が私と共に在すのです。斯く私が諸子に語りましたのは、諸子が私に於て平安を得んが爲です。世に於て、諸子は難に遭ふでありませう。然し頼もしく思ひなさい。私は世に勝ちました。結尾は如何にも崇高だ。宛然、凱旋將軍の唇を漏出さうな句調である。でも數時間の後には表面から観ると、散々な敗北を喰はされたらねばならぬ。然し飽まで最後の勝利を信じ、彼んなに豪語せられました。して時を経、世を降るに隨ひ、御言はいよく實現されて主の勝利はます／＼鮮明に輝き亘るに至るのであります。

基督信者の現世に於ける生活は、不斷の戰鬥生活である。内からも、外からも、様々の敵に攻め立てられて居る。然し頼もしく思はねばならぬ。主は勝ち給うた。世の終りまで勝ち給ふのです。たゞ其爲に肝要なのは、何時も主の御腕に縋り、絶えず御援助を祈ることです。御話中、イエズス様が「祈れよ、求めよ」と幾度も／＼繰返しなされたのに注意せねばなりません。

(八) 司祭的祈禱 (ヨセフ一―二六)

【この祈禱の性質】、イエズス様は長／＼御物語の後、ツと御目を舉げて天を眺め、父の天主様に御祈禱を申し上げなさいました。人は之を呼んで「司祭的祈禱」と云つて居る。實にイエズス様は、新約の大司祭と云ふ資格を以て、その血祭をお獻げになる前、御父に向つて御祈りなさつたのである。そのお祈禱は非常に崇高くて、亦十分の温さもあり、中實は豊富で、感情は張りちぎればかり。恐らく人の語として書き遺されたものの中に、是ほど優れて、見事なのは、今二つとありますまい。

【御自分の爲の祈禱】、イエズス様は御自分の爲、使徒等の爲、聖會の爲に祈られた。御自分の爲には、人の子として光榮を御願ひになる。その從順に對して、その苦痛を堪忍んだ報酬として、當然、享け給ふべき無上の光榮をお願ひになります。父よ、時が参りました。子をして御身を光榮えしめんが爲に、子に光榮あらしめ給へ。萬民の上に權能をお授けになつたのは、御身より賜はりました人々に、永遠の生命を與へしめん

が爲でした。抑も永遠の生命と申しますのは、唯一にして眞の神なる御身と、そのお遣しになつたイエズス・キリストを知り奉るに在ります。私は地上に於て主に光榮あらしめました。私に爲さしめんとてお與へになりました業を全うしました。父よ、私が世界の存在に先ちて、御身と共に有せし光榮を以て、唯今御身と共に私に光榮あらしめて下さいませ。

神の御身に釣合ふだけの光榮を、其人性に賦與はりたしと、お祈りなされたのであります。

【使徒等の爲の祈禱】、使徒等の御自分に對する忠實さを稱へた上で、イエズス様は彼等の爲に御援助を祈られます。その神聖なる職務に相當するだけの聖徳を、彼等に賜はんことを御求めになります。御祈禱の主旨は、この一段に在る、と謂つても可いのであります。

此世から選び出して、私に賜はつた人々に、私は御名を顯しました。彼等は御身のものでした。之を私に賜うたのでした。彼等は御言を守りました。私に賜うた事は、悉く御身より出るのだ、と彼等は今にして曉りました。蓋し私に賜うた御言を、私は彼等に授けました。彼等は之を受けて、私が御身から出ました事を深く曉りました。御身が私を御遣しになつた事を信じたのであります。

私は彼等の爲に祈ります。世の爲ではなく、私に賜うた人々の爲に祈ります。彼等は御身のものだからであります。私のものは悉く御身のもの、御身のもものは亦私のもので、私は彼等の中に光榮を得ました。私は最早や世に居りません。彼等は世に居ります。私は御身の許へ参ります。聖なる父よ、私に賜うた人々を、御名を以て護り給へ。私等の如く、彼等をも一ならしめ給へ。私が彼等と共に居ます間は、御名を以て彼等を護りました。私に賜うた人々を保ちました。其中の一人でも失せませんでした。たゞ聖書の成就せんが爲に、亡びの子が失せたのみであります。唯今私は御許へ参ります。世に在りて斯く申上げますのは私の喜を彼等の身に圓滿ならしめんが爲です。私は御言を彼等に授けました。世は彼等を憎みました。私が世のもので無いが如く、彼等も世のもので無いからであります。私の御願ひ申しますのは彼等を世から取り去り給へ、と云ふのではなく、彼等を護つて、悪を遁れしめ給へ、と云ふのであります。私が世のもので無いが如く、彼等も世のもものではありません。願くは彼等を眞理の中に聖ならして下さいませ。御言は眞理であります。私を世に遣し給うた如く、私も彼等を世に遣しました。私は彼等の爲に私を聖ならしめます。彼等を

も眞理の中に聖ならしめんが爲であります。

「聖」とは、引別ける、聖別するの意味である。自分は、一切の物に別れ、専ら救霊の事業に一身を投じ、御父の御前に馨しい犠牲となる。だから彼等も自分の如く聖別され、専ら救霊の事業に一身を投出すに至らしめ給へ、と祈られたのであります。

【聖會の爲の祈禱】、終にイエズス様は、將來、自分の弟子たるべき者、即ち總の基督信者の爲にも祈られた。彼等の上に、司祭的御手を伸べて、祝福を下しつゝ、現世に於ては完全な一致を、天國に於ては永遠の光榮、窮りなき福樂を與へ給へ、と御祈りなさいました。

私は彼等の爲ばかりではなく、亦彼等の言によつて、私を信する人々の爲にも祈ります。彼等が悉く一ならんが爲であります。父よ、是御身が私に在し、私が御身に居ります。が如く、彼等も私に居つて、一ならんが爲、そして御身が私をお遣しになつた事を、世に信せしめんが爲です。私に賜うた光榮を私は彼等に與へました。是は私等が一であります如く、彼等も一ならんが爲です。私は彼等に居り、御身は私に在す。是は彼等が一に全うせられんが爲め、又御身の私をお遣しになつた事、私を愛し給うた如く彼等をも愛し給

うた事を、世に曉らしめんが爲であります。父よ、願くは私の居る所に、私に賜うた人をも、亦私と共に居らしめ給へ。是は世界開闢以前から、私を愛して、私に賜うた我光榮をば、彼等にも見せしめんが爲であります。義しき父よ、世は御身を知りません。然し私は御身を知り、彼等も亦御身の私を御遣しになつたことを知りました。私は御名を彼等に知らしめました。又知らしめるでういませう。是は私を愛し給うた愛が彼等に存して、私も彼等に居らんが爲であります。

何と云ふ高遠な、而も言ひ知れぬ優味をも持つた結尾なんでせう。誰か之を讀んで、嬉しい、そして力強い信頼の念を、惹起さず居られませう。

基督信者の特色は博愛にあります。イエズス様は、私等の爲に富貴を祈らず、榮達を求めずたゞ美しい一致を、渾らぬ愛を、父と自分と一なるが如く、私等が共に一たるの聖寵を願ひ下さいました。何んな事があつても、この御祈禱を空しうしてはならぬ。私等は是非ともお互に相愛し、相和いで行かねばならぬ、然もなくば、キリスト信者の名あつて實なきものと謂ふより外はありません。

神的犧牲

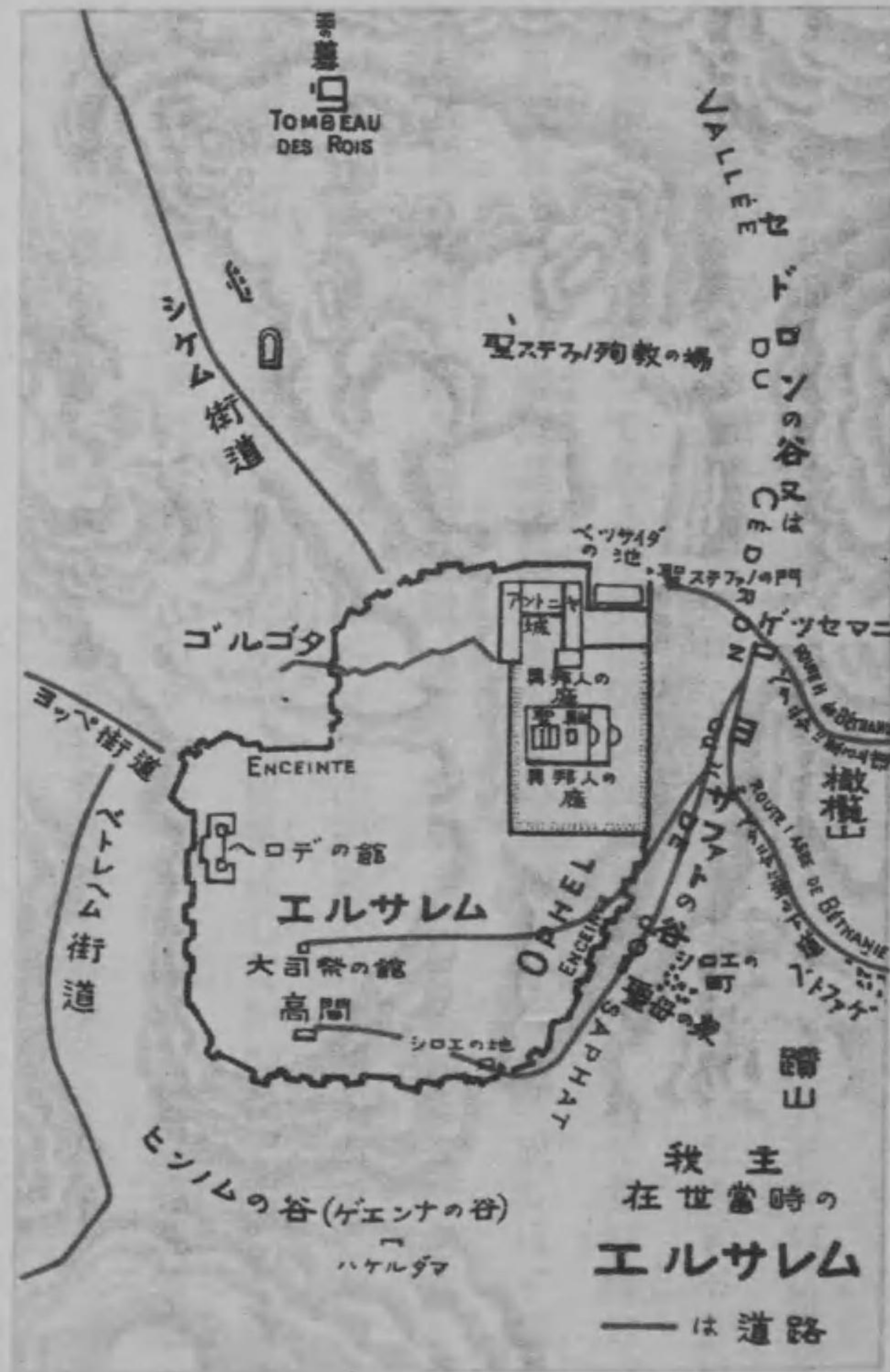
いよ／＼御受難の場に達しました。暫く其序幕を覗き、然る後、本舞臺に進みませう。無上至尊の犠牲は、身にも心にも、堪へ難い苦痛、凌辱を浴せられながら、温和な羔の如く、静に温順しく开を堪へ忍び、感すべき忍耐、驚くべき勇氣を御見せ下さいませう。心を止めて、この場面を打眺めましたら、誰しも聖トマと共に『私等も共に行つて死にませう』(ヨハネ一六)と叫ばざるを得ぬでありませう。

第七章 吾主の御受難

(一) ゲツセマニの園に於ける御心痛

(マテオ、二六ノ三六
ルカ、一四ノ三二
二二ノ四〇)

【ゲツセマニの園】、イエズス様は弟子等を引連れて、エルザレムをお出行になつた。途中お話を續け、終に感すべきお祈禱を、父の天様に申し上げなさいました。エルザレムの東に當つて、橄欖山が突立ち、山とエルザレム城との間は、狭くて、深いセドロンの谷になつて居る。



降雨期を除いて、常に水は流れない。橋を渡つて山の麓に辿り着くと、一個の園がある。ゲッセマニと稱する。神殿北面の前庭と向合ひになつて居る。ゲッセマニとは「油を絞る」と云ふ意味である。舊は橄欖樹が茂つて居たのだから、何でも其油を絞つたものと思はれる。たゞ今も七本の舊い橄欖の老樹が残つて居る。其樹幹は曲りくねつて、枝や葉は疎に、餘程年古りたるものゝ様に見受けられる。或は其當時のものであるかも知分らぬ。成るほど羅馬の大將チツスがエルザレムを攻圍んだ時、附近の立樹は悉く斫取つたと云ふことである。然し羅馬軍の攻撃を加へたのは、北の一面、スコプス山とヘロデの墳墓との中間からでした。エリコから進んだ一隊は、橄欖山に屯して、退路を塞いだ丈で、攻撃はしなかつた。随つて攻圍用として、此方面の樹木を斫倒す筈がない。兎に角、このゲッセマニの園は、世界靈地の隨一に數ふべき所で、昔から基督信者の篤く尊重したものであります。

園は周圍に垣を繞らし、門を設けてあつたものらしい。エルザレムには近いが、餘程、閑靜で人通りも稀で、祈禱、黙想に耽けるには至極適當した所でした。所有主は多分イエズス様のお弟子か、何かであつたものでせう。イエズス様は平生、其の内に這入つて、お祈禱をなさるので

ありました。

【御心痛】、この夜も例の如く、其園に御這入りになりました。弟子等は御後に従ひました。イエズス様は園の入口に彼等を止めて、

私が彼處へ往つて祈る間、諸子は此處に坐つて居なさい、

と仰有つた。そしてペトロとゼベデオの子のヤコブとヨハネとの三人を伴ひ、奥へ進まれた。

ヤイルの女をお蘇生しになつた時、山の上で御變容あそばした時も、この三人を伴ひなかつた然し従前とは違つて、今度はその大なる弱味を、痛々しい悲哀をお見せになる爲でした。過越の食事は、夜中を過してはならぬ規定でしたから、時はもう彼此れ十二時近くでありましたでせう。十四日の月は、既に橄欖の山の端を離れて、稍高く、溶々水の如き光を投げて、園の中に覗き込んで居たに相違ない。忽ちイエズス様は、異常な恐怖、憂苦、悲哀を御心に覚えさせなさいました。その堪へ難い御心痛を三人に打開けて、

私の魂は死なん許りに憂ふる。諸子は此に留つて、私と共に警醒して居るのですよ、と仰せられた。御受難の幕はいよ／＼切つて落された。堪へ難い御心痛は、千鈞の重さを以て

主の上に殺到した。この時の御心痛に、比ぶべきものはだゞ十字架上の死苦、それのみでありました。

さてイエズス様は三使徒を其所に留め置かれた。自由に、心を打開けて、天主様と御話が出来様、御自分は石を投げ得る位、大低四五十歩ほど彼等より引離れて、跪きなされた。跪きながら人類の數限りなき罪を打眺めなさいました。其罪の爲に堪へ忍ぶべき百千の痛苦、凌辱を思ひ、夫れ程の痛苦、凌辱も、多くの人の爲には、全く無益に終るべきことを考へて、悲しいやら、恐しいやら、厭らしいやら、何とも名状すべからざる心持を覺えさせなさいました。地に平伏して、天主様を伏拜み、心中の苦を訴へて、叶ふべくば此の苦の時を自分より去らしめ給へ、と祈られました。

あゝ父よ、御身には總て能はざる事がありませぬ。思召し給はば、此杯を私より取去り給へ。然し私の心の儘ではありません。思召のまゝに成し給へ。

腸を斷つ様な哀しい御祈禱の聲が、途切れ／＼に樹下暗から洩れて来る。固よりこの苦い杯を御子の唇より取去ることは、御父の爲には、お易い事でした。然し御子の御苦難御死

去によつて、世を贖ふと云ふのが、永遠のその昔からのお定めである。イエズス様が斯んなに御胸を騒がせなさつたのも、其所を飽まで御存知あそばしたからでした。山の如き恐怖、憂苦、悲哀が襲ひかゝつて來ては、幾らイエズス様でも、人性の上からは、喜怒哀樂の情を人一倍備へて居なさる以上、自然に戰慄いて、斯の様な悲しい叫を擧げ、出來得れば、是を遁して貰ひたいものと思はれたのも、無理からぬ次第であります。然はさりながら、イエズス様の御心は、決して夫に壓倒されなさる様な事がない。御身を残らず御父の思召に打托せ、御旨のまゝになし給へ、と祈られたのであります。

恐怖の念に打克ち、御父の思召に一身をお托せになつた上で、イエズス様は三人の弟子の傍へお戻りになつた。彼等の同情に多少の慰藉を得たらば、と思はれたのである。然しイエズス様のお望は全く裏切られた。弟子等は、たわいもなく居眠つて居る。イエズス様は、些と情なく思はれてか、ペトロに向ひ、靜にその不甲斐なさを詰られた。

シモン、眠つて居るのですか。私と共に一時間も警醒して居り得ないんですか。誘惑に入らない爲に、警醒して祈りなさい。精神は逸れども、肉は弱いものです。

實際さうです。精神は逸る。身を抛つて、天主様の爲、人の爲に盡すのを厭はない。然し油断をすると、肉に引張られて、下の方へ下の方へ流れたがるが、人間の淺間しさ。現にペトロを始め、弟子等は口を揃へて、主の爲ならば、生命を捨て、も惜まない、と言張つたものでした。その舌の根も乾かぬ中に、早や此の爲體である。彼等さへ彼の通りだ。況して私等の如く弱い、倒れ易いものは、いよゝゝ警醒して、天主様の御助力を祈らねばならぬ。さてイエズス様は弟子等を離れて、前の所に到り、同じ祈禱を反覆しなさいませ。

我父よ、此杯は私が飲まなくては去り能はぬものならば、思召のまゝに成ります様に。今度は一層の勇氣を振つて、全く父の思召にお托せなさつた。然る後、再び弟子等の方へ取つて返されたが、彼等は相變らず、グー／＼と居眠つて居る。彼等の眼は悲哀の餘に疲れて居たのです。彼等はその答へる所を知らぬのでした。因つて彼等を棄て措いて、三たび同じ祈禱を繰返しなさいませ。戦の續く間は、心を堅く天主様と一致させ、肉が如何に藻掻いても、叫び立てても、夫には一切頓着せず、全く天の思召に一身を打托せ、以て能く肉の苦悶に打勝ちなすつたのであります。

【血の汗】、イエズス様は、肉の苦悶に打勝ち打勝ちなされたが、その爲に嘗めさせ給うた戦闘の辛さと云つたら、夫は、非常なものでした。

其時、一位の天使が天から顯れて、お力を添へました。イエズス様は死なん許りに苦み、いよいよ切に祈られた。汗は土の上に滴りて、血の雫の如くなりました。

右はルカ福音史家の傳へた所であるが、イエズス様の御心痛が、如何に深く其の靈に喰込んだか、天主様の思召に全然安じ給ふに至る迄には、如何に猛烈しい暴力をその自然に加へ給はねばならなかつたか、と云ふことが、マザと眼前に浮み出てるぢやありませんか。流石のイエズス様でも、天使に激勵され、慰藉められ給ふ必要があつた。一方には憂苦、恐怖、暗闘の激さに、心臓の鼓動は急激しくなり、血液は盛に流れ、其ま、直に汗玉となつて、全身に滲み出で、ポテリと地上に滴り落ちた。是を以て観ると、ゲッセマニの死の悩みは、荒野に於ける誘惑と同じく、三たび攻撃を受けて、三たび之に打勝ちなされたのであります。

イエズス様は既に苦の杯を飲み干しなされた。御父の思召に従ひ、人類の救贖の爲に、進んで一命を抛つべく決心せられた。もう心の曇りは消去つた。氣も晴々となり、祈から起上つて、

弟子等の許へ行つて見られた。彼等は依然眠つて居る。憂の餘りに氣も心も弱り込んで居たものである。然しイエズス様は、早やもう勇氣凛々、人間の慰藉なんか要しなさらぬ。

今こそ眠つてお休みよなさい、

と云つて、暫く彼等を寝ませなされた。彼此する中に、捕吏の足音が聞え出した。イエズス様は弟子等を呼醒し、

もう澤山、時は來ました。今や人の子は罪人の手に付されようとするのです。起きなさい。往きませう。ホラ、私を付さんとする者が近きました、

と仰有つた。恰當その時ユダ奴が捕手を引連れ、松明かざして推寄せたのであります。

イエズス様が彼れ程の御心痛に沈み、血の汗までも、絞らせなさいましたのは、私等の罪故でした。誰しも罪を怖れなさい。イエズス様を死苦に陥れたよと思つて、罪を憎みなさい。夫と共に祈禱の偉力を思はねばならぬ。彼んなに憂ひ、苦み、怖れ、悲みに沈み入りなされたイエズス様も、天主様に祈り、その思召に御托せなさいますと、忽ち凛々しい勇氣に、身は躍り立つよ、と覺えさせなされたぢやありませんか。

【ユダの接吻】、時は正に真夜中でした。十四日の月は中天に懸り、青白い、水の様な光を、谷一面に流して居る。天も地も深い眠に入り、物凄いまでに静り返つて居る。たゞ時としてアントニア城を成れる哨兵の聲が、微に耳に入る許り。忽ちドス／＼と足音が聞える。炬火の光がクワツと見え出す。劔、棒等を携へた大勢が推掛けた。先頭に進んで来るのは、確にイスカリオテのユダ奴だ。彼はエルザレムの高間を出て、司祭長等の許へ走つた。イエズス様を捕へるに都合好い時期の来たことを告げた。イエズス様が屢々ゲツセマニの園へ退いて、御祈禱に耽りなさるので、其祈禱の場に踏み込んだら、捕へるのに雑作は無い、と言ひ添へた。司祭長律法學士、長老等は、喜んで彼に捕手を従はせた。その捕手と云ふのは、平素神殿の警戒に當れる兵卒、下役、其他、臨時に傭入れた群衆であつたらしい。彼等は手に／＼劔や棒などを携へて居る。抵抗する者があつたら、片端から切棄て、叫き伏せる心算であつた。月夜とは云へ谷の窪み、樹下蔭等は随分暗いので、炬火を携へた者もあつたのである。

(二) 捕

縛

(マテオ、二六ノ四七
ルカ、二二ノ四三)
ヨハネ、一八ノ一

ユダは萬事に抜目がない。引連れて来た群衆の中には、イエズス様の面相を見識らぬのが多い。殊に夜中ではあるし、過つて他の者を捕へ、目的のイエズス様を取逃しては何にもならぬ。彼は群衆に合圖を與へて、

僕が接吻をするのが其だ。捕へて確と引張つて貰ふぞ、

と言つて置きました。ユデア邊で挨拶の仕方は五通りある。其中で一番親しいのは、對者の手を執つて、其顔に接吻するのださうである。彼は親愛のしるしをば裏切りの合圖となしたのだ。流石に主を賣る程の悪徒だけあつて、その腹黒さは亦格別である。時にイエズス様は三人の弟子を従へ、他の弟子等の止れる園の入口まで御出になつた所でした。其處にユダはツカ／＼と遣つて来た。イエズス様に近いて御手を執り、

先生、安かれ、

と挨拶し、其の頬に接吻した。

友よ、何の爲め来ましたか？

と云つて、イエズス様は靜に彼をおし退け、真向に其顔を打眺めつゝ、

ユダ、接吻を以て人の子を付すのですか、

と仰有つた。捕手はまご／＼して居る。猶園の外に立つて、様子如何と固唾を飲んで見守つて居る。イエズス様は我身の上に来るべき事を逐一御承知なさつた。人類の救贖の爲に、御身を敵の手に付すお覺悟であらせられたので、弟子等の中を離れ、園の入口に進み、捕手の大勢に向ひ、誰を捜すのです？

と曰うた。

ナザレトのイエズスを、

と彼等は答へた、

私です。

イエズス様は最嚴に曰うた。時にユダは群衆の中に交り、彼等と共に立つて居ました。「私です」とイエズス様が曰ふや、彼等は異様な恐怖に打たれ、後退してドツと地面に打倒れた。全くの奇蹟です。大きな／＼奇蹟でした。イエズス様は、固より御身を付す覺悟であらせられた。然し彼等の手に捕はれるのは、抵抗する力が無いからではない、遁れようと思へば、雑作

はないのだ、と云ふことを見せるが爲、たつた一言の下に、彼等を打倒しなすつたのである。彼等はやがて起上つた。イエズス様は重ねて、

誰を捜すのです？

とお尋ねになつた。

ナザレトのイエズスを、

と彼等は相變らず答へました。

私です。私は早や諸君に申しました。若し私を捜すのでしたら、此の人等を容して去らして下さい。

斯んな急場にも、弟子等の事を忘れず、彼等の身に危害の及ばない様、慮りなすつた。「私に賜うた人々を、私は一人も失はなかつた」と曰うた御言は、茲に全く成就したのであります。

【終に捕はれ給ふ】、其時、人々は近いてイエズス様に手を掛け、之を引捕へた。御側に居た使徒等は、事の成行を見て、何うしても黙つて居られない。

主よ、劍を以て斬り付けませうか？
 と言ふが早い、シモン・ペトロは服の下に隠し持ちたる劍を引抜き、イエズス様に手を掛け
 た男に一刀を浴びせた。然し餘程、周章て、手許が狂つたものと見え、僅に右の耳を切り落し
 たに過ぎなかつた。切られた男はマルクスと云ひ、大司祭の下僕でありました。
 是だけにして置きなさい。

イエズス様は弟子等を宥め、マルクスの耳に御手を觸れて、之を綺麗に癒された。ペトロの
 憤慨、その勇氣は左ることながら、この場合、なまじい手出をしては、却つて敵を怒らすばか
 り、百の害はあつても一の益もない。因つてペトロに仰せられた。

其方の劍を鞘に收めなさい。すべて劍を把る者は劍に亡びる。私が父にお求めしたら、父は
 直に十二隊にも餘る天使を、私に賜ふことが無いと思ふのですか。然すれば、斯く成るべし
 と言つてある聖書の言は、何うして成就するのです？父の賜うた杯を、私は飲まない譯に
 行きますか

御父に願つて、十二使徒の代りに、十二隊の天軍を呼降し、捕手を蹴散すことは譯もない話だ

然しメツシアが世の救贖の爲に苦を受けて、命を損すと云ふのは、天主様の御定め、預言者等
 の繰返し々々明言せる所。イエズス様も夫を反古になさうとは、夢にも思ひ給はぬのでありま
 した。

弟子等を宥めた上で、イエズス様は、己を捕へに來た司祭長、神殿の司、長老等に向ひ、威風
 堂々と彼等の卑劣極まる態度を非難されます。

諸君は盜賊にでも立向ふが如く、劍や、棒を提げて、私を捕へに來られた。私は毎日、
 神殿は諸君の中に坐して、教へて居ましたのに、諸君は私に手を掛けて捕へなさらぬでし
 た。然し今は諸君の時です。暗黒(惡魔)が勢力を振ふ時です。すべて然うして預言者等の書
 の成就せんが爲に、斯う成つたのです。

斯くて、兵卒、千夫長、ユデア人の下役等は、イエズス様を捕へて括り上げ、其儘、エルザレ
 ムへと引立てた。すると弟子等は御言に違はず、師の君を見棄て、一目散に逃げ失せた。牧者
 が撃たれたので、羊は怖れて、散々となつたのであります。

彼等が逃げ失せたのは、固より臆病神に取憑かれた爲である。決して譽むべき事ではない。然

しこの場合、イエズス様の御後に従ふのは、險呑至極だつたことだけは承知して貰はねばならぬ。其證據に、イエズス様が引れ行き給ふ際、路傍の家に寝んで居た一人の青年が、多分足音に目を醒して、ガバと跳起きたものと見え、肌を引掛けたまゝ、後から隨いて行きました。彼はイエズス様のお弟子だつたか、或はたゞ物好きに後を尾けたものか、其邊は何とも分りません。然し附近の山谷には、ガリラアの巡拜者が天幕を張つて寝んで居る。彼等は平素イエズス様を篤く尊信して居るので、今夜の事が、萬一彼等に知れ渡つたものなら、何んな騷動が持上らぬにも限らぬ。一刻も早くエルサレムへ引上げたいが、捕手の腹でした。夫に怪げな人間が、白い布を被つて後を尾けて来る。薄氣味悪くて堪らぬ。何者だが、引捕へて見ようと思つたんでせう。腕を伸して、ムツと彼を掴んだ。青年はすばやく廣布を打棄て、裸體のまゝ、逃げ失せました。

ユダの罪の憎たらしい事と云つたらありません。三年の間も、親しい友、可愛い子として、一方ならぬ御親切を忝うして居ながら、僅の目腐金に迷つて、其師たり、父たるイエズス様を敵に付す、而も親密な、友らしい顔をして、接吻を以て敵に付すと云ふは、何と云ふ腹黒

さでせうか。『若し私の仇が私を誹るのでしたら、私もチツト堪忍んだでせう。若し私を恨める者が大それた事を申しましたら、多分身を隠して、彼を避けましたでせう。然るに汝は私と同じ心の人、私の友、私の仲睦しい者、互に親しく語らひ、集會の中に在つて、共に神の家の上つたものであります。』(詩篇五三ノ一三)とダウイドが歌つて居るのは、正しくユダの裏切を攻めたものではありませんでせうか。

(三) 衆議會に於ける審問

マテオ、二六ノ五六
マルコ、一四ノ五三
ヨハネ、一七ノ一三

【アンナ】、捕吏はイエズス様を引立て、エルザレムは大司祭の屋敷へ連込んだ。今日のエルザレムは昔の倂を止めぬまでに變つて居るので、御通行の途筋を正確に知ることは出来ない。然し大司祭の屋敷は、最終晚餐をお開きになつた高間の附近に在つたらしいので、數時間前に、御通り遊ばした路に由り、セドロンの谷を涉り、シオンの岡の東側に沿うて、引戻されなかつたものと思へば、大した差違はありませんまい。

捕吏は先づアンナの許へ引立てた。アンナは時の大司祭カイファの舅で、嘗て大司祭の職を務

めたこともあり、カイファと同じ屋敷内に住んで居ました。彼はユデア人の間に頗る羽振がよく、其勢力ツたら寧ろ大司祭以上でした。彼等がイエズス様を衆議會に引張り出す前に、先づ彼の意見を叩かうとしたのも無理はありません。

その當時、ユデアに於て、宗教上の最高權威を掌握せるのは、衆議會であつた。因つて夜中にも拘らず緊急召集令を發して、司祭長、律法學士、民間の長老等を招き、會議を開くこととした。召集令を受けた議員は、ポツ／＼集つて来る。其間にアンナはイエズス様の訊問をやつた弟子の事、教の事を尋ねた。イエズス様のお説きになる神の國とは、當時ユデア愛國黨の夢想せるメツシアの國で、つまり羅馬政府に對して獨立を企てるのだと思ひ誤り、一味同類を檢舉し、彼等の白狀によつて、首謀者たるイエズス様の罪を定め、之を片付けて了はうと云ふのが彼等の腹でした。アンナの訊問の裏には其んな考が潜んで居たのである。イエズス様は、第一問を其まゝに差措き、第二問に對しては、如何にも巧い御答をなさいました。

私は白地に世に語りました。何時も、總のユデア人の集れる會堂や、神殿に於て教へました。密に語つた事は一つもありません。貴殿は何で私にお尋ねなされるのです。私の語りま

した所を聞いた人々に問うて下さい。彼の我等が、私の言つた所は知つて居る筈です。

立論は誠に堂々たるものでした。自分は公に、會堂や、神殿で、一般民衆に教を説いた。隠す所は一つもなかつた。自分に尋ねるにも及ばぬ。民衆に問ひ給へ、と仰有つたのである。流石のアンナも返す辭がない。黙り込んで居ると、其場に立會へる一人の下役が、行きなりイエズス様の御頬に掌を喰はせ、

大司祭様に向つて、其んな答をなす筈か、

と怒鳴り付けた。イエズス様は決して大司祭に失禮な言をお吐きになつた譯ではない。で静に而も嚴然と色を正して、彼の暴行に答へられます、

若し私の言つたのが悪いならば、悪い證據をお出しなさい。善いならば何で私を打つのです？

アンナも今は何とて手の出し様がない。其所で訊問を打切り、イエズス様を縛つたまゝ、之を大司祭カイファの許へ送り遣つた。カイファと言へば、嘗てユデア人に向ひ、「人民一般の爲に一人が死ぬのは利益だ」と注意を與へた男である。こんな腹を持つた男が、衆議會の議長

となつて、審問するのだから、その成行は知るべきでありませう。

【カイファの審問】、さて議員等は召集に應じて、段々集つて来た。正式の審問が開ける様になつた。尤も正式とか公平とか云ふ觀念は、彼等の頭に在る譯ではない。審問を開かぬ中から、早や宣告を下して居たのだが、然し體面だけは作つて置きたい。夫には證人の申し立てを聴かねばならぬ。カイファと其同類は、前以て其用意をして置いたので、審問を開くや、忽ち多くの偽證人がやつて来た。でも彼等の申立てる證據は、お互に一致しない。死罪を申し渡すだけの理由にならぬ。是は天主様の御攝理によつて然うなつたものと思はれる。イエズス様は少しでも罪があつて殺されなかつた様に見ては宜しくない。たゞメツシアとして、ユデア人を始め、全人類の救主として、極刑を受け給はねばならぬ。飽まで其使命を盡すに忠實であらせられたと云ふより外に、何等の過失もなかつたのだ、と云ふことが、天下萬民に、知れ渡らねばならなかつたからであります。終に二人の偽證人が立顯はれた。イエズス様に對して、左の如き證言を申し立てた。

彼は人手に造られた此神殿を打壊し、三日の中に、人手に造られないものを別に建てると云

つた。我々は聞いて居る。

ユデア人は神殿を唯一の誇としたもので、エレミアの如きは、之が破滅を預言した爲に、石殺に遭はんとした位でした。随つて二人の申し立てを事實とすれば、死罪を宣告する理由は十分であつた。然し彼等の證言は、全く成つて居なかつた。彼等はイエズス様の仰有つた御言を捉へて、斯んなに申し立てただけれども、イエズス様の神殿と仰有つたのは、エルザレムの神殿ではなく、御自分の御體の事であつた。その御體が三日目に復活すべきことを預言された迄に過ぎなかつたのである。猶イエズス様は『私がこの神殿を打毀して見せる』とは仰有らぬ。たゞ『この神殿を打毀しなさい。私が三日の後に之を再建しますから』と曰うたのみで、不敬に亘る様な意味合は一つも無い。夫は夫にしても、彼等の言ふ所は互に一致しなかつた。彼等は一人づつ、判事の前に出て、證言を申し立てたのだが、然し一人の言つた所を一人が打壊す様な始末になつたものと見える。爲に折角の申し立も徒勞に歸りました。

でも證據が擧らぬでは、自分等の自的は達せられぬ。幸ひ今度の申し立には、頗る眞らしい所がある。之を捉へて判決の理由になしたるものと思ひ、カイファは皆の眞中に突立つて、被告

に辨解を求めた。イスラエルの神の聖殿に向つて、冒瀆の言を吐いたのは不都台千萬ではないか、と言はんばかりに、

彼等の申立に對して何にも答へないのか？

と迫りました。一たび口をお開きになれば、申し立の虚構なることを公にし、彼等に顔色なからしめることは、朝飯前の事でした。然しイエズス様は、その森嚴犯し難い沈黙の中に引籠りなされた。黙然として何ともお答へにならない。カイファは何とかして、イエズス様を其沈黙の中から引張り出したいものと思ひ、故に莊重な句調を使つて、

我は活ける神によつて汝に命す。汝は神の子キリストなるか。我等に告げよ、

と申しました。イエズス様は終にお口を開かれた。天主様の御名にかけて命じられた上は、黙り込んで居る譯には行かぬ。ユデア精神界の最高權威者から、職權を以て訊問されたからは、一刻も躊躇なさらぬ。衆議會の面前に於て、我身がメツシアであり、神の子であることを、公に宣言せられた。

然り、仰の通りです、

と、はつきりお答へになつた。してその御言に一層の力を添へるが爲に、

然し諸君は、人の子が全能にて在す神の右に坐し、空の雲に乗つて來るを見ませうぞ、

と言ひ足して置かれた。自分の言つたのは、眞實偽りなしだ。近い將來に其證據が見える、唯今でこそ斯んなに賤められて居る。無能無力になつて居るが、然し聽ては、天に在す御父の右に坐し、其光榮に入るのを見ねばなるまいぞ、とお告げになつたのである。實際、彼等は間もなく、カルワリオに於て、又御復活の際に於ける奇蹟、ペンテコステの日に、使徒等の手によつて行はれる奇蹟を見るのである。教會が非常な勢で以て、エルザレムに、ユデアに、地の極にまで發展し行くのを見るのである。エルザレムが滅亡して、一撮の焦土に歸し去るのを見るのである。是等はすべて基督様が、世の終に、天の雲に乗つて、來り給ふべき前兆なのだ。其上、イエズス様の御言その物も、メツシアを預言せる舊約聖書中から借り來られたもので、「エホワ、我主に曰はく、汝、我が右に坐せよ」と(詩篇 一一〇九ノ一)詩篇には斯う歌つてある。又ダニエルは異象の中に、「人の子の如き者が雲に乗つて來り、日の老いたる者の許へ往つた(ダニエル 七ノ一三)

のを觀たこともある。して見ると、イエズス様が斯う仰つたのは、我身のメツシアたること、御父天主の右に座し、世の終には、すべての人を審かんが爲に、空の雲に乗り、大なる威光を輝かして來るべきことを宣言し給うた譯である。然し彼等は頑として是等の證明を耳に入れない。たゞカイファは、自分の目的を達し得たのを喜んだ。彼はイエズス様に口を利かせた。死を宣告するに足るべき告白をさした。でも彼は飽まで巧な狂言役者だ。如何にも怖しい胃瀆の言を耳にしたと言はん許りに、上衣をサツと引裂いた。

胃瀆の言を吐いた！此上、何で證人なんか要らうよ。諸君は今胃瀆の言を聞いたのだ。何と思ふんです？

故に悲痛な聲を絞つて、衆議會の意見を求めた。正式の規定は、各員が個々別々に、意見を發表することになつて居たのだが、然しもう悪魔に魅せられた彼等である。其んな事を氣にも掛ける筈が無い。

死刑だ！

と皆が異口同音に叫んだ。夫からイエズス様は下役等の手に渡されなかつた。彼等は御顔に唾

を吐きかけるやら、拳を固めて御顔を撲り付けるやら、下僕の奴等までが平手で殴つやら、夫は夫は言語道斷な侮辱を加へた。殊に甚しいのは、イエズス様の御目を掩ひ、御顔を打ちながら、

キリスト様じや。誰が貴方様を打ちました。預言して下なさい、等と言ひ、其他、様々の胃瀆や、悪言を浴せ掛けたのであります。

イザヤは夙に此の悲しい場面を預言しました。「私を鞭つ者に我背を委ね、私の鬚を引抜く者に我頬を托せ、耻と唾とを避けるが爲に、我面を背けませんでした」(イザヤ)と。實際イエズス様は、吐かず、抗はず、斯くまで無理非道な虐待をも、ヂツとお堪へ下さいました。私等を愛し、身を以て私等の罪に代らんが爲に、飽まで氣強くお堪へ下さつたのであります。

(四) ペトロの否認と再度の審問

マテオ、二六ノ六九
マルコ、一四ノ六六
ルカ、二二ノ五八
ヨハネ、一八ノ二五

【第一の否認】、話は少しく前に戻るが、ゲツセマニの園に於て、イエズス様の捕はれ給ふや、ペトロも一應は他の弟子等と其場を逃げ失せた。然し間もなく冷靜に反ると、我身の意氣地な

さがシミ／＼と耻しうなり、後へ取つて返し、捕吏に尾いてアンナの屋敷へと行つた。愛弟子ヨハネも同じく引き返して来た。屋敷の門で、二人がハタと行遭つた。ヨハネは何んな關係からか知らぬが、兎に角、司祭長とは知合ひになつて居たので、難なく門内に入ることが出来た。然しペトロは然う云ふ關係はなし、已を得ず門外に立つて居ると、ヨハネが氣を利かして、門番の下女に一口言つて呉れた。ペトロは辛つと内へ這入らして貰ひました。

其の頃の大きな屋敷になると、門を入れば、可なり奥まつた廊下があり、其所に門番の控所を設けてある。其次が露天の内庭になつて居る。時は正に春も半の頃でしたが、夜間は猶隨分冷わる。大司祭の僕や、下役等は、内庭の真中に炭火を煨し、之に焼つて居る。ペトロは事の成行きを見届けたいと思ひ、僕等の背後に近き、最初はビク／＼して立つて居たらしいが、誰も氣付く者が無いのを見て、次第に安心した。皆と一緒に据り込んで、兩手を火に差出して、同じく暖つて居ました。すると門番の下女だか、彼が火光に坐して居るのを見て、傍へ遣つて来ました。熟々と彼を打眺めながら、

此人も彼と一緒にだつたんですわ、

と一座の人々に言ひ、夫からペトロに向ひ、

貴方もナザレトのイエズスと一緒にだつたんですね、

と申しました。下女が其んな事を言つたのも、實は無理もない話でした。ヨハネがイエズス様の御弟子だ、と云ふことは公に知れ渡つて居る。其ヨハネが態々出て来て、這入らして貰つた位だから、滿更無關係の者でもあるまいとは、誰の腦裡にも自づと浮み出る筈である。ペトロを愚弄して、困らす積で言つたのか否か、其邊は何とも分らぬが、然しペトロは冷りとした。強ち主を否む考も無かつたんでせうけれども、何時の間にか口を滑らした、

私知りません。貴女の仰有ることは解りませんよ、

と皆の前で斷言した。是が第一の否認であります。

【第二の否認】、斷然言ひ放ちました。ペトロも何だか薄氣味悪くなつて来た。因つて其場をはづして、門外へ出ると、偶ま一番鶏が鳴いた。然しペトロは未だ主の御言を思出さない。恰當その時、イエズス様は、アンナ方からピラトの館へ送られなかつた。ペトロも其後から尾いて

這入つたものが見える。すると復一人の下女が彼を見て、居合せる人々に向ひ、
此人も彼の仲間ですよ。ナザレトのイエズスと共に居たんですわ、
と言ひました。ペトロは狼狽へた。

私、彼人を知りません、

と否認しました。而も固く誓つて否認しました。少頃すると、又一人の男がペトロを見て、

君も彼等の仲間なんだ、

と言ふぢやありませんか。ペトロはいよく狼狽へて、

私、違ひます、

と否認しました。この二つが第二の否認で、第一のからすると、餘程力が入つて、夫だけ亦
憎々しうなつて來て居ます。

【第三の否認】、ペトロは其まゝ内庭へ行き火の傍に進み寄つた。僕やら、下役やら、様々の人
が往つたり來たりして居たので、其中に紛れ込んだら、氣に付く者もあるまいと思つたものら
しい。成るほど一時間ばかりは、誰も彼に注意しなかつた様である。然し皆が盛にイエズス様

を悪罵つて居るのに、ペトロ一人が、ツクネンと黙り込んで居ては、何うも様子が變に見える
のは分り切つて居る。

此男も彼に伴つて居たのだ。ガリレア人だもの。

誰かと言ひ出した。すると傍に立つて居た人々も一口になつて、ペトロに向ひ、

君は實際、彼等の同類だ。同じくガリレア人だもの、

と言ふではないか。ペトロは前後を忘れて、極力打消した。

人よ、私、あなたの仰有る所を存知ません、

と初に言出した人に答へた。傍の人々にも、

私は貴方等の仰有る彼人を存知ませんよ、

と斷然言ひ放つた。萬一存知ても居たら、何んな禍を蒙つても厭ひやせぬと、その誓に誼さ
へも加へた。然し彼等はなかく信じない。

君も確に彼等の一人だ。君の方言までが君を顯して居るからね、

と言ふのです。ガリレア人の方言、その一種特別の音調は、有名なものでした。ペトロも出來

るだけ、方言を出さない様に注意したでせうが、何うしたつて、お里は争はれぬものだ。お負
けに、大司祭の下僕で、ペトロに耳を切落されたマルクスの親族までが口を添へた、

僕は君を見たのだ。園で彼人に伴うて居るのを、

と遣り出した。流石のペトロも、今度ばかりは、開いた口が塞がるまいと思へば、然うでもな
い。彼は相變らず剛情を張つて、

知りません。彼人なんか知りません、

と繰返した。未だ言も終らぬ中に二番鶏が鳴き出した。ペトロも辛つと主の御言を思出した。

鶏が二度鳴かぬ前に、三度私を否認むであらう、

と仰有つた御言をハツと思出して居る所に、イエズス様が突然衆議會場からお出になつた。早
や審問が終り、死刑を宣告され、下役等の手に渡されて、外へ引張り出されるのであつた。
僕等はペトロを差措いて、立上つた。ペトロは一人ボツチになつた。イエズス様は振返つて彼
をお見詰めになりました。御目には、如何に悲しい、情ないと思ふ色を湛へてお在になりまし
たでせう。ペトロは忽ち悪かつたと悟りました。痛悔の情が急に湧き起つた。此處は長居すべ

き所ではないと思つて、直に屋敷を飛出した。そして甚く泣いて泣いて、自分の罪を悲みまし
た。

【再度の審問】、當時の習慣によると、夜間の宣告は無効と云ふことになつて居ました。非法な
事を遣つたと思はれてはならぬので、翌朝、司祭長、律法學士、民間の長老等は再び衆議會を
開いた。イエズス様を前に呼出して、今一度審問した。無論、その審問は長い時間を要したも
のではない。證人を喚出すのでもなければ、罪狀を調べるのでもない。たゞ死刑宣告の口實と
なるべき語を、イエズス様に繰返させた迄に過ぎないのでした。

汝はキリストであるか、我々に申せ、

と彼等は問うた。イエズス様はお答へになつた。

諸君に申したつて、諸君は逆も私をお信じなさるまい。又私の方からお尋ねしましても、
到底私にお答へもなさらねば、私をお放還しなさるまい。然し今より後、人の子は、全
能にて在す天様の右に坐して居るであります。

自分がキリストである、神の御子であることを明白にせられた。

然らば汝は神の御子であるか？

と彼等は問ひ詰めた。

諸君の仰有る通り、私は夫です、

と、イエズス様は臆する色なく、お答へになつた。彼等は一齊に聲を擧げた。

何で此上、證據が要るものか。自分で其口から聞いたんだもの。

斯う叫んで、死刑を宣告した。夫から直に羅馬の總督ピラトの前へ引出すべき手筈を定めました。

ペトロは使徒團の首領でした。信仰の熱烈な、元氣で、キビ／＼とした、申し分のない高足の弟子でした。夫だのに、下女風情に一聲かけられて、忽ち狼狽へまくつて色を失つた。其の愛せる主を否認しました。人間は弱いものはありません。信仰が熱いから、元氣があるから、徳に長けて居るから、安心はされません。立つてる人は、倒れはせぬか、何時も／＼用心せねばならぬのであります。

(五) ピラトの審問(其一)

(マテオ、二七ノ二
マルコ、一五ノ一
ルカ、二三ノ一
ヨハネ、一八ノ二八)

【ユダの失望】、金曜日朝、ユデアの教師等は形ばかりの審問をなし、夫からイエズス様を縛つて、ピラトの官廳へ引立てた。斯くて主は宗教裁判より普通裁判へ、衆議會より羅馬總督へ、カイファよりボンシヨ・ピラトへ引渡されなされたのである。時にユデアはその獨立を失ひ衆議會はあつても、その實權は羅馬政府の手に收められ、死刑は宣告しても、總督の認可を得なければ、之を執行するを許されぬのであります。

神殿の面北の隅に、アントニア城と云ふがある。羅馬の戍兵が之に屯して、エルザレムを監視し、總督も過越祭に當つて、エルザレムへ乗込んだ際は、其所に居住したものである。カイファの屋敷からは餘り遠くない。衆議會の面々は、早朝からイエズス様を引立て、意氣揚々とアントニア城へ登つて行く。所が裏切者のユダ奴です。イエズス様が到頭死に定められ、ピラトの裁判へ引かれ行き給ふのを見て、今更の如く我身の罪が怖しうなつて來た。悪い事をした！先生を賣つた！と思へば、良心の責に胸の中は煮え返らん許り、もう立つても居ても居られな

い。昨夜受取つた銀三十枚を手にして、司祭長等の前へ出て行つた。公に自分の罪を訴へた。「私は罪を犯しました。無罪の血を賣りました」と云つて其銀貨をつき返した。我々に何の關係があるか？お前の事だ、

と彼等は冷かに答へて、取合つて呉れない。夫も其筈で、彼等がイエズス様を死に定めたのは罪があると認めたらからでは無い。たゞ其の深い怨を晴すが爲だつたのだ。今となつて、悪かつたの、何の後悔したからつて、取合ふ筈はありやしない。

司祭長等の冷淡極まる返答に、ユダは全く失望した。銀貨は神殿に投棄して、其まゝ立去つた。傳説によると、彼は其足でエルザレムを出で、セドロンの谷がヒンノンの谷と合する所に到り崖の上に差懸つて居る樹枝に帯を吊して、ブラ下つた。然し其帯が切れたか、樹枝が折れたかして、體は俯伏に落ち、崖下の岩に強か腹を打當て、爲に真中から裂けて、腸が悉く迸り出た。身から出た錆とは云へ、如何にも可哀相でありました。

司祭長等は、ユダの投棄した銀貨を拾ひ集めた。然し血を賣つた價だから、賽銭箱に入れてはならぬと云ふので、協議の上、夫で陶匠の畑を買ひ、旅人の墓地に充てた。然しその墓地の

由來が、エルザレムの住民に知れ渡り、彼等は此畑を名けて、『ハケルダマ』即ち『血の畑』と呼ぶ様になりました。

【ピラトの性格】、教師等は、總督府の前にイエズス様を引張り出した。然し自分等は内へ入らうとはしない。異教者の家は汚れて居る。其家の門内に踏み込めば、身に汚を受ける。今日はニサン月の十四日だ。夕方には過越の羔を食せねばならぬ。身に汚があつては、夫が出来ない。彼等は斯う思つて、門内へは一步も踏み込まぬのでした。何の罪も無い者を平氣で殺す程の彼等が、異教者の家に入るのを厭がると云ふは、如何にも矛盾した遣方ではあるまいか。嘗てイエズス様が彼等を咎めて「子子を漉出して、駱駝を呑むのだ」(マテ二四)と仰つたのは、誠に適評と謂はなければなりません。

時の總督はポンシオ・ピラトと云ひ、平生は地中海沿岸のセザレアに住んで居るのだが、大祝祭の頃には非常な人出で、よく騒動が持上るものだから、態々エルザレムに乗込んで、警戒を嚴重にするのであつた。ピラトは氣力も無い、徳もない、極く平凡な人間で、ユデアに總督たること十年。平素ユデア人を憎んで、之を虐待し、一揆の起る毎に、之を血の海に沈没

めて顧みない。固よりユデアの宗教を輕視んじ、衆議會員なんか、頭から馬鹿にして居ただけに、能くイエズス様の無罪を認め、心から同情を寄せ、何とかして之を救はんものと、色々工夫を凝したものでした。教師等が總督の官廳へ入らうとしないものだから、ピラトは已を得ず自ら立關へ出て来て、

此者に對して、何を告訴へるのだ、

と問ひました。原告の申立を尋ねたのです。教師等は、單に自分等の判決を認可して貰ふ考で居たのに、ピラトから斯う出られては、些と癢に障つてならぬ。

此者が若し悪人で無いならば、私等は之を閣下に付しはしませんよ、

と太々しい返答をなした。ピラトは忽ちムツとして、

君等が引受けて、その律法の儘に審いたら可からう、

と十分皮肉を言つて遣りました。彼等が審いたからつて、破門を宣告するか、答を三十九ほど加へるか、夫以上に出ることは出来ないのだ。

私等は人を殺すことが出来ません、

と彼等は答へた。若し死刑執行の權が、其頃、ユデア人の手にあつたら、イエズス様は必ず律法の定に従ひ、石殺に處せられ給うたに相違ない。然し主が十字架に磔けられて御死去遊ばすのは、天主様の思召でした。随つて事の斯く成り行いたのも、全く天主様の神秘的な御攝理に基いたもの、と思はなければなりません。

ピラトが詳しく審問を遂げた上でなければ、逆も自分等の宣告を認可して呉れさうにない、と見て取つた、教師等は、口を揃へてイエズス様の罪狀を數へ上げた。而も唯宗教上の理由だけを提出しては、逆もピラトが取上げて呉れないので、成るべく其訴に政治的色彩を帯びさすべく務め、

此者は我國民を惑すのです。セザルに税を納めな、と禁ずるのです。自分は王なるキリストだ、と申すのです。我々は確に夫を認めました、

と申立てた。此に於てピラトは再び官廳に入り、イエズス様を前に呼出して、其方は果してユデア人の王なのか？

と問ひました。自分の無罪を證明するには、願つてもない好氣會でした。然しイエズス様は我

身の事なんか露ほごも思ひ給はぬ。出来ればピラト其人に靈の眼を開かせ、救靈の恵を得させたいものと思ひ、

貴官は御自分から之を仰有るんですか。或は人が私に就て、貴官にお告げ申したんですか、ご倒に反問されました。

我輩がユデテ人でもあると思ふのか。其方の國民と大司祭とが、我輩に其方を引付したんじや。其方は何を爲した？

ピラトは反問されて、些と癢に障つたらしい口吻を洩した。然し是によつて、自分から言つたのでは無い、人が言はせたのだ、と云ふことだけは分つて來た。其所でイエズス様は、我身が實際、王たる事、然し其王國が、現世のものに非ざることをお告げになつた。

私の國は現世のものではありません。若し私の國が現世のものですと、私の臣僕は必ず戦つて、ユデア人の手に付されない様に致すでういませう。然し今や私の國は現世のものではありません。

ピラトは更に問ひ返した。

然らば其方は王なのか。

イエズス様は少しも躊躇せず、堂々とお答へになつた。

貴官の仰有る通り、私は王です。私は眞理に證明を與へんが爲に生れ、之が爲にこそ世に参りました。總て眞理に據れる人は、私の聲を聴きます。

其王國の性質を明白にされた。實にキリスト様の使命は忠實に眞理を證明するに在るのです。随つて眞理を愛し、眞理と親しい關係を保てる人は、其の御聲を聴き、之に服従ひ、之が民となりません。然し現世以外を思つた事すらない、粗笨蕪雜な頭惱の持主たるピラトが、斯る高尚な御話を悟り得よう筈がない。

眞理とは何じや、

と言つたまゝ、お答も待たずに、直様ユデア人の方へ出て行つた。そして司祭長や、群衆に打向ひ、

我輩は何の罪も彼に認めない、

と斷然言ひ放ちました。ピラトの應答振によつて見ると、折角の獲物も空しく取逃すことにな

りはせぬか、氣遣はしいものだ。司祭長等は、狼狽へずに居られない。一齊に聲を張り上げて、此者はガリラアを始め、此地に至るまで、ユデア全國を教へて、人民を煽動するのです、と叫び出した。其頃、熱信家と呼ばれる愛國黨があつた。羅馬に服従するのを、何よりの屈辱と思ひ、機會さへあれば、暴動を起し、反抗を試み、總督府を手古摺せるのでした。彼等はイエズス様の福音宣傳を、其んな熱信家の獨立運動でもあるかの如く申し立て、ピラトの神經を尖らせようと計つたのである。然しピラトだつて、易々と彼等の口車に乗る様な無知、無經驗な男ではない。如何にも神々しいイエズス様の御風采と、躍氣になつて騒ぎ立てる司祭長等の態度とを見比べて、早くもイエズス様の無罪を讀んだ。今度の告訴は、全く司祭長等の嫉妬に出でたのだと感知つた。何の罪もないと明に分つて居る人を、死刑に處すると云ふはピラトも流石に忍び難く思つた。然らばとて、司祭長等が異口同音に大聲あげて申し立てるのを無視して、之を放免するだけの勇氣も無い。加ふるに司祭長等の肩を持てる群集は、刻一刻走せ加はつて、官廳の門前に黒山を築いた。何うしたら可いか、當惑して居る所に、「ガリラア」

と云ふ語が耳に入つた。「ガリラア人か」と問うて見ると、果して然うだ。ヘロデの配下の者だ。そしてヘロデも過越祭の爲め、當時エルザレムに来て居る。勿怪の幸ひ、是で責任遁れが出来た、と彼は打喜び、早速ヘロデの方へ送りやつて了りました。

【ヘロデの嘲笑】、ヘロデのエルザレム離宮は、神殿の西南の角を餘り遠く隔て、居ない、舊アスモニア家(マカベ)の宮殿であつたらしい。彼はイエズス様を見て大に喜んだ。早くからイエズス様の噂を耳にし、一度遇つて、其奇蹟を見たいものと、熱く望んで居たものでした。無論、深い宗教心とてあるのではなく、ホンの淺慮、短見、人情の何たるかも辨へぬ程の彼は、イエズス様を一個の手工師位に考へて、眼前に奇蹟を行はして見たいものと、豫てより下らぬ好奇心を抱いて居たものである。彼は言を盡して種々の事を尋ねた。然し一つとして答を與へるに足りる様な問では無い。イエズス様は何ともお答へなさらぬ。司祭長、律法學士等は傍に在つて頻りに訴へる、ピラトの前で申し立てた様な罪狀を繰返して訴へるのに、イエズス様は堅く口を噤んで、一言もお答へなさらぬ。固よりヘロデは司祭長等の申立を取上げる考はない。然し幾ら問うても、問うても、何のお答もなさらぬのに業を煮やし、執政官だの、